

朝、登山。後、英國新聞記者、畫師、告別來訪。本日午後四時、韓國勅使權重顯來著、面會後夜食ヲ共ニス。隨行參領趙性根、岩村、落合、奈良ニ菓子ヲ贈ル。岩村羊羹、柿到來、幕僚ニ分配ス。同夕、鮫島來ル。次長來電持參、今後作戰意見ノ事ナリ。工事不進捗。

同日 六日 好晴

朝、權重顯一行豐嶋山ニ登リ、わ家國二十八砲臺ヲ見ル、河西嚮導ス。本日歸還、大砲彈二ツ韓帝ニ獻上ス。六時出發。本日參謀九十一高地ニ行ク。山岡二龍山ニ、井上松樹山ニ行ク。夜、報告ヲ聞ク。朝、韓使ヲ訪、答禮ス。濱口歐醫正來訪ス。

同日 七日 好晴

山岡盤龍山ニ、岩村二龍山ニ、又白井、磯村、龍山ニ行ク。橋本ノミヲ連登山、豐嶋ト二龍山觀測所ノ事ヲ談ス。豐嶋陣地偵察ニ行ク。午時歸ル。英國新聞記者ヨリ明日招待辭ス。參謀長、齊藤ト大孤山行キ。韓皇ノ煙艸分配。石本來ル。草場謹三郎氏ヨリカラスミ一箱、ウニ貳瓶到來。遠江國磐田郡二俣町渥美ヒサ子ヨリ新聞及端書到來。

同日 八日 好晴

朝、井上參謀、兼松、橋本ヲ連レ、火石岑子ヲ經テ水師營中村旅團長ノ幕舎ニ到ル。同歩第二聯隊、工第一大隊、松樹山麓幕ニ到リ、井上及工兵中隊長ト登山シ歸ル。中村同行、C砲臺下ニ午食、第二聯隊ノ兵、露器ニテ作りタル箸ヲ交換シ、中隊長ニ渡ス。第一ノ鈴木參謀來ル。此ニテ中村ニ別レ、又隈部ノ幕ニ茶ヲ喫ミ歸ル。國司少佐兒玉大將ノ書狀持參、傳言アリ。夜食時海軍砲陣地ノ件ニ付參謀長ト論ズ。夜、書ヲ認メ兒玉ニ答フ。本日英人天長節ニ付シヤンパンヲ贈ル。本日工兵三中隊北方ヨリ來著。

同日 九日 好晴

岡野少佐北方ニ歸ル。書ヲ兒玉大將ニ托ス。午後、橋本少尉ノミト第九師團ニ到リ、大島中將同行、歩シテ平佐旅團長ノ處ニ到リ菓子ヲ贈リ（カキモチ、ウニ）、服部聯隊長ニ菓子、ウニヲ贈ル。二龍山斜面ニ登リ、大島ト別歸路一月少將ヲ訪ヒ、途ニ又大島中將ト會シ、又總隊備隊西山中佐ヲ訪テ歸ル。

同日 曇、午後好晴

朝、磯村參謀、橋本少尉ト第一師團ニ到リ、歩シテ第一旅團長馬場少將ヲ訪ヒ、菓子ヲ贈ル(尉火梅)、共ニ海鼠山ニ登リ、右翼ヨリ巡視、寺田中佐謙辱ス。倉島大尉(註)ノ幕ニ少休、觀測ニ到リ見ル。寺田中佐ノ本部ニ馬場少將ト會シ、溫飽ノ餐ヲ受ク。北ニ至リ馬場ト歸ル。山本少將ノ墓ヲ拜ス。第一師團ニ到リ、松村中將ト小話、騎シテ歸ル。途ニ左家屯ニ外國武官ヲ訪、昨英人天長節ノ案内ヲ謝シ歸ル、已ニ夜。大庭中佐二龍山ニ登リ、石ヲ採リ歸ル、醉談ス。筑土海軍大尉東郷大將ノ書狀持參。

〔註〕——著者曰く——倉島大尉、名は富次郎、後の少將。當時は歩兵第一聯隊第九中隊長、曩に金州の北門外に重傷を負ふて陣歿した乃木勝典の所屬中隊長であつたのである。

同日 十一日 晴

朝、橋本ト豐嶋山ニ登ル。射撃ヲ見ル。ギリヤク射撃ヲ行フ、老銃山ニ隠ル。一時歸ル。伊集院海軍大尉旅順寫景ニ書ヲ需ム。地理不レ及ニ人和一ト書ス。夜食シヤンパンヲ飲ム、誕辰ノ故ナリ。夜銃聲

同日 十二日 曇、霧
講シ。大浦遞信大臣ヨリウイスキ小箱到來。石黒男、河野奈良知事、横堀三子ヨリ來書。

同日 十三日 曇、大風
本日砲兵司令官、各參謀長會議、午食ヲ共ニス。留守宅及ビ上田中將ヨリ來書。大阪東末寺橋森正則氏ヨリ勸降意見書到來。寶積寺驛長ヨリ惣代シテ新聞送り來ル。大谷光瑞伯ヨリ來書。第一師團ヲ當軍ニ配屬セシメラル。

同日 十四日 晴後曇、大風(北)
朝六時白井中佐ヲ總司令部ニ遣ル。山岡參謀ト小孤山ニ登ル。武内少將ヲ訪、小話。朝、出掛ニ榊原工兵部長ヲ訪フ、午時歸、食後榊原大佐來リ意見ヲ開陳ス。參謀長ト聽ク。今曉四時、二龍山敵襲アリ、撃退ス。

同日 十四日 晴後曇、大風(北)
朝、第九師團長ヨリ請求出頭、十時より面會、感狀ノ事ナリ。午食ヲ共ニス。細谷少將轉任ノ報アリ出電ス。白井中佐より來電。井上參謀北砲巡視、夜歸。



(者著はるて立に側右) 所の死戦の君典保木乃

同 十九日 好晴

朝、岩村中佐來り聯合艦隊參謀土屋中佐東郷大將ノ書狀持參ノ報アリ。參謀長ト待ツ。午後着
 夜、岩村、土屋兩中佐ト會食。朝、第七師團參謀蟻坂少佐來着。又稻垣騎兵少佐英國行ノ途次來訪。
 同氏ニ擊音、馬具類買入ヲ依托ス。有賀博士山鷄二羽持參。

同 二十日 好晴、霞アリ

午前九時より登山、中村少將ヲ山上ニ呼ブ。參謀長ト共ニ突撃計畫ニ付談合ス。齋藤第十一參謀長
 モ來ル。午食ヲ共ニス。本日十時二龍山外壕爆破ヲ行。良好。吉田旅團長、井上勝ト登山、四時下
 山。英國新聞記者ノ宿所ニ茶ヲ飲ム、兵卒ニ接待ノ建札アルニヨル、安原通辯ス。井上子爵より酒二
 種、カキモチ、吉田より酒ノ贈アリ。保典ヨリ來書。五時半ヨリ二龍山開戦。殆ンド夜ヲ徹ス。

同 二十一日 好晴

參謀長會議。午後第七師團長、齋藤旅團長等來宿。井上子爵、土屋中佐此汽車ニテ歸ル。東郷大
 將ニ山鷄二羽ヲ贈ル。參謀長會議夜ニ入ル。保典へ勝典ノ衣、湯地ノ皮足袋ヲ送ル。留守ニ送書ス。

毛利子爵父子、集作ヨル來書。

同 二十二日 曉來風、雪降ル、日出晴

早朝第七師團長、兩旅團長ノ宿所ヲ訪フ。土屋中將來ル、攻撃計畫ノ事ナリ。午食ヲ共ニス。

午時より十五珊彈ニテ旅順大火アリ。集作ヨリ來書、元敏公歌二首入り。宮城縣百理郡逢隈村鹿嶋松

原錦吾氏來書、歌アリ。留守宅より來書。夜九時、

勅語ヲ賜フ、奉答。齋藤少佐間諜報告ヲ開ク。

同 二十三日

朝、齋藤少將、大迫中將來ル。中村少將ヲ呼ビ任務ヲ命ズ。午食ヲ共ニス。福嶋少將來ル、同

斷。擲澤少將及池田大佐ヨリ來書。旅順行き郵便來着。

同 二十四日 好晴

午前、大迫中將來リ、齋藤少將ト第九、第十一師團行キ。午後、豐嶋山ニ登ル。夜、山縣元帥ヨ

リ詩アリ(電報) 百彈激雷天爲驚 合圍半歲萬屍橫 精神所到堅於鐵 一舉遂屠旅

順城 林鍊作より來書。本日全身浴ヲナス。

同 二十五日 曇

朝、大迫中將、齋藤少將來ル。各師團攻撃命令ヲ讀ミ、午後、第十一師團、第九師團ニ到リ、師

團長ト談ズ。參謀長臥褥。午後大風。

同 二十六日

朝より豐嶋山へ登ル、一泊。

同 二十七日

同夕、二〇三攻撃ヲ第一師團ニ命ズ。

乃木將軍の日記帖は、何處の店にでも賣捌かれてをるやうな模造革の表紙の附いた小形の縦罫入りのものであるが、第一頁に "NO. 1" の青鉛筆で自署し、本文は黒の鉛筆を以て記入してあり、各日の記事終つてから二三行か、五六行必ず餘白が殘されてをる。そして十

一月の日記は、こゝに掲げたやうに、二十七日までしかない。十二月一日に至るまでに五頁——一頁七行——の餘白が残されてゐるこゝから推測すれば、後に記入する考へであつたものも思料されるが、この三日間は軍務が殊に多忙であつたので、日記を附ける餘裕もなかつたのであらう。明治三十七年十一月二十七日から十二月五日に至る期間には、旅順の攻圍戦に特記せねばならぬ多くのこゝがあつたのであるから……。

「必ず攻略せねばならぬ！」と大なる決心の下に著手した陸正面の攻撃——第三回の痛烈な總攻撃——は、遺憾ながら其の目的を達成するこゝ能はず、悲壯な白樺隊の快擧も不成功であつたがために、陸正面の攻撃は一時之を中止し決し、こゝに二〇三高地の攻略に最善を盡すこゝになつた。

明治三十七年十一月二十七日、乃木將軍は二〇三高地の力攻を嚴かに命令したのであるが、如何なる堅い防備があつても、争で攻略し得られぬ道理があらう——我が第一師

團の健兒等は、友安少將（治延、後の中將）の後備歩兵第一旅團を右翼に、六十餘門の砲火に援護され、猛烈として突撃を試み、二十八日の夜半迄には占領し、全軍の間に「二〇三落つ」の快報が傳へられたにもか、はらず、間もなく執拗な敵の逆襲を受けて奪還せられてしまつた。……云ふ悲報に接し、失望は攻圍軍に搖曳したが、乃木將軍は大迫中將（尙敏、後の大將）に第七師團の精銳を襲に攻撃に當つた第一師團の諸部隊を指揮して攻略に當らしめた。死力を盡して突撃する日本軍の猛威には、流石に敵も僻易したのであらう。三十日には山頂を終に放棄したが、間髪を容れず逆襲して再び奪還してしまつたのである。

二〇三高地は、我軍も文字通り死力を盡して攻略に努めたが、敵も頑強に守つて容易に退かなかつた。こゝ云ふのは——旅順の死命が此の小山にか、つてゐたからである。開戦以來、旅順口にある露國の海軍及び陸軍は、殆んど犬猿も管ならざる間柄で、陸軍側が海軍を厄介者のやうに取扱へば、海軍は陸軍側を悪罵するこゝ云ふやうに、兩者の間は圓滑を缺き、反目の極にあつたが、皇軍のために日一日と壓迫せられ、終に「二〇三高地危し」になつて

からは、今まで陸軍を罵り、白眼してゐた海軍側も、漸く陸軍を援け、快く一致して二〇三高地を守るこゝになつた。レンガード少尉の手記にも、

其頃二〇三高地で戦死するものは多かつた。自分は屢々山下より砲臺に向けて援兵を送るのを目撃した。毎日、毎日新しい兵士が登山したが、それは殆んど水兵である。自分は之を目撃する毎に胸が一杯になつた。併し彼等は皆な如何にも嬉しそうな顔付をしてゐるに、はらず、何處となく沈んで、足取も何となしにとぼくしてゐた。即ち一見したのみでも甚だ疲労してゐることが分る。この補充兵の中に生還するものが何人あるであらう。今こそ全中隊揃つて行くが、夜には如何になるであらう？ 朝登つた全中隊も、夕方には唯だ一人も残つてゐない。そして夕方には又も新手の中隊が登山すると云ふ状態、忽ち生死の境をわかつたのである。

「云ふやうな一節がある。この水兵の中には十七、八の少年もあつた云ふ。彼等は唯だ祖國のために、祖國のために！」と喜んで戦場に行き、そこに悔恨もなければ、怨嗟もなかつたのであらう。

かう云ふやうに反目の極にあつた露國の陸軍及び海軍が今や死力を盡し、一致して二〇三高地を守り、四圍の敵の砲臺からは眞に彈雨を注いで我軍の突撃を巧に阻止する。肉弾に次ぐに肉弾を以てしても、猶ほ確實に其の山嶺を我が掌裡に收めるこゝが出来ぬ。全く遺憾に堪へぬが、如何にもなし能はぬのである。併し一日も早く占領せねばならぬ事情の下にあるので、我軍は毫も損害を顧みることなく猛進する。見よ、各處の我が陣地から二〇三高地に向つて集中せられる砲火を。二十八冊の巨彈が敵の堡壘に命中し、聽て炸裂する時、鐵板、レール、木材、土砂は、そこに死守してをる敵の將卒と共に微塵になつて飛ぶ。飛べば健氣にも新しい將卒が代つて死守し、我が突撃を支へる。當時の赤城艦長江口中佐（鱗六、後の中將）の觀戦記の一節に「……味方軍が二〇三の中腹にだにの群りついたやうに見える。鳩灣の鴨湖嘴砲臺、西太陽溝の北砲臺が我軍を射つてをる」云々こあるが、全くだにのやうに我軍は二〇三高地の中腹に群つて肉薄したのである。

攻撃中に乃木將軍の督戦しつ、あつた一六四高地即ち高崎山から二〇三高地を遙かに遠望

するならば、險しい要害であることが點頭かれるが、殊に我軍の向つた背面は頗る急峻であるために、如何にだにのやうに中腹に群りついても、猛烈に敵の砲臺から狙撃せられ、危険を冒して山嶺に近づいても、急峻なるがゆるぎに登ることが困難であり、頂上にある敵は待構へて射つ。鬼神も猶ほ斯様な戦ひには屏息せざるを得なかつたであらう。併し一日も速かに攻略せねばならぬので、我が将卒は進んで死地に入つた。

◇ 保典も亦陣歿す

「二〇三落つ！」の快報に次いで「奪還された」云ふ悲報は到る。乃木將軍の十一月の日記が二十七日までしかなく、二十八日から三十日までの三ヶ日間を缺いでゐるのは、如何に此の方面の攻撃が緊張し切つたものであつたかを象徴して餘りあるものであらう。確實に占領する日が翹望せられたのである。

何故に二〇三高地の占領が待たれたか。勿論、海軍側からの切實なる要望があつた。この

高地を一日も早く奪取し、そこに觀測所を設置し、間接射撃によつて港内に潜む敵艦を悉く殲滅し、バルチック艦隊に對する準備をせねばならなかつたからであるが、海軍側の要望に劣らず、「速かに旅順を取るべし」を強求したのは、大本營であり、又更に滿洲軍であつた。乃木將軍の十一月の日記に依れば、七日に「……次長來電、持參、今後作戰意見ノ事ナリ」にあるのは、時の參謀次長岡少將（外史、後の中將）が山縣侯の意を傳へたものであらう。その次の「工事不進捗」の五文字は吾々の胸を力強く打つ。又十三日に「……白井中佐ヲ總司令部ニ遣ル」にあるが、白井參謀は第三軍の作戰主任であつたので、滿洲軍の總司令部に目下の實況を具に説明せしめ、又更に新しく作戰の打合せもあつたのであらう。そして十四日には「……白井中佐ヨリ來電」になり、翌日の夜には「……總司令官より長電アリ、攻撃ノ催促大旨」にある。

既に繰返して記したやうに、敵帥クロバトキンが未だ攻勢に轉ぜざる以前に其の機先を制し、積極的に撃破する軍略上からも、滿洲軍は乃木軍の北上を待つてゐた。而して「一日

も速かに攻略せよ」ミ矢の催促である。こゝに於て「一日も速かに攻略するから何ぞかして
彈薬を送れ」ミ要求すれば、「……彈薬は次の會戰の爲めに一發でも多く必要だから第三軍は
強襲を以て旅順を取れ」ミいふ。乃木將軍は自ら第一線を巡視して將卒を勵ますと同時に、日
記の語るやうに幕僚、師團長を召致して攻略のこゝを熟議し、最善を盡して倦怠する處がな
い。そして乃木軍の首腦でも「十一月中に必ず旅順を取る！」ミ總司令部に誓ひ、死力を
傾けて力戦したのである。

「十一月中に必ず旅順を取る！」ミ誓つたにか、はらず、依然として其の結果が不十分
であり、期待に副ふものが多分ないので、煙臺に滞陣中であつた兒玉大將——源太郎、滿
洲軍の總參謀長——は、又復自ら旅順に向つた。滿洲軍から御目付役として福島少將（安
正、後の大將）が派遣せられてゐるのに、總參謀長の旅順行！ 當時に於ける緊張さが宛
に想像せられる。局外者の村度を許さぬものがあつたのである。
汽車に依つて南下し、金州に著いた兒玉大將に「二〇三が落ちました」ミ云ふ電話が齎さ

れ、長嶺子に到着した時は「奪還された」ミの報があつた。出迎へた大庭中佐（二郎、後の
大將）に「二〇三を取返されたさうだな」ミ問はれるので、中佐が「ハイ」ミ答へれば、大
將は「困るぢやないか」ミ詰られるやうであつた。氣鋭の大庭氏が「戰爭のこゝですから取
つたり、取返されたりも致します」ミ力ある言葉で答へた。蓋し「勝敗は兵家の常、今に屹
度ミつて御覽に入れます。第三軍の意氣は誠に豪壯ですから御心配御無用、各師團は善く戦
ひます」ミの意味を言外に強くひかされたので、大將も謹嚴な顔色で黙し、又語らなかつた
ミ云ふ。兒玉大將は十二月一日から柳樹房にも起臥し、高崎山にも野營し、二〇三高地背
面の塹壕の中をも往復して督戦したのである。

乃木將軍ミ兒玉大將が二〇三高地の攻撃を絶えず督勵してゐた高崎山の頂上には、當
年を偲ぶ石柱が建てられ、その表に乃木將軍は「我軍主力據此、以拔三爾靈山壘」ミ誌し
てをるが、歩を一轉すれば、左に廢寺があり、右は谷間になつて、そこには今や雜木ミ松ミ
が生茂つてをる。併し二〇三の攻撃の際は、一個師團以上の將卒が TENT を張つて滞陣して

をつたふ。「この狭い谷間に……？」と疑問も挿まれるが、中腹には猶ほ乃木、兒玉の兩將軍が一枚の毛布にくるまつて僅かに一睡したと傳へられる穴居の跡もあれば、山から亦山へ通ふた壘壕を偲ぶいろくのものもある。

かう云ふやうに乃木、兒玉の兩將軍が苦辛し、督勵したがために、死守して退かうしなかつた執拗な敵も、明治三十七年十二月五日午前十時二十分、我軍のために二〇三高地を全く占領せられてしまつた。乃木將軍の日記にも「十二月五日、朝ヨリ二〇三砲撃、九時ヨリ齋藤支隊前進、目的ヲ達ス」があるが、この日に二〇三高地は陥落した。そして旅順の我が掌裡に收められるのも亦終に時の問題になつたのである。

二〇三高地は陥落した！ 二〇三高地は陥落したが、この攻撃中に乃木將軍の第二子保典は、終に陣歿してしまつた。歩兵第十五聯隊小隊長として、明治三十七年三月十九日、征途に上つた保典は、兄の勝典が金州に於て戦死した後、第一師團の衛兵長に轉任し、又更に後

備歩兵第一旅團副官となり、友安少將の下に二〇三の攻略に従つたが、十一月三十日、老鐵山から飛來した砲弾が地下に設けてあつた旅團司令部の審室に命中し、司令部員の多數が死傷し、旅團長と副官は恙なきをえたが、急速に司令部員を補充する必要上から友安少將は、揮下の第二十八聯隊長の村上大佐に頼りに人員の派遣を命じたが、時は攻撃の最高頂であり、電話も通ぜず、使者を出さうにも副官の外にゐない。そこで保典を其の特使たらしめたのである。

然るに要件は果され、要求した司令部員は充填せられたが、特使として出た保典が歸らぬので、探させれば、敵弾のために前額部を打貫かれて戦死してをつた。正確なことは明かないが、保典の仆れたのは、その日の午後四時頃であつたらしいと云ふ。三十日の夜晩、軍司令部から第一師團に派遣せられてゐた參謀の齋藤少佐（季次郎、後の中將）から其日の戦況を柳樹房の白井中佐に詳しく報告した序に、

「……詳しいことは分らぬが、保典さんがやられたらしい」

この電話であつた。時は夜半、であつた。云ふよりも、寧ろ翌日の午前零時か、一時頃であつたらう。報告を受けた白井中佐は、即刻、乃木將軍の部屋に行つた。その足音に氣ついたものであらう。將軍の室がバツミあかるくなり、中佐が入らうとする刹那、微かな蠟燭の光がゆらめき、腕り頭部に結んでゐた鉢巻を取りつゝ、ある將軍の姿が判然と映じた。例のやうに快活に戦況を報告し了した白井中佐は、

「……時に保典さんが戦死されたらしいこの報告がありました」

「淡く附加した。併し保典さんが戦死されたらしい……」を聞いても將軍は、全く平常に變つた様子がなく、

「ア、左様か」

「答へて言葉がなく、白井中佐も亦淡然と一揖して「誠にどうも……」を將軍を正視しながら後退に辭したが、幕僚の間でも「弔辭を述べたものか」「それには及ばないだらう」話題には上つたが、場合が場合であつたので、殆んど感傷を伴ふこともなかつた。翌日、乃木

將軍に隨つて戦線に向つた副官の河西大尉が、

「保典さんが戦死されましたさうで……」

「弔意を表した場合にも、馬上の老將軍は微笑し、少し仰向きになつて靜かに前進を始めながら、

「オオ」

「答へたのみであり、又他の人からの挨拶にも感傷的の應答はなかつた。云ふが、將軍自らは十二月一日の日記に「……今朝、白井中佐、保典昨日戦死ノ事ヲ告ゲ來ル」を誌してをるのである。

勝典の戦死して半ヶ年後に保典も仆れた。曩に掲載した十一月の日記の中にも「保典ヨリ來書」も、又或は「保典ニ勝典ノ衣、湯地ノ皮足袋ヲ送ル」も云ふやうな文字が列ねてあるが、明治二十九年六月十五日、仙臺に在任中の將軍が靜子夫人に與へた手束は、保典に對する將軍の情を餘蘊なく述べたものであるがゆゑに、こゝに記すであらう。

今日ころハ無事ニ歸宅相成候事ニ存候。土曜日朝高行殿被レ參候而保典之儀相談有
レ之候へごもこはり置き申候。此儀は其許よりも保典へよく御申聞ケ置キ可レ被レ成
候。右様の事ハまづよくしからずニ存候間、ほかより又々申參候而もこ
はり可レ申候。我等事今日よりじゆんかい、たし、十九日に歸り可レ申候間、野澤事は參
り候てよろしく、高橋え申付置候。母上様御出之儀ハ御いそぎ被レ成候や如何や、御よ
ふす次第申越可レ被レ成候。まづは用事のみあらしくかしこ。

六月十五日

まれ典

静子殿

この手紙は「保典を養嗣子に……」親戚の乃木高行を介して懇望せられた時、これを謝
絶し、且つ將來に於て左様なここのあつた際にも、決して心動かすことなく、必ず峻拒する
ように諭したものであるが、保典は時に十五であり、二〇三高地の背面に於て戦死した時

寄兒玉源太郎將軍 (四八七頁参照)

意氣震天地 精誠感
鬼神名利如糞土 報
國盡忠人
明治癸卯寒露後一日
藤園兄清鑒 典拝

兒玉伯爵藏

そのもので、猶ほ今日でも其の刹那の……即ち凄絶の深い印象は、恰も烙印されたやうに忘れることが出来ぬ」

○三ニ登ル。渡邊、村上兩聯隊長、觀測將校等ニ握手……」記してをる。

鐵血を以て奪取した爾靈山の頂上に立つて展望を恣にするれば、往年の我が將卒の如何に惡戰、苦闘したかを偲ぶことが出来る。而して力攻に當つた人々がだにのやうに群りつゝた急峻の背面を俯瞰すれば、松の生茂る間に隱見する一基の墓標らしきものがある。これは保典の陣歿した處で、急峻の坂を小走りに降つて標前にたてば、「乃木保典君戰死之所」に鏤刻し、野生の花が何本か捧げられ、「我子の戰死に泣かない親も、保典少尉の前で泣く」云ふ木札も見える。爾靈山を訪問するものは、必ず此處に到るであらう。

「乃木保典君戰死之所」にして墓しなかつたのは、こゝに保典の骨も、その他のものも埋められてゐないがためか。否、左様でなく、深い理由がある。臺石の裏に「明治三十七年十一月三十日、乃木將軍ノ次子少尉保典君、此所ニ戰死ス。長子中尉勝典君、曩ニ金州南山ノ戰ニ歿ス。是ニ至テ將軍復承繼ナシ。役罷テ時人少尉ノ爲ニ墓ヲ此ニ建テ、哀弔ス。四十二年十一月、將軍適來リ視テ曰ク、旅順ノ役戰死スル者、豈獨吾兒ノミナラムヤト。遂ニ命ジテ撤去セシム。聞ク者歎歎セザルハナシ。嗚呼一ハ建テ、一ハ撤ス。其情其義世教ニ關スルアリ。本會或ハ將軍ノ旨ニ違ハンコトヲ恐ルト雖モ、唯憾ム、春風秋雨、其事其蹟ト漸ク堙滅セムトスルヲ。因テ石ニ題シテ以テ來茲ニ傳フ。大正七年九月、旅順乃木將軍景仰會」ニ刻してある。

乃木將軍の十二月の日記を見れば、二十一日の記事中に「……又二〇三ノ海軍觀測所ニ登リ、保典ノ墓ニ詣ズ」云々こゝあるが、當時の「保典の墓」に誰の心遣りか、水を供へたものがあり、缺けた茶碗に水が盛上つて凍つたまゝにたふれてゐた。その形のみ「保典の墓」に將軍は額いた。想へば、當時のこゝがまゞぐゞに彷彿する。然り、而して明治四十二年十一

月には、静子夫人も將軍と共に、保典の墓を弔訪したのである。

そこから右斜に登るこゝ三丁、爾靈山々上の記念碑に對する山嶺に立てば、白玉山、松樹山、二龍山、望臺……は總て指呼の中にある。我が將卒が此の山嶺を取り、更に躍進して記念碑の聳立する爾靈山の頂上を奪ふまでに半日を要したといふ。こゝにも記念のために二十八冊重砲の砲彈が建てられてある。即ち我軍が二〇三高地を確實に占領するに、この山嶺に觀測所を設置し、各砲臺に著弾の命中を通報し、偉大なる効果を擧げた場所であるから……。爾靈山！この高地を我が掌裡に收めて以來、敵の士氣が全く阻喪してしまつたのも當然で、軍事の門外漢にも「成程！」と點頭される。

◇更に日記を見よ

爾靈山を占領した後の我軍の昂れる意氣に對し、敵の士氣の俄かに阻喪せるは、當然過ぎる當然のこゝでなければならぬが、この山嶺に攻城重砲兵觀測所を設置し、その通報に依

つて各所の我が砲臺は敵の軍艦、陣營を文字通り痛烈に射つたがために、旅順の命数は一日も逼迫するのみであつた。乃木將軍の十二月の日記は、この間の経過を具に闡明して殆んど餘蘊がない。見よ、力強い其の文字を！

十二月一日

朝、土城子ニ兒玉ヲ待、不來。豐嶋ニ登ル。午食後、曹家屯ニ兒玉ト會ス。兒玉大將高崎山行キ、兼松謙辱ス。同夕下山ス。今朝、白井中佐、保典昨日戰死ノ事ヲ告ケ來ル。

同 二日

朝、高崎山ニ至リ、同夕還ル。東京よりリンゴ二箱送り來ル。一ツハ保典ノ分ナリ。兒玉ニ煙、リンゴヲ送ル。

同 三日

午後四時ニコルソン中將來訪、小話。別後馬ヲ駈リ高崎山ニ至ル(一時間)。齋藤枝隊前進命令ニ付決定ヲ與フ。第一師團、第七師團ノ守備分ヲ定ム。兒玉大將ト同宿。ニコルソン隨行ノ井上一次大尉防

寒外套持參。

同日

伊地知參謀長、ニヨルソント豊嶋山ニ登リ、同夕高崎山ニ來ル。

同日

朝より二〇三砲撃、九時より齋藤支隊前進、目的ヲ達ス。

同日

午後、二〇三ニ登ル。渡邊、村上兩聯隊長、觀測將校等ニ握手。歸路、齋藤少將ヲ訪。赤坂山以

東ノ敵退散ス。

同日

朝食後、高崎山ヨリ柳樹房ニ還ル。大嶋中將ヨリカステラ、茶、沖津鯛到來、リンゴヲ送ル。兒玉

大將歸ル。夜ヲ訪。志賀ヨリ詩談。

同日

晴、靜穩。

敵艦射撃。午前より兒玉、伊地知ト談ズ。午後、兒玉より各參謀ニ訓示。晝、永田少將來ル。兒玉ト

會食。夜、第十一師團前面銃聲盛ナリ。十二時磯村ニ命シ、注意ス。夜食後、兒玉ヲ訪。榎原アリ。

同日

朝、岩村來リセバストボリ脱出ヲ報ズ。大庭中佐二〇三行キ。早朝、兒玉ヲ訪ヒ、殿下ノ御宿處ヲ見

ル。兒玉大將歸北ヲ送ル。午食後、第十一師團長、第九師團長ヲ訪ヒ、敵情等ヲ聽ク。

同日

朝來大風、飛雪。午時、山階殿下御來着、伺候。夜、リンゴヲ獻ズ。夜、大庭中佐歸ル。

同日

殿下、黒井中佐、山岡少佐と陸戰陣地、豊嶋山御巡視。各工兵大隊長ヲ工兵部長室ニ會議、臨席、

午食ヲ共ニス。保典遺骨、遺物ヲ送り來ル。夜、大岡力來談。今朝有レ詩、示志賀氏、後ニ長篇ノ和

韻アリ。

爾靈山險豈難レ攀

男子功名期ニ克艱

鏡血覆山々形改

萬人齊仰爾靈山

同 十二日 好晴

保典遺物毛皮マントヲ藤井副官ニ贈ル。兼松ト鴨嶋山ニ登ル、十一時より三時迄。坂田時正よりミカ
ン一箱贈り來ル。全身浴ヲナス。夜、大谷瑩温外從僧面會ス。殿下終(日?)御休養。安原捕虜ヲ
從ヘテ爾靈山ニ登ル。

同 十三日 好晴 午後降雹

殿下御休養。安原大孤山ニ登ル如レ昨。

同 十四日 夜來雪約五寸積ル

朝、兼松ト第九師團ニ至リ、二龍山ニ平佐ヲ訪ヒ(途ニ一月ヲ訪フ)松樹山ニ至リ見ル。歸路、又第
九師團ニ小話。又前田少將ヲ訪フテ歸ル。

殿下へ伺候ス。莊原、石黒、集作等より來書、保典ノ弔意ナリ。長谷川大將より來書、第七師團白水
參謀來ル、前進ノ事。本日渡邊大佐松樹山下ニ捕虜名簿交換ス。

同 十五日 曇

朝、岩村來リ高崎ノ變ヲ報ズ。參謀長ト議シ、大庭中佐ヲ連合艦隊ニ遣ル。鯨島師團長來リ、十八
日奇襲ノ事ヲ決ス。佐藤大佐ヲ呼ブ、共ニ午食ス。磯村少佐歸京、保典ノ遺物ヲ托送ス。鯨島中將ニ
雁ヲ贈ル。午後三時、第一師團第三聯隊方面ニ敵ノ軍使來ル、病院砲撃ヲ苦ムノ件ナリ。夜、有賀博
士等ヲ集メ、參謀長答案ヲ議ス。

同 十六日

朝、山階殿下御來臨、後、十時頃、殿下及其他ト撮影。午時、内田公使、井上子爵、青木大佐、瀨川
領事來ル。内田煙草ノ贈アリ。同汽車ニテ殿下御歸京、御見送り。大迫中將來ル。津野田參謀過日
策意見稍過言ノ件ニ付云々。朝、志賀氏來ル、革袋ニ書シ與フ。本日訓示艸案ヲ添削ス。齋藤少佐、
有賀博士軍使ト會見。本日椅子山ヨリ投降アリ。内田ノ一行鴨嶋山ニ登ル。饗ヲ共ニシ、夜八時出發
ス。

同 十七日 晴

今曉、第七師團高丁山占領、九時報アリ。昨夜より山岡參謀第七師團ニ到ル。鴨湖嘴ノ砲臺火藥庫ヲ破リ、北砲亦火藥庫ヲ破ル。望臺裏ノ敵數百ヲ野砲ニテ斃ス。水雷艇一隻撃沈。夜十二時、大庭中佐聯合艦隊より歸ル。近野工兵隊長、和田大尉ヲ參謀長召致ス、一泊。

同 十八日 稀有ノ好晴

朝、大庭ノ報告聞ク。大岡力來ル、告別、詩ヲ書ス。總司令官より特使、訓令來ル。午時より豊嶋山ニ登ル。二時十五分、北砲臺爆破。二〇三、二時三十分、銃彈爆破烈死傷アリ。夜十一時五十分、北砲全部占領、祝詞ヲ送ル。

同 十九日 好晴

朝、シヤンパンノ鮫島ニ送ル。本日河西、兼松、松平轉務、村田丹陵告別ニ來ル。

同 二十日 好晴

午前、東郷海軍大將、參謀秋山中佐外一名ト來營、今後作戰ノ目的ニ付相談ス、午食。大庭中佐誘導、火石岑子ニ徒步行。夜ニ入り歸來。夜食後、九時汽車ニテ歸艦。

同 廿一日 曇

朝八時半、齋藤參謀、松平副官、橋本少尉ヲ連、第七師團司令部ニ到ル。各旅團長アリ、午食ヲ共ニス。(大迫ト吉田ニ茶ヲ贈ル)。食後、齋藤少將謙辱、山砲陣地ニ登リ、又二〇三ノ海軍觀測所ニ登リ、保典ノ墓ニ詣ズ。吉田少將ノ陣營ニ喫茶。(觀測所ニ御影池中佐ニ逢ヒ、二十八冊砲床遲延ノ事ヲ砲兵司令官ニ電話セシム)。齋藤少將、白水參謀ト別レ、海軍十五冊ノ砲床ヲ見テ歸ル。夜月色良。大庭、伊豆、宮田、奈良ト會食、雑話。

同 廿二日 晴、夜月朗、無風ナリ

今朝、鳩灣凸半小島占領ノ報アリ。祝詞ヲ第七師團長ニ送ル。藤田副官、石浦大尉來ル。大臣、次官より名刺到來、土方伯より弔書來。柴直言等外數通。大庭中佐夜第九師團第一線巡視。

同 廿三日 好晴

拂曉、吉田旅團長大陽溝北砲臺前ノ高地ヲ占領ス。遠藤守備隊經理部長來、昨日北砲臺、大孤山ヲ見テ歸任ス。午後三時、大迫中將ヲ呼ビ、友安少將ノ事ヲ大臣ニ答フ、晚食ヲ共ニス。松翁よ

り來書。山口ノ作間久吉より來書、有詩(註)。夜、工兵部長報告ヲ聞ク。今夜二龍山ノ敵對坑路爆破サル、報アリ。

(註) 著者曰く——「山口ノ作間久吉より來書、有詩」云々の詩は「阿兄勝典勇拔群、阿弟保典武兼文、乃父將軍名希典、一家三典皆從軍、將軍發日告遺志、武夫捨命尋常事、一人戰死勿レ出レ棺、留レ一旦待二兩個至、果然南山激戰時、冒險奮闘失二長、兒一敵彈無情旅順役、復爲二乃木一折二枝、接レ報將軍色不レ動、將軍不レ痛聞者痛、守レ棺夫人感如何、夫人不レ慟國民慟、君不レ見忠臣三楠公、殉難報國闔門空、壯烈古今堪二相比、三典獻レ身取二遼東」云ふのである。

同日 廿四日 好晴

午前、工兵部長來リ、二龍山二十八日ノ報告アリ。午後スミス大佐東京に歸ル、告別。吉田部長ヲ訪フ、不在ナリ。夜、落合部長ノ病ヲ訪フ。落合、安原、津野田病氣ノ爲メミカン、リンゴヲ贈ル。

同日 廿五日 好晴、無風

朝七時半、松平、橋本ト第九師團司令部ニ馬ヲ殘シ、兩砲臺下ニ竹光第三大隊長ニ逢ヒ、一戸堡壘ニ二十五珊砲床構築ヲ見、北砲臺下ニ二十二聯隊本部ニ山中旅團青木聯隊長ト逢、同伴、全砲臺ヲ見ル。別レテQノ坑路頭ヲ見ル。秋山聯隊長ノ宿舍ニ寄り、第十一ノ參謀馬ヲ伴ヒ來ルニ逢ヒ、殘シテ十一司令部ニ到リ、司令官ト午食ヲ共ニス、小豆飯アリ。前田旅團長來リ居ル。歸路、岩本大隊長ニ面會、握手、名譽ヲ祝ス。瀧本聯隊長ト歸ル。松平副官意見ヲ述アルヲ聞ク。伊地知參謀長發熱臥病。

同日 廿六日 好晴、無風

午後、豐嶋山ニ登ル。東京留守宅よりワイスキ其他及ビ保典ニ請品到來。乾柿腐敗物品ヲ汚ス、甚シ。同夕、豐嶋少將來リ、夜食ヲ共ニス。敵彈製小香爐持參。

同日 廿七日 好晴

午後、英國工兵少佐クワン來訪。同夕、吉田部長ノ宿舍ヲ訪フ、不在ナリ。午前、志賀氏來リ、築業中佐ノ詩アリ。

同 廿八日 曇、靜穩

朝早く豊嶋山ニ登ル、(參謀長病氣不參)。十時、二龍山爆破、午後四時突撃、夜八時全部占領。六時下山、歸營。

同 廿九日 朝來烈風揚塵

朝より大庭中佐二龍山行 留守より馬具其他來ル。

同 三十日 好晴

書ヲ留守ニ送ル。

同 三十一日 好晴

朝八時半登山。十時、松樹山爆破。午後二時、二龍山ヨリ烏帽子山突撃、苦戦。六時、盤龍山、東砲臺等爆破。

◇ 難攻不落の砦も

爾靈山の陥落に依つて我軍の士氣は昂り、行詰りの状態にあつた各方面の攻略も、一日「活氣を帯び、」直ちに旅順を取らねばならぬ」この意氣は何處にも鮮かに磅礴した。その結果は、十二月六日から十一日に至る砲撃に依り、港内に潜んでゐた敵艦を悉く撃沈し、以て海軍の要望に副ひ、東航中のバルチック艦隊の來航を悠々迎へるこゝが出来るやうになつた。而して攻城の諸準備は愈々進捗し、坑道作業も亦完成したので、十六日、將軍は次のやうな訓示を布告した。

旅順要塞第三回ノ總攻撃ヲ實施セントスルヤ、事 上聞ニ達シ、畏クモ特ニ優渥ナル

勅語ヲ賜フ。希典 奉答スラク、我軍ノ將卒深ク

聖旨ヲ奉體シ、誓テ速ニ軍ノ任務ヲ達センコトヲ期スト。是レ諸子ガ熟知スル所、惟ノニ第三回總

攻撃ニ於テ、千古殆ンド稀ナル勇敢、壯烈ノ攻撃ヲ實施シタルモノ、是レ豈將卒一般深ク

聖旨ヲ奉體シタルノ致ス所ニアラスシテ何ゾヤ。諸子ガ奮闘ニ對シ、本防禦線ノ攻撃ハ、豫期ノ如ク

成功セザリシト雖、敵ガ殆ド全力ヲ擧ゲテ頑強ニ抵抗セシ二百三高地ハ、十二月五日ヲ以テ全ク我

有ニ歸セリ。蓋シ該高地ハ旅順要塞ノ死命ヲ制スベキ要衝ニシテ、其占領ハ實ニ旅順港内ニ於ケル敵艦隊ノ全滅ヲ促シタリ。即チ二百三高地ノ占領後一週日ヲ出デズシテ、敵ノ堅艦ハ殆ンド我重砲ノ爲メニ撃沈セラレ、目下餘ス所ハ、僅ニ小艦數隻ニ過ギズ。此等殘艦ノ餘命亦指ヲ屈シテ算ヘ得ベキノミ。

敵ヤ既ニ衣食ニ窮セリ。其戦員ハ減耗セリ。加フルニ彈藥モ亦將ニ竭キントス。此窮境ニ際シ、我重砲ハ日夜敵ノ殘艦ト要塞内部ニ於ケル軍用ノ資源トヲ破壊シツ、アリ。又敵ノ本防禦線中其主要ノ點ニ對シテハ、諸子ガ堅忍ト勇敢トニ頼リテ益々肉迫セリ。之ヲ攻略スルノ時機遠キニ非ラザルヲ知ルベシ。

今ヤ時近寒ニ向ヒ、攻撃ノ諸動作逐日困難ノ度ヲ増進スト雖、亡戰友諸子ガ勇敢、忠烈、以テ殉國ノ義ヲ致シタル所以ヲ回想セバ、豈感奮、興起セズシテ可ナランヤ。諸子ガ君國ノ爲メニ盡スハ、正ニ此ノ秋ニ在リ。諸子一層奮勵努力セヨ。

明治三十七年十二月十六日

第三軍司令官 男爵 乃 木 希 典

乃木將軍は此の訓示に心血を注いで推敲した。見よ、その日記にも「……本日訓示艸案ヲ添削ス」(十二月十六日)とあるではないか。この將軍の心は全軍にも強く感應したであらう。十八日には東鶏冠山北堡壘を爆破、占領するに至つたが、又更に續いて二十八日には二龍山堡壘ヲ奪取シ、大晦日の三十一日には松樹山堡壘を爆破、占領してしまつた。斯く我軍は敵の金城も、湯池も恃み、半歳に互つて我軍を惱ました本防禦線を犇々突破したが、敵の後方には猶ほ第二、第三の防禦線があり、未だ我軍の掌裡に收めざる砲臺、堡壘あるのみでなく、窺かに探知した處では、敵側には更に抵抗を續けるここの出来る兵力に之に相當する彈藥、糧食の用意あるここの分つてゐたので、如何に彼が屏息しても開城には未だ時間があるものご稽へられる。併し絶好の機會を捕へた我軍は、敵に一息もつかせず、一舉に至要塞を攻略するご云ふ軍略の下に邁往した。昂れる士氣は文字通り破竹のやうに、明治三十八年一月一日、未明に各方面は攻撃に努めたが、殊に望臺——二龍山と東鶏冠山北

堡壘の略ぼ中間にあり——に向つて主力を注いだ。

望臺は一の小山に過ぎぬが、この方面では抽んでた高丘であるがために、第一回の攻撃の時から我軍の好目標となり、前年八月の總攻撃に、こゝに向つて幕進した第九、第十一師團の突撃隊が全滅し、殆んど死骸を以て全山を掩ふた思出での深い場所、謂は、元旦の弔ひ合戦である。そして朝敵將に東天に紅ならんとする頃、第九師團の參謀から「我が一小部隊は、今朝日高地の巔頂を占領し、萬歳を唱へた！」云ふ電話が軍司令部に通じた。この日高地は望臺の右にあつて、望臺と共に我軍を悩したが、その日高地をも占領したので、第九師團の攻撃隊は、こゝを足場に大に猛撃を加へ、第十一師團は東鷄冠山方面から突進し、午後三時三十分には完全に之を掌裡に收めた。最も展望の利く望臺を占領してしまつたのである。

然るに略ぼ同時刻に、第一師團の參謀から「只今敵の軍使が水師營〇堡壘前に來たので、歩兵第二聯隊から將校一名を出して迎へたが、信書らしいものを齎したので、之を受領し

た」云ふ電話があつた。敵の軍使？ 今までも軍使は來た。殊に攻撃が日一日猛烈になつてから云ふものは、病院を射たれては迷惑だとか、何處を射つてくれるな——とか、窮狀を自ら告白するやうなことを訴へるために軍使は屢々來たのであるが、この時の軍使のみに就ては、何はなしに重大な使命を帯びたものであるやうに直感せられた。そこで電話に出た白井中佐が、

「その信書が軍司令官あてのものぢやつたら直接こちらに送達してくれ」

と命じた。受話機を緊握した中佐は「或はステツセルから開城の申込みではないか」直感したが、「開城の爲の軍使だらう？」云へば、何だか屁古たれて自ら弱音を吐くやうに受取られはせぬか、瘦我慢してをつた。處が先方からは、

「今の信書は軍司令官閣下あてのものであつたので、〇堡壘から遞歩哨で師團司令部に送付したが、届き次第、更に傳騎を以て送付することにしよう」

云ふ返事であつた。この〇堡壘は水師營の前方にある第一師團の第一線であり、そこか

ら第一師團司令部のある高崎山までは一里以上あるのみでなく、更に軍司令部のある柳樹房
高崎山の距離が約三里あるので、問題の敵からの信書が軍司令部に届けられたのは、午後
八時頃であつたが、第一に此の信書を手にしたのは白井中佐で、緊張しながら鉄を大急ぎで
入れるに意外、真に意外にも、敵からの信書は英文で認められてゐた。露西亞の上流の人は
國語のやうに佛語を操るに同時に、社交上の書面は慣習的に佛語を以てする。佛國通の白
井中佐は、英文で認められた書面を暫く凝視してをつたが、「開城」(Capitulation)の二
ふ文字は、英語も、佛語も同じであるので、その書面を驚つかみにして軍參謀長伊地知少將
(幸介、後の中將)の室に飛込み、間もなく幕僚も集まり、軍司令部附の國際法顧問法學博
士有賀長雄が譯すれば、

旅順一九〇四年(露曆、日附なし)二五四五號

貴下

交戦地域全般ノ形勢ヲ考察スルニ、今後ニ於ケル旅順口ノ抵抗ハ不用ナリ。依ツテ無益ニ人命ヲ損セ

ザルタメ、余ハ開城ニツキ談判センコトヲ望ム。若シ閣下之ニ同意セラル、ニ於テハ、開城ノ條件及
順序ヲ討議スルタメ、委員ヲ指名シ、並ニ余ノ委員ガ該委員ニ會同スベキ場所ヲ選定セラレンコトヲ
希フ。

余ハ此機會ヲ利用シ、余ノ敬意ヲ表ス。

將官 ステツセル

旅順口攻圍軍司令官男爵エム乃木閣下

こあつた。勿論、その席には乃木將軍も列してゐるが、有賀博士の譯文に依つて要件が明
かになつても、依然として固い沈黙が續いた。窃かに「ホツ」ミするものがあつても、これ
を露骨に他に表示するこゝをしなかつた。併し名狀し難い満足の色は乃木將軍の顔にも看取
し得られた。そして次の返書は、翌二日の早朝を以て山岡少佐(熊治、後の中佐)をして籠
城軍の首將に交附せしめた。

一九〇五年一月二日 旅順攻圍軍司令部ニ於テ

貴下

余ハ茲ニ開城ノ條件及順序ニツキ談判セントスル閣下ノ提議ニ同意スルノ光榮ヲ有ス。之ガタメ余ハ旅順口攻圍軍參謀長少將伊地知幸介ヲ委員ニ指名シ、尙之ニ若干名ノ參謀及文官ヲ隨行セシム。彼等ハ本日即チ一九〇五年一月二日ノ正午ニ水師營ニ於テ貴軍委員ニ會同スベシ。双方ノ委員ハ調印ノ後、批准ヲ待タズシテ、直チニ效力ヲ生ズル開城規約ニ署名スルノ全權ヲ有ス。其ノ全權委員狀ハ双方ノ最上指揮官ノ署名シタルモノニテ、互ニ交換スベシ。余ハ此機會ヲ利用シ、敬意ヲ表ス。

旅順口攻圍軍司令官男爵 乃木希典

關東要塞地區司令官ステツセル將軍閣下

我が伊地知少將の一行は、露國側の委員である關東要塞地區參謀長レース大佐等も水師營に會見し、その日の午後四時三十分を以て既に用意してゐた我が提案に依る開城の諸要件の

談判を終り、完全に旅順は我が掌裡に收められることになつたが、午後十一時三十分、

將官ステツセルヨリ開城ノ提議ヲナシ來リタル條件伏奏シタル處

陛下ニハ、將官ステツセルガ祖國ノタメ盡シタル功ヲ嘉シ給ヒ、武士ノ名譽ヲ保タシム

ベキコトヲ望マセラル。

云ふ 聖旨が參謀總長を経て乃木將軍に電報せられたことを伊地知少將からレース大佐に傳へた。突如として茲に 聖旨を賜はつたので、開城の規約中に首將ステツセル以下の將校達に帶劍を許し、又再び軍に従事せぬことを宣誓するものには歸國を許すの特典をも與へることになつた。

旅順は遂に開城した。「難攻不落」てふ矜持裡の堅塞も、明治三十七年八月十九日、第一回の痛烈な總攻撃を開始して以來、百三十七日にして完全に我が軍門に降つた。而して旅順の攻圍に使用した我が兵力は約十萬、死傷六萬二百十二名——内戦死一萬五千四百餘名——であつたが、敵の兵力は戰鬪員三萬五千、死傷一萬二千餘名（内死者は二、三千）であり、

開城の際の俘虜は、海軍兵並に義勇兵をも併算して三萬八千餘人(約二萬人は傷病者)であつたが、更に牢記せねばならぬのは、敵の残存せる彈藥及び貯藏の主食物のみでも、立派に二十日間内外を支持し得るものであつたことである。

◇名畫を描くもの

旅順は落ちた！ 敵將ステツセルに向つて返書を草するに同時に、乃木將軍は大本營、聯合艦隊、滿洲軍に此の吉報を齎したが、東京に此の快報が達したのは、一日も既に深更であつたがために、二日の朝に參謀次長から大元帥陛下に奏上し、同時に普く國民に知らしめたので、これを待ち亦待つてゐた我が國民は、狂するやうに拵舞し、何處にも熱烈極まる提燈行列が行はれたが、更に沙河に對陣中であつた我が將卒に此の好報の達したのは、元日の眞夜中であつたが、それが傳はるに同時に、「萬歲、萬歲！」の聲は戰線から戰線に起り、天地を搖すやうな喊聲に依つて露軍も「旅順が落ちたのだらう」に察知したと云ふ。併し死

力を盡して攻略に従ひつゝ、あつた攻圍軍の將卒が此の開城を知つたのは、實に二日に完全に開城の規約成つてからのことであつたのである。

沙河方面で熱狂的に「萬歲、萬歲！」と叫ばれ、内地に於て人々が提燈を弄りながら「旅順も落ちましたなア」祝福しつゝ、あつた時も、猶ほ緊張して攻圍軍の將卒は攻撃の姿勢を取つてゐた。そして快報が初めて傳達された時、誰の眼にも涙があつた。無言の儘に顔見あはせるのみであつたが、聽て慳慳を出で、砲臺の上に露出し、旗を押立てるもの、シャツ一枚になつて頻りに上衣、或は毛布を振るもの、それが朝日に映じて壯嚴のシーンを描き、何處にも爆發的の「萬歲、萬歲！」が轟いた。と同時に、昨日まで敵となり、味方になつてゐた兩軍の人々も、欣々然として握手し、或は煙草を與ふるもの、パンを贈るもの、言葉は通ぜずとも、そこに平和と歡喜が満ちた。「戦争」も全く終了してしまつたかのやうな光景を呈したのである。

旅順攻圍の第三軍に主將であつた乃木將軍の當時に於ける感懷は、果して如何なるもので

あつたらう？ 左なきだに將軍は其の胸衷を語らなかつたが、幕僚や揮下の師團長が祝辭を述べても、却つて勞苦を憐ひ、光輝ある我が偉勳を忘れたかのやうであつた。併し事甚だ多かつた一月の第一日から十二日に至る乃木將軍の日記には、次のやうな文字が極めて淡々こ列ねられてをるのである。

明治三十八年一月一日 好晴

午後二時過銃聲熾ナリ。拂曉、第九師團ノ一部巨高地占領ノ報アリ。續テ望臺ヲ攻撃、第九、第十一師團協力、午後占領。午後二時半比敵ノ軍使來ル、開城ノ事ナリ。夜ル會議、規約書ナル。

同日 好晴

朝、山岡少佐先登、十二時ヲ期シ、委員長伊地知少將、有賀等水師營ニテ會見。夜ニ入調印濟ミ。朝書ヲ兒玉大將ニ送ル。

同日 好晴

守備軍柴參謀、川上事務官來ル。西大將ヨリ名刺ニ

きのふまで岩ヲ守る仇人も

けふは浮世の友にやあらん

返しに

對向ひし敵もけふは大君の

惠の露に沾ひニけり

夜、食事ヲ共ニス。兵站藤井參謀長モ亦同シ。朝、友安少將轉職告別ニ來ル。

同日 好晴、曉、霜甚ダ多シ

本日津野田、川上ヲ遣リ、ステツセルニ鷄三十羽、酒貳ダースヲ送ル。明日ノ會見ヲ約セシム、(一昨彼レモリ申込アルニヨル)。財部海軍中佐各國公使館附武官十一名ト來ル。夜、貴族院議員高

木、伊集院、楠目等來ル。

同日 好晴

朝、參謀長、安原參謀、川上ト水師營ニ至リ(津野田參謀ステツセルヲ迎へ、共ニ來リ待ツ)。會見

員辨當ヲ共ニ食シ、別後、松樹山、二龍山ヲ見テ歸ル。

同日 好晴

朝、大島中將來ル。工兵中隊兩人告別（近衛、第六師團）。隱岐少將來宿、午食ヲ共ニス。

英國及スエズ軍醫來ル、面會。夜ル海軍外國將校等病院職員ト會食ス、奏樂ス。

勅語ヲ賜ハル。

同日 好晴

午前、松村中將來ル。衆議院議員十三名來ル、病中面會ス。軍醫來診、左眼腫物ヲ燒ク。感狀

訂正。

皇后陛下及皇太子殿下より合旨ヲ賜フ。

同日 好晴

朝、伊集院議員告別ニ來ル。外國海軍武官歸還、財部中佐ニ逢フ。第一軍吉岡參謀來ル。黒木大

將、藤井參謀長より名刺。第三艦隊參謀來ル。片岡中將、東郷少將より祝詞、名刺アリ。夕刻、參

謀長、巖子巡視。山岡參謀ハダルニ一行キ。福島副官受降事務より歸ル。夜ル高木海軍々醫監來

リ、脚氣病論ヲ説ク。露將宣言ノ件、參謀長、有賀ト共ニ議ス。

同日 曇後晴

朝、又高木氏昨日ノ談ニ付書付持參、告別。本日各參謀長會議、石黒、集作、其他數通來書。

同日 好晴

朝、末永病院長來ル。鮫島中將來ル。片岡海軍中將、土屋中佐、機關助等來ル、午食ヲ共ニ

ス。同夕、片岡中將ノ宿舍ヲ訪フ。

同日 好晴

朝、片岡中將來リ、岩村謙辱、旅順行き。本日午後一時半ステツセル巖子ヲ發ス。同夫人ニ

菓子ヲ贈ル、川上持參。昨今祝書、祝電多ク來ル。本日獨逸皇帝より勳章ヲ賜フ。勅電到來、兒玉よ

リ注意アリ。寺内大臣ニ聞キ合セ公報アリ。大迫中將來ル、ステツセル送りノ歸路。參謀長、副長、

白井モ停車場ニ到ル。

同 十二日 朝曇、午後晴

齋藤少将午後十一時發營口ニ到ル爲メ午後來ル。牛嶋少将ノ子息ヨリ菓子ノ大箱ヲ貰フ。齋藤少将ニ煙草ト菓子ヲ贈ル。

旅順攻圍中の乃木將軍の日記は、一月十二日までしかかない。そして讀むものに深甚の感懷を禁ぜざらしむるが、歴史的の名畫であり、不朽に傳へらるべきステツセル將軍の水彩營の會見も、五日の記事中に「……會見員辨當ヲ共ニ食シ、別後、松樹山、二龍山ヲ見テ歸ル」こあるのみであるが、こゝにも乃木將軍の全人格が躍如としてをこる。

乃木、ステツセルの兩將軍が會見した水彩營は、現在の旅順驛から北方一里十一丁にして達するが、「會見所」であつた支那家屋は、その儘に保存してをる。昭和三年十月二日、そこを訪ふた著者は、庭内を靜かに往來し、次の「尋常小學國語讀本」卷十の「十五 水彩營の會見」を無意識に口吟まずにゐられなかつた。名畫を展くやうに、當年の輝かしい光景

が描かれてゐるから……。

- 一、旅順開城約成りて、乃木大將と會見の、
- 二、庭に一本棗の木、くづれ残れる民屋に、
- 三、乃木大將は、おそそかに、大みことのり傳ふれば、
- 四、昨日の敵は今日の友、我はたゞへつ、かの防備。
- 五、かたち正して言ひ出でぬ、二子を失ひ給ひつる、
- 六、二人の我が子それづくに、

敵の將軍ステツセル、所はいづこ水彩營、彈丸あともいらじるく、今ぞ相見る、二將軍、御めぐみ深き大君の、彼かしこみて謝しまつる。語る言葉も打ちとけて、かれは稱へつ、我が武勇。「此の方面の戦闘に、閣下の心如何にぞ」と。死所を得たるを喜べり。

これを武門の面目」と、

大將 答 力あり。

七、兩將 畫食共にして、

なほも盡きせぬ物語。

「我に愛する良馬あり。

今日の記念に獻すべし。」

八、「厚意謝するに餘りあり。

軍のおきてにしたがひて、

他日我が手に受領せば、

なほくいたはり養はん。」

九、「さらば」と握手れんころに、

別れて行くや右左。

砲音絶えし砲臺に、

ひらめき立てり、日の御旗。

思出では湧く。往時を追へば、感懐を唆らぬはないが、門に一步を入れ、第一に誰にも注目されるものは、左の練堀に沿ふた一本の棗であらう。百年餘の樹齡を重ねた老棗である。云ふが、乃木、ステツセル兩將軍の會見した日を物語り顔である。……我國で赤飯に必ず小豆を用ひるやうに、支那では棗を使用するが、この水師營の記念の棗のみは、如何にしてか、甚だしい酸味を帯び、食用に供せられなかつたにか、はらず、乃木將軍逝いて十有七年

を経た昭和三年の秋實つたものから賞味し得られるやうになつたといふ。棗 棗！ 永遠に生きよ、さらば訪ふ人々にも盡きぬ思出でこなるであらう。

◇ 柳樹房の日々は

乃木將軍が水師營でステツセル將軍と歴史的の會見をした翌六日に 勅語を賜はつた。旅順開城を嘉せられたもので、

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎮ナリ。第三軍及ビ聯合艦隊ハ、協同戮力、久シク寒暑ヲ冒シ、苦難ヲ凌ギ、勇戦奮闘、克ク其鐵壘ヲ奪取シ、堅艦ヲ殲滅シ、敵ヲシテ遂ニ城ヲ開キ、降ヲ乞フニ至ラシム 朕深ク爾將卒ノ克ク其重任ヲ全フシ、偉大ナル功績ヲ奏シタルヲ嘉ス。

三拜誦するのみでも、猶ほ感激を禁ずるこゝが出来ぬ。又七日には 皇后陛下、皇太子殿下より令旨を賜はり、十一日にステツセル將軍も旅順を去つたが、この日の將軍の手記は

「……本日午後一時半ステツセル長嶺子ヲ發ス。同夫人ニ菓子ヲ贈ル、川上持參」こある。十三日に入城式があり、翌日の午前十一時には陣歿將卒の招魂祭が舉行せられたが、式場は水師營の西端の一望開闊、旅順背面の堡壘一帯を指呼し得る高地で、第三軍が本攻圍縁に就いて以來、長く滞陣し、最も苦戦した處であるがために、こゝが選ばれた。そして將軍は次の弔詞を沈痛裡に朗讀したのである。

維時明治三十八年一月十四日、第三軍司令官乃木希典等謹ミテ清酌、庶羞ノ奠ヲ以テ我第三軍殉難將卒ノ靈ヲ祭ル。

曩ニ我軍ノ關東半島ニ上陸セシ以來、茲ニ二百十餘日、其間諸子ハ善ク勇往シ、善ク健闘シ、或ハ鋒鏑、砲火ノ下ニ命ヲ致シ、或ハ風餐、雨虐ノ間ニ病歿セシ者少シトセズ。而モ其功業遂ニ空シカラズ、茲ニ旅順口内敵艦隊ノ全滅ニ歸シ、敵要塞ノ降伏ヲ見ルニ至リシモノ、洵ニ諸子ノ遺烈ニ因ル。希典等諸子ト生死ヲ共ニシ、而モ生キテ大元帥陛下ヨリ優渥ナル勅語ヲ下賜セラル、ニ會ヒ、願ミテ諸子ガ遺烈ヲ念ヘバ、豈獨リ此光榮ヲ

享クルニ忍ビンヤ。嗚呼、諸子ト此光榮ヲ頒タントシテ幽明相隔ツ、哀哉、乃チ我軍ノ旅順口ニ入ルヤ、諸子ガ忠血ヲ以テ染メタル山川ト要塞ト下瞰スル處ヲ相シ、先ヅ地ヲ清メ、壇ヲ設ケテ諸子ガ英魂ヲ招ク。庶幾クハ魂ヤ髣髴トシテ來リ饗ケヨ。

明治三十八年一月十四日

第三軍司令官陸軍大將男爵 乃 木 希 典

旅順を其の掌裡に收め、引續いて入城式、招魂祭にも、乃木將軍は柳樹房の軍司令部から通ひ、旅順には移らなかつた。随つて勝利に酔ふて陶然たるが如きものなく、一月十五日に軍の一部は、歩武肅々、既に北進を開始したが、北征の途に將軍が慨然として上るまで起臥した柳樹房は、思出での爾靈山、水師營……同列に、旅順に入るもの、訪問せねばならぬ處であるにか、はらず、今では力強く語るものなく、訪ふものも亦稀である云ふ。記念すべき柳樹房！こゝに在りし日々の乃木將軍の生活こそ懐かしく、興味をも唆るものでなけ

ればならぬ。永遠に其の地名は忘れられぬであらう。

柳樹房、柳樹房！大連を發して汽車を旅順に取るならば、夏家河子ステーションを過ぎ、營城子ステーションも間近くなつた地點の左方の線路寄り一丁餘の場所に大きな石柱を見るであらう。その表には「第三軍駐營地 陸軍中將白井二郎書」に刻まれてをる。石柱に沿ふてだら／＼小徑を降れば、溝を名付けるが寧ろ適當に考へられる小川があつて、楊柳が茂り、川底には水も見受けられる。小川を越えて右するこゝ數間、左方に黒塗りの横に「善爲至寶」(裏に「良田作心」)に彫つた額面のか、つた門があり、門の左方に「周運來」の標札ある一民屋を見る。こゝは三瀾堡會柳樹房で、乃木將軍の起臥した處である。

この周運來は三天地即ち一千五百餘坪の土地を持つてをる中流の百姓であるが、門に一步を入れて目立つものは、右側に聳つ槐樹で、多くの年月を経たものらしく、この樹下には攻圍軍の電話、電信機が備付けられてた云ふ。又更に十數歩して玄關(云ふのは適切

でなく、入口)に達すれば、右に一室あつて、左に二室あり、その不汚なるは支那人に通用であるが、左の室内に乃木將軍夫妻の寫眞の掲げられてあるのは、流石に此の民家が故將軍の資縁の淺からざるものであつたこゝが點頭かれる。勿論、この周運來の住居は、新に建築したもので、乃木將軍が起臥した頃のものには桃山の乃木神社の境内に移されてをるが、運來は二元の住居を銀五百三十圓で讓渡し、又他に銀五百三十圓をもらつて此の家屋を元の住居と同じ間取りに建てた」に語つてゐた。

乃木將軍夫妻の寫眞の掲げられたる部屋の入口に近きものを當年の我が將軍は司令官としての公室に、他の一室を以て寢室に充て、ゐたが、衣食共に質素なものであつた。併し兵食にあらざれば口にせずさか、又或は唯だ一枚の薄い毛布で夏冬共に押通したさか云ふ流説は、決して真相を穿つたものでない。將軍自らの陣中日記に徴すれば、流説の誤まれるものであるこゝも明了するであらう。明治三十七年十一月十一日の乃木將軍の日記には「……夜食シャンパンを飲む、誕辰ノ故ナリ」に云ふが、將軍は好んで來客ある時には、食事を共

にした。日記にも屢々此のこゝが手記せられてをるが、俱に食卓を共にするにも、相手の好むものを心得てゐて必ず一品は之を調理せしめたものである。

來客の時のみでなく、平常にも參謀長、參謀副長と共に食事するこゝが多く、他の幕僚を招いて愉快に擗るこゝも亦少くなかつた。さう云ふ場合には、數個の容器に盛られた美味を將軍は何時か一つの容器に集めて置かれる。氣鋭の幕僚達が、

「矢張り容器は別にするがい、ですなア、味の違つたものを一緒にしては旨くないですか
ら……」

「遠慮なしに云へば、將軍は笑ひながら相手の顔を凝視しつゝ、あるが、恰も我子にでも對するやうな態度で、

「フム、左様か。儂は調法な腹をもつてゐるので、これがいゝのぢやヨ」

「答へるのであつた。蓋し將軍は徒に品數を多くし、陣中に於て容器と共に置場所を取
るこゝの面白くないのを戒めたものであらう。」

又更に征途に上つて以來、廣島に於て靜子夫人に「カツスケセンシマンゾクス……」云々
「打電し、「父子三人の柩を同時に出すまで葬式をするな」云ふ手紙を出した以外には、
全く東京の留守邸にハガキ一枚すら送らなかつた。世間には傳へられてをるが、これも亦決
して真相を穿つたものでなく、日記の中には「留守ニ送書ス」云ふ文字が屢々見え、留守
邸からの來書も滋く、諸の物品が送られてをる。そして夫人の心盡しの品々は幕僚達に
も、部下の諸將連にも贈呈せられた。自ら煙草、リング、菓子……を將軍が携へて第一線に
ある諸氏に贈つたこゝを記載した其の日記は、今日讀むものをして感激せしむる。この人の
揮下に在つた將卒が喜んで死地に入つたのも、當然でなければならぬ。

◇ 敵前に暴露して

乃木將軍は戦線を絶えず巡視し、無言の裡に將卒を勵ましてゐるが、猛撃更に猛撃を加へ
ても、旅順の堅塞易く攻略し得ぬがために、滿洲軍ニ聯合艦隊ニ大本營から督促の嚴しくな

るに随伴し、將軍の第一線に暴露するこゝが滋くなつた。そして或る場合には衛兵長さへも伴はず出掛ける。殊に保典が爾靈山で戦死してからは、幕僚間でも「注意せねばならぬ」に窃かに警戒するやうになつた。そして何氣なしに諫めれば、

「なアに儂は危い場所を除けるこゝが上手だから心配はないのぢやヨ」

「事も無氣に笑つてをる。併し油断がならぬので、大に警戒してゐたにか、はらず、馬上豊かに傳騎一、二騎のみを伴ふて將軍は第一線を巡視し、敵前にも猶ほ暴露してゐた。明治三十七年十二月二十五日の日記の末尾近く「……松平副官意見ヲ述ブルヲ聞ク」こあるが、この淡々たる記述中には、面白いエピソードが残されてをる。

十二月十九日の日記に「……本日河西、兼松、松平轉務」こあるやうに、第二副官の河西大尉（惟一、後の中將）が軍參謀に榮轉し、第三副官の兼松大尉（習吉、後の少將）が第二副官となり、新に松平大尉——後の中佐伯爵山田英夫——が第三副官に任ぜられた。松平

大尉が赴任するに共に、特に將軍の身邊に就て注意するやうにこ囁かれてゐたので、絶えず警戒してゐたのであるが、二十五日の朝七時半、松平大尉と衛兵長の橋本少尉（虎之助）後の大佐）を伴ひ、第九師團司令部を乃木將軍は訪ふた。當時の第九師團は、松樹山堡壘の攻撃に當つてゐたので、その督戰の爲の巡視であつたのであらう。日記には「……（盤龍山）西砲臺下に竹光第三大隊長ニ逢ヒ、一戸砲臺二十五珊砲床構築ヲ見、（東鷄冠山）北砲臺下ニ二十二聯隊本部ニ山中旅團青木聯隊長ト逢、同伴、全砲臺ヲ見ル。別レテQの坑路頭ヲ見ル」こあり、次いで「秋山聯隊長ノ宿舍ニ寄り……」云々記されてをるが、この時に問題は起つたのである。

東鷄冠山北砲臺下からQ堡壘の坑路を見、秋山聯隊の占居する地點に行くには、迂回して行くか、三百メートル許り敵前に暴露して進むかせねばならぬ。そこには塹壕がなかつたからである。若し暴露して進むならば、敵の堡壘に三四百メートル位しか隔たつてゐないので、必ず狙撃せられるものゝ覺悟せねばならぬ。處が將軍は毫も他意なきものゝやうに「迂

回せずに行かう」二人を促すのであつた。就任した時から「……特に注意するように」私かに注意せられてゐたことでもあり、又場所が場所、明かに危険を冒すものであるがゆゑに、思はず神経は尖らねばならなかつた。そこで松平大尉が「迂回して行かれますように……」と諫止したが、平然として「大丈夫ちやヨ」を將軍は自ら先頭をも切りさうな姿勢を取るの、松平大尉も、

「それでは私が先頭に参ります。若し安全のやうでございましたならば、閣下も御出で下さいませうように……」

と直ちに塹壕を出で、第十一師團の戦線に向つて駈出した。そして目指す地點に近づいて振返つて見れば、敵前であることをも忘れたかのやうに、將軍は常の足取りで歩いてゐたのみでなく、その後には一定の距離を置いて橋本少尉も歩いてゐる。併し天祐でも云ふのであらう。敵はうたなかつた。

斯く三人は無異なるを得たが、心大に平かでなかつたのは松平大尉である。唯一人して

駈足で進み、將軍と衛兵長は平然として歩いたことは、何だか自分のみが敵に恐怖したやうに思はれぬでもない。勿論、さう云ふことは差措くにしても、他日若し將軍に斯様なことを繰返されるやうなことがあつては、如何なる大事が突發せぬとも限らぬ。敵は二千、三千メートルの距離に於てさへも、騎馬姿の將官が見れば大砲で射つ。乃木將軍は赤い帽子に白い短袴の極めて目立ち易い服装であつたので、猶ほ狙撃せられる危険性が多分にあつた。それ丈けに一段松平氏の神経を強く刺戟したのである。

こゝに於て無異に柳樹房に歸還した松平大尉は、心大に平かでなかつた。何事も名状し難い感情を拭ふことが出来なかつた。そして熟考、更に熟考したのであるが、決して黙止すべきことではなく、この機會に於て所見を述べ、又斯くの如きことのないやうにせねばならぬ、と切實に感じたので、誠意を以て、

「……今日のやうなことを若し今後に於てもなさいませうならば、私は副官としての任務を果すことが出来ませぬので、辭任を御願ひ致さねばならぬことになります。閣下は今

や全軍の形勢から稽へましても、極めて重大な御身柄であり、萬一のこころでもありますれば、帝國の前途にも、その影響する處測るべからざるものがあります。私を心安からしめるに云ふやうな私情からでなく、帝國のために、全軍の爲に、將來は決して今日のやうなこころをなさらぬに御約束を御願ひします」

「辭色激しく詰寄せるのであつた。乃木將軍は松平氏に傾聴してゐるが、勿論、その誠意は融けるやうに將軍にも通じたこころであらう。そして「何も心配する程のこころではないぢやないか。儂は危険に好んで近付くやうなこころはせぬから……」を將軍は松平大尉を優しく慰撫するのであつたが、熟考の上にも熟考した松平氏は、何處までも其の主張を貫く決心であり、約束を迫つたので、將軍は、

「約束しなくともいゝぢやらう。儂も危険に好んで近付いたのではない。今日は激しい交戦の後であつたので、敵前に暴露して歩いたが、烈しい交戦の後には、靜謐になつて一寸射たぬものぢやヨ。儂は経験から推して戦争の呼吸を知つてをるからしたこころで、決して

危険を冒したのぢやない」

「辯明に努めるのであつた。こゝに於て日記にも特に將軍は「……松平副官ノ意見ヲ述ブレヲ聞ク」を手記したのであらう。松平氏の苦諫が如何に將軍を動かしたかを察知すべきである。明治三十七年十二月二十五日云へば、旅順の運命も將に決定しようとする時であつた。その時に將軍其の副官との間に、以上のやうなエピソードの残されたこころは、最も興味が感ぜられる。と同時に、柳樹房の日々も偲ばれる。柳樹房乃木將軍！ 思出では盡きぬ、懐かしい思出では永遠に續くであらう。」

奉天戦—凱旋

◇更に北征の途へ

難攻不落の「旅順」は落ちた。完全に我が掌裡に収めてしまつたが、半歳に亙つて惡戦、苦闘した攻圍軍の將卒は、唯だ吐息する暇すらもなく、北征の途に肅々として就かねばならなかつた。そこには強大な敵が準備を整へ、將に攻勢に轉じようとしてをるので、これを撃破するために、第三軍の偉力を滿洲軍の揮下に入れるのが緊要であり、眞に一日も忽にすゝるここの出來ぬものであつたからである。

この期待に副ふべく、敏活に第三軍は行動を起し、明治三十八年一月十五日、その一部隊は北征の第一歩を踏出したが、二十四日には乃木將軍も柳樹房を幕僚と共に出發した。考へ

れば、旅順を取ることは、勿論、我が軍略の上から緊要であつたが、更に北方に瀕りに激増しつ、ある敵を撃破するは、より以上の緊要事であつた。而して強大の敵を撃破するためには、渾河及び遼河の未だ解氷せざる前であるこゝを必要とする。殊に當年は暖かであつたので解氷の期も亦早からうと豫測せられてをつたがために、第三軍の北進は更に急速でなければならなかつた。随つて十分に各部隊は補充するこゝも出來ぬまゝに出發した。創痍癒えずして新しい戰場に急いだのである。

乃木將軍の陣中誌した日記が一月十二日を以て中絶してをるこゝは、第三軍が北征の途に急速に上らうとする多忙を語るものも亦考へられるであらうが、又一面には決死の徵も想像せられる。武人が戦陣に臨む場合に屍を馬革に包むの覺悟せざるはなく、明治二十七年八年戦役に際し、征途に就く前日の乃木氏は、未だ年少であつた勝典及び保典を招き、萬一の時あるべきを醇々語り語つて覺悟を促し、又其の膝下に於て養育しつ、あつた令弟の遺孤なる玉木氏——正之——にも「儂は生還を期せぬので、卿の將來の學資金も引續いて出すこゝ

が出来ぬここになるぢやらう。随つて今日から卿も決心し、學資乏しくも成業し得る方針
を取るやうにせい」遺言したが、思出での柳樹房を出發する二日前に乃木將軍は、長府町
の桂彌一氏に遺言状も看做すべき、次の手書を送つてをる。

拜啓 愈御健勝之段大慶此事ニ御座候。小生儀も昨年來面白クもアリ、苦敷もアル日月ヲ送、貴
重ノ人名(命?)ヲ夥敷失ヒ、漸ク當方面丈ハ片付申候。從是北進ノタメ明日より行動相始可レ申
身體ハ至極頑健、乍レ憚御安意被レ下度候。扱ハ愚弟之儀ニ付而ハ、毎々御配意被レ下、難レ有奉ニ多謝
候。同人儀昨夏一子ヲ失ヒ、小生ノ愚息兩人モ戰死相遂ケ候ニ付、男系絶滅ニ至リ候次第、之レトテ
格別無ニ差障ニ事ニも候得ド、愚弟儀ハ未ダ老ホレ候迄ニモ無レ之ニ付、何カ相應ノ結婚出來候得バ御盡
力奉レ願度候。素方男爵ナドハ小生一代ニテ返上仕リ、愚弟ハ他家ヲ冒シ、血統丈ケ殘シ置候得
バ宜敷事ニ存候。(中略)就テハ家産トテモ無レ之候得共、小生ノ死後ハ弟妹及ビ男系姪等ニ相分ケ
可レ申、其内愚弟ニ殘シ、先祖ノ墓ト遺物ノ保護可ニ相托ト存候。何卒此邊御推察被レ下、從來相願
置候事ニ相加ヘ御斟酌奉レ願候。過日ハ三兄御連書難レ有拜誦仕候。御序之節宜敷御傳

一月二十二日 希 典 拜
聲奉レ願候。先ハ御禮御願迄艸々。時下折角御自愛奉ニ事祈一候。頓首

桂賢兄尊下

この手書の中(中略)になつてをる處は「……男爵家は斷絶するも、他年、頭角を抽でた
る人物を以て乃木の名跡を繼がしむるも一興か」云ふ意味のものであるといふ。尤も將軍
が凱旋の途を長府に訪れて面晤した時、桂氏が「あの事は如何なさる？」と問ふた場合に、
將軍は「取止めにする。儂の死後の乃木家は斷絶ぢや」云々力強く語つたが、明治四十年九月
二十一日、勳功に依つて伯爵を陞授せられ、後に祝賀の宴の挨拶の中にも「……私に勳功が
あつたに申す次第でなく、唯單に私が年長であつた、めに、第三軍の代表として此の榮爵を
忝ふしたまでのことであります」云々云々あつた。以て決意を窺ふべきであらう。

乃木將軍は絶えず旅順に在つて「死處」を求めたにか、はらず、幕僚の厚い注意を裕かな

天祐は、その目的(?)を達せしめなかつたが、北進して後も、依然として「死處」を求め
てゐるかに付度せられることが少くなかつた。旅順開城の翌々日——明治三十八年一月四
日、時の陸相であつた寺内氏(正毅、後の元帥)に寄せた書柬の如きも、力強く其の心事を
語つたものであらう。次のやうに……。

新年之御慶日出度 申納候。然バ久々御無音ニ打過候處、實ハ彈丸ト人命ト時日ノ多數ヲ消費
シツ、埒明キ不レ申候爲メ唯々苦悶、慚愧ノ外無レ之、漸ク須將軍根氣負ケノ氣味ニテ開城致シ
吳レ、當方面ノ一段落ヲ得候無智無策ノ腕力戰ハ、上ニ對シ、下ニ對シ、今更ナガラ恐縮千萬ニ
候。山元帥より度々懇示も相蒙り候得共、是又御答も不レ仕、多罪至極、且ツ詩ノ次韻モ未ダ出來上
リ不レ申爲メ、今日ハ呈書不レ仕、乍憚尊臺方前件宜敷御取成シ置キ奉レ願候。明日ニテ人馬、
諸材料、物件受取相濟候。八日ニ戰死者ノ祭典致候テ、直ニも北進可レ任事ニ夫々準備罷在
候。此ハ野戰ノ趣味充分賞翫可レ仕相樂居候。

○又々例ノ服制ノ儀申上候ハ、御笑ヒニも可レ有レ之候得共、平時ニ於テ無益ノ金ヲ掛ケ不便極ル
弄品ノ實戰ニ有害ニシテ、終ニハ軍容モ、軍紀モメチャ／＼ナラシムルノ止ムヲ得ザル醜體ハ、何卒此際
御改正相成度、前條餘り過言ノ如ク御怒りも有レ之可レ申候得共、精神教育ニも質素ト實用ト、又軍紀
ヲ維持スルニモ齊一ト申ス事ハ不レ可レ缺儀ト存候。今後幾年月ノ戰爭ヲ繼續スル爲トノミ申スハ其意
ヲ得ズ、砲聲ノ一時止ミタル時は、軍人ノ衣服も、諸材料も、非軍人精神ト相成ラヌ様無レ之而ハ不便、
不利益乎ノ様に被レ存候。御參考迄申上置候。

○愚息等戰死ノ際ハ、特ニ御懇情被レ下候由、多謝ノ至ニ御座候。御禮申上候。
先ハ久々御無音之謝罪旁々例ノ冗言迄不レ惡御一讀奉レ願候。恐々敬具

三十八年一月四日

希 典拜

寺内賢兄閣下臺下

「彈丸ト人命ト時日ノ多數ヲ消費シツ、埒明キ不レ申爲メ唯々苦悶、慚愧ノ外無レ之」ニ告白
し、且つ「無智無策ノ腕力戰ハ、上ニ對シ、下ニ對シ、今更ナガラ恐縮千萬ニ候」ニ恥
入つたのみでなく、又更に「……此次ハ野戰ノ趣味充分賞翫可レ仕相樂居候」ニ記し

た心事は、親友の寺内氏に犇々考へられるものがあつたであらう。第三軍の高級副官として乃木將軍の信頼深かつた吉岡少佐（友愛、後の大佐）が中佐に進み、第六聯隊長に榮轉し、その後任者として塚田中佐（清市、後の大佐）が東京を出發する時、寺内陸相が第三軍の幕僚に窃かに傳言したのは「乃木を殺さぬようにしてくれヨ」と云ふことであつた。乃木氏の爲人を知る親友には、端的に其の心事が察せられたがためでなければならぬ。殊に旅順を取るに同時に、第三軍の首脳は總て更迭せられるであらうと云ふ風評が頼りであつたのみでなく、司令官の乃木將軍も亦罷免されるらしいこの流説すらあつた。事實に於て軍部に此のことが云爲されたかも知らぬ。併し限無き陛下の御信任は乃木將軍にあつたではないか。「海の東郷」も「陸の乃木」も動かすことは出来なかつた！そして更迭説は霧散してしまつたが、骨を馬革に包んで陛下に謝し、國民に應へようとする熾烈の乃木氏の念願は、北征の途に肅々として上る當時から更に赤熱し、白熱化したのであらう。左様に考へられるのである。

かう云ふやうに記述する中に思出でられるのは、「海の東郷」も「陸の乃木」もが檜舞臺の柳樹房で會見した日のことで、明治三十七年十二月二十日の乃木將軍の日記に「午前、東郷海軍大將、參謀秋山中佐外一名ト來營、今後作戰ノ目的ニ付相談ス。午食。大庭中佐誘導、火石峯子ニ徒步行、夜ニ入り歸來……」こあるが、この日の兩將の會見は、本書六九一頁の秋山中佐（眞之、後の中將）の談のやうに劇的シーンであると共に、素晴らしい歴史的のものでもあつた。旅順未だ攻陥し能はざるも、二〇三高地を既に奪取し、港内深く蟄伏してをつた敵艦を殆んど撃破し、残るものは僅少になつたので、東航中のバルチック艦隊を邀撃すべく、我が海軍は其の準備をせねばならぬ。勿論、既に準備に怠りなく、聯合艦隊は第三艦隊の一部を残して監視せしめ、他は修理、補充を急ぎつゝあつたが、戦艦八隻、装甲巡洋艦三隻、装甲海防艦三隻、巡洋艦六隻、驅逐艦九隻、特務船九隻の合計三十八隻十五萬餘噸の威力を有するバルチック艦隊を死の海底に葬るべく、「海の東郷」は「陸の乃木」を訪ふたのである。

「海の東郷」は「陸の乃木」を將來の作戰上に遺漏なき相談を試みて午食したが、東郷大將の相談に對して乃木將軍は「旅順の方は心配ないやうに、私が引受けるから」を答へ、食後「海の東郷は」火石峯子の海軍陸戰重砲隊を訪ふことになつた。柳樹房から火石峯子へは一里餘もあるので、馬背を借らねばならぬが、「海の東郷」は乗馬に巧みでなかつたので乃木將軍の日記のやうに「大庭中佐誘導、火石峯子ニ徒歩行」した。そして歸來したのは夜の九時であつたが、夜食を終り、兩將更に快談し、「海の東郷」が柳樹房を辭去したのは、漸く最終の汽車に間にあふ夜半の十二時近くであつた。長嶺子のステーションまで見送つて來た「陸の乃木」は、將に列車の發せんとする直前に「海の東郷」を握手し、「再び御目にかゝる時があれば、君國のために御目出度いことで、その時を期待します。御身體を大切に！」

「凝視し、眼は力強く輝いてをつた。當時を靜かに冥想して「海の東郷」は特に本書のために「靈德巍然」を題したが、當時のこゝも偲ばれるではないか。

◇ 乾坤一擲の快戦

明治三十八年一月二十四日、思出で深い旅順——柳樹房——を出發し、北征の途に肅々として就いた乃木將軍は、黒溝臺會戰の殷々たる砲聲を聞きつ、翌々日に遼陽に入つたが、ここに滞留して軍容を整ふることに約一箇月、二月二十七日から乾坤一擲の奉天戦に参加し、全力を傾けて祖國のために盡すことになつた。

奉天戦！ 奉天會戰は未曾有の大戦であつたが、戦前に「日本勝つべし」を斷定し得るものは、皆無（に非ざるも、極めて少數）であつた。當時に於けるロシアの陸軍は世界一を矜持し、猶ほ獨逸すらも之に一籌を輸する實情であつたがために、開戦と共に、我軍が文字通り連戦、續捷し、クロバトキン將軍が些の臆面なしに豫定の退却に次ぐに退却を以てしても、露西亞が奉天に向つて兵力を滞りなく集中し、攻勢に轉じようとする形勢が明かになるに同時に、「露軍勝つべし」にするものが又更に多くなつた。疲勞と缺乏とに悩みつゝある日

本は、悲哉。一日に壓迫せられ、勝敗の地位必ず轉倒するであらうに稽へられた。そして奉天戦は異常なる注目と緊張の裡に開始せられたが、如何に彼我の兵力に徑庭があつたかは、次表が之を雄辯に語つてをるのである。

種別(單位)	日本	露西亞
歩兵(大隊)	二四〇〇〇	三七九・五
騎兵(中隊)	五七・五	一五一・一
工兵(中隊)	四三・〇	四三・五
砲(門)	九九二	一、二一九
機關銃(挺)	二五四	五六
師團數	一九	三〇・五
戰鬥員(人)	二四九、八〇〇	三六七、二〇〇

(備考) 露國側の騎兵一五一・一とあるは百五十一中隊と一小隊を表示する。

又更に露軍側は如上の兵力のみでなく、本國から歩兵四十八大隊、騎兵四十二中隊、砲兵三十六中隊を輸送中であつたが、クロバトキンは此の増加すべき兵力を其の手中に收める以前に速かに我軍を撃破しよう云ふ意圖であり、積極的の行動を開始して頻りに我軍に壓迫を加へたのである。

この敵に對峙した我が兵力は、實に前表の如きものであつたが、考へれば、當初に於ける日本の對露國の打算には見込み違ひのあつたことが明了した。云ふのは——シベリア鐵道に依つてロシアの滿洲に輸送し得る兵力は、單線であり、且つバイカル湖は汽船を用ひるので、三十萬を越えることはないのであらう。假令其の本國に夥しい兵力を擁しても、この滿洲に向つて集中する三十萬を撃破し、續いて輸送せられるものを更に潰滅せしむれば恐るべきでない——結論し、この結論を正しいとするものが多數であつたからである。

然るに實際に於ては左様でなく、この結論の正しくないことが明了した。見よ、バイカル湖の汽船を用ひて連絡しつゝ、あるを廢し、岩石の重疊する湖畔を開鑿して線路を敷くことに

成功し、シベリア鐵道は直ちに滿洲に露本國を連絡してしまつたではないか。そのシベリア鐵道に依つて輸送せられる軍隊の列車が目的地に到達するに共に、空車の儘に本國に之を送還し、再び軍隊の輸送用たらしむるにこみなく、使用して其の用途を了るに同時に、惜氣もなく之を破毀し、又更に新しく裝備した列車を以て輸送したので、日一日に滿洲に露西亞の兵力は激増し、我に倍加するのみでなく、三倍するの日も亦遠くないであらうに云ふ形勢になつた。當時は此のこみを國民に知らしめず、今日に於ては「過去のこみだから……」と左して問題とするものもないが、明治三十八年二月、三月に於ける我國の爲政者、軍部の當局者には、これが異常の惱みとなり、皇國の興廢此の一戦にありの感切實であつた。萬一にも奉天戦に敗者となれば、我が日本の前途終に暗黒あるのみであつたからである。

唯だ兵力に於て我國が露西亞に比較し、大なる遜色があつた許りでなく、既に旅順の攻圍戰（のみでなく、到處）に於て經驗したやうに、兵器に於ても我軍は露西亞に及ばず、更に用意の足らなかつたこ事も事實であつた。兵力に於て不足し、兵器の質及び量に遜色が

あるにか、はらず、昂然として露西亞に優越し、猶ほ光榮ある勝利者の地歩を譲るまいとする。何を皇軍は恃み、倚賴したのであらう。勿論、祖國愛に灼熱する日本人としての意氣があつた。スラブ魂を克服する日本魂あるのみであつた。

殊に左翼にあつて士氣振へる乃木將軍の第三軍は、滿洲軍にしても倚賴する處異常であつたが、敵の畏怖するこも甚だしかつた。「乃木軍到る！」の報告は、敵將クロバトキンを窺かに戦慄せしめたのみでなく、總ての露軍の色をも容易に失はしむるものであつた。然るに當時の第三軍の兵力は、第一、第七、第九の三個師團を主力とし、後備歩兵一旅團半、騎兵、砲兵各一旅團から成立してゐたが、戰鬥人員は四萬五百人！二個師團だにも足らぬ貧弱なものに過ぎなかつた。特むは四萬五百の旅順に於て苦闘したスチールのやうな戰鬥員を中堅とするこみのみであつたのである。

かう云ふやうな状態で第三軍は北進し、奉天戦に参加するこみになつた。そして二月二十八日に軍司令部は小北河を出發し、敵の騎兵を驅逐しつゝ、渾河に遼河の間を邁往したが、三

月一日には右翼の第九師團が四方臺を攻略し、軍ごしても、總司令官の定めた作戰計畫上の第一の目的線——大民屯から小民屯を連契する線——を占領したので、今や奉天に向つて正面するこゝになつたのである。

然るに如何にしても第三軍と總司令部との聯絡が取れぬ。第三軍の電線は、久しく旅順に於て風雨に曝され、損傷した不完全のものであるのみでなく、それを「露探」が切るので、左なきだに通話が甚だ面白くなく、友軍の状況は前日來の攻撃が毫も進捗せぬと云ふこゝが明了してゐたのみで、その後のこゝは電線が役だ、ぬやうになつたので不明である。孤立と同じ立場に置かれた第三軍は總司令部からの命令を受けるこゝも出来ぬので、「如何にすべし乎」に困惑したが、冷かに戦局より判じ、冒險であつても、一路直ちに邁往し、奉天に向ふこゝに乃木將軍は決心した。不完全な地圖に依るこゝであり、彈藥や糧食が續くか疑問であつたが、司令官としての乃木將軍は「孤軍直ちに奉天を衝く」て決心をなした。斯くするこゝが戦局を吾に有利に導く。この爲或は第三軍は全滅するやうなこゝになるかも分

らぬが、我が全軍のために之が有利であるを判断をしたからである。

この決心を聞いた幕僚は、司令官を凝視し、又互に顔見合せて言葉もなかつたが、聽て討議の結果は「司令官の決心が適當である」と云ふこゝに一致し、且つ「……成否の御受合ひは出来ませぬが、將卒が最後の一人まで戦ひましたならば、假令第三軍が全滅しましても、全滿洲軍の得る利益は、必ず甚大であります。何卒十分の御覺悟で斷行して下さいませう。而して萬一にも不成功でありました場合には、閣下、冀くは御腹を御召し下さい。私共も俱に御供を仕ります！」と異口、同音に述べたが、その時に將軍の顔には、如何にも快い微笑があつた。併し幕僚に取つては「……過激に涉つた、強く申上げ過ぎた」ことの悔恨がないでもなかつた。

その夜半——三月一日——になり、第九師團の架けた裸線をもつて總司令部と第三軍の聯絡は偶然取れたので、直ちに通話した。處が「奉天に孤軍直ちに邁往するのは甚だ危険ぢや」と總司令部では不賛成であり、中止せしめようとしたのであるが、既に命令を發し、その一

部は既に行動を起した以後であつたがために、如何にもするここが出来なかつた。そこで總司令部でも「さう云ふことなら萬已むを得ないが、注意の上にも注意するようにせい」辛じて承認を與へたので、翌二日は皚々たる白雪を蹴つて奉天に向ひ、午後には沙岩堡に優勢の敵と遭遇し、乃木將軍は第一線——沙岩堡の南一丁許の墓場——で夕刻まで軍の統帥に任じたのである。

力戦更に力戦したが、勝敗未だ決定せず夜になつたので、乃木將軍は沙岩堡に宿營するに云ふ。勿論、この地方で沙岩堡は第一の大きな部落であつたが、彈丸は文字通り飛來して甚だ危険である。如何に危険であつたかは——監理部長の渡邊中佐（滿太郎、後の中將）の指揮下に設營してをる三等獸醫の森清克（後の二等獸醫）が負傷し、遂に双眼を盲するこになつた事實に依つても了知し得られるであらう。さう云ふやうに危険であつたにか、はらず、將軍は「泊る！」と決心を明かにしたので、そこに設營して司令官も幕僚も泊るこになつたのである。

◇「死！」を必期して

乃木將軍が「泊る」と頑強に唱へて設營した沙岩堡は、奉天から四里餘の地點であり、露軍が糧秣その他を集積した處であつたがために、退却と共に逸早く火をはなつたので、我軍の入つて設營した時には、焔々燃えて凄慘の狀であり、彈丸は頻りに飛來するにもか、はらず、幕僚は此の混亂の裡に翌日の計畫を進めてゐた。そこに司令官の專屬副官であつた松平大尉が訪れ、如何にも心配相に、參謀副長の河合中佐（操、後の大將）に、

「司令官の居間に小銃彈が頻々こやつて來ますので、他に御移り下さるやうに御願ひ致します、御聞入れになりませぬ、如何致しませう」

と訴へるのであつた。勿論、かう云ふ場合に並大抵のこゝで將軍を動かせるものでない。それを能く心得てをる河合中佐は、如何にも無造作に、

「それでは、今、幕僚は參謀長と明日の計畫をたて、ゐますが、略ぼ計畫も立ち、適當の

處に地圖も展いてありまして、都合がよろしうございますから此方においてを願ひます——
「ご申上げてくれ給へ」

「ご答へた。然るに副官が歸つて報告するに乃木將軍は幕僚のゐる室に悠然訪つた。この部屋には敵の銃丸を避ける圍壁があつたので、漸く安全なるを得たが、沙岩堡そのものが最初から決して樞要の司令部を設置すべき處でなく、移轉せねばならぬと考へられた。併し「危険だから……」云ふ理由のみで司令部の移轉に快く將軍の同意の得られないことは諒會せられてをるが、冷靜な頭で計畫を練らねばならぬ幕僚としては、かう云ふ場所ではない、考への出来るものでない。そこで夜の十時も過ぎ、漸く翌日の命令を受領者に手交し、煙草を手にした河合中佐は、

「あ、かう云ふ場所になるては、逆も幕僚の仕事は巧く出来ぬ。困つたことだ！」

「ご獨語した。當時の河合氏は參謀副長であつたが、參謀長は病氣であつたので、責任も重かつた。その人が斯様に歎じたので、乃木將軍は河合氏を凝視してゐたが、その胸中を直ちに察知したらしく、

「それぢや直ぐ後退しよう。何處へでも行くヨ」

「ご微笑しながら促すのであつた。その時が午後の十一時に近かつたにか、はらず、直ちに後退し決し、第三軍司令部は約一里の後方の小部落に移つたが、天祐も云ふのであらう。沙岩堡には翌朝、頗る優勢の敵が逆襲し、文字通り砲彈の巢になつてしまつた。若し後退せず、司令部を設置したまゝであつたならば、その結果は甚だ憂慮に堪へぬものであつたかも知れぬ。亦測り難かつたのである。」

「勿論、この日——三月三日——の戦ひは非常に易く優勝するを得、樂々敵を撃退してしまつたので、旅順の攻圍戦に苦惱した將卒達に「フム、野戦に云ふものは斯様に樂なものか」ご感念せしめ、大に士氣が振つたのみでなく、未だ準備の十分に整はなかつた敵軍を抑へる結果もなり、乃木將軍が孤軍直ちに奉天を衝くの策戦を立てたことこの機宜に適へるを立證して餘りあるものであつたのである。」

斯くて四日の第三軍は、總司令官の命令で前進を一時中止し、五日には司令部を後民屯にす、め、その第一線は大石橋、李官堡、張士屯の地點を連ね、奉天を去る二里の線に進出し、各部隊は終日健闘したが、敵は堅固な工事を施し、頑強に抵抗するので、勝敗未だ決定せずして夜ミなつた。第三軍は第二軍の前進に伴ひ北方に移轉するこゝとなり、右翼第九師團のるる地點に、第二軍の令下に屬した第三師團を進出せしむるこゝになつた。かう云ふこゝが演習の際であれば、敢て困難でないが、時は猛烈に敵ミ彈丸の應酬中であり、土地は不案内であつたので、この蟹の横行的行動は頗る困難、且つ危険であつた。

乃木將軍は幸に左翼第一師團の前面には未だ敵が左程に多くないので、これを先づ北方に移し、中央にゐる第七師團は強敵を控へてゐるので移動せしめず、第九師團は第三師團と交代して後第七師團の背後を透らせて第一師團のゐる場所に箱込むこゝとした。斯様な運動は、この日のみでなく、九日に乃木將軍は大膽にも再び第九師團を第一師團の左翼に移したが、六日の此の運動を敵も察知したか、第七師團を猛烈に攻撃し、將に堤防の潰えるやうな

危地に臨んだが、野砲兵旅團の勇敢なる應援で第九師團の進出に依り、第七師團は危地を脱した。かう云ふやうに奮戦して第三軍は奉天の西北方に進出し、敵の背面に迫つたのである。第三軍にまつて最も思出での多いのは七日であつた。明治三十八年二月下旬から奉天に向つて進撃した我が滿洲軍は、最右翼の鴨綠江軍、次いで第一、第四、第二の各軍何れも全線に互つて力攻しつゝ、あつたが、豫定の如く進捗せぬので、總司令官大山元帥、總參謀長兒玉大將の苦衷は、殆んど想像の外にあつた。四十里の戦線、百萬に近い兩軍の對抗……我軍の補充力の貧弱（ミ云ふよりも、空乏）に比し、敵は一日より一日ミ新銳を加へ、攻勢に轉じようとする。三月七日は我軍に取つて危険の迫つた當日で、今にも逆襲に敵は成功し、攻守俄かに一轉して我軍の總退却となるかも亦測り難い形勢さへも見えたのである。

如何に此の七日に我が將卒が悪戦し、苦闘したかを語るべき實例は、第六聯隊の全滅である。滿洲軍の總豫備隊から第二軍の令下に入つた第三師團は、第三軍の右翼に在つて健闘し

つ、あつたが、その第三師團に屬する第六聯隊は第一線に進出し、李官堡を奪取した。然るに優勢の敵は逆襲に出で、第六聯隊は終に包圍せられ、聯隊長以下一兵を残さず全滅してしまつた！ 聯隊長の吉岡中佐(友愛、後の大佐)は、旅順の攻圍中に乃木將軍の下に高級副官であり、最も信頼を受けた立派な精神家であつたので、その部下も之に感化せられたものであらう。或る大隊長は割腹して仆れ、兵は散兵した儘に戦死してをつたさ云ふ壯烈なものであつたのである。

又更に第三軍の右翼にあつた後備旅團の如きも亦其餘波を受けて遺憾ながら一部分が潰亂し、血だらけになつた旗手が駈り軍旗を捧げて軍司令部に駈込み、後退しようとする味方を旅團長が軍刀を以て斬捨てるさ云ふ凄惨なものであつたが、勿論、第三軍は苦戦に陥りながらも力戦し、全線に互る形勢を大に有利に導くべく最善を盡しつゝ、あつた。併し終日の大努力も奏效せずして夜になつた。夜半の十時過ぎであつたらう。總司令部の參謀松川少將(敏胤、後の大將)が電話で第三軍の作戰主任(白井中佐)を呼び「……何を愚圖ついでを

る？ 今日第三軍の攻撃は鈍かつたぢやないか、軍司令部はもつゝ前方に出て積極的に督戦せねば駄目ぢや」ミ通話してをる中にけた、ましく電信機は響く。受信したのは「本日の第三軍の攻撃は遅緩たるを免かれず、更に奮勵、健闘し、以て目的の達成に努むべし」ミ云ふ意味の訓令であつた。

「……何を愚圖ついでをる？」ミか、或は「今日の攻撃は鈍かつた、駈りやれ！」ミか、又更に大に非難がましい訓令ミなつては、倦まず健闘しつゝ、ある第三軍の幕僚も悲憤の涙を抑制し得ない。又況んや司令官をやである。總司令部から此の訓令あるミ共に、乃木將軍は沈痛に考へつゝ、あつたが、直ちに第三軍の全員に此のミを布告したので、揮下の各部隊は「……吾々は眞に全力を盡して奮戦してをる。これでも攻撃が鈍いミ非難されるならば、一人残らず戦死し、司令官に御詫びする外はない！」ミ憤激するに至り、士氣の振ふミ名状すべからざるものがあつた。全軍「死！」を必期して敵を撃破しようとする烈しい意氣に燃えたのである。

◇武士道を如實に

全軍皆な憤激して「……一人残らず戦死し、司令官に御詫びしよう」七日の夜から八日に掛けて一段々第三軍の士氣は振つたが、八日の朝に開始した我が攻撃は、實に壯烈そのものであつた。と同時に、敵の砲彈が司令部——新民屯街道の大石橋——の駐屯する處に飛來し、豫備隊に命中するのみでなく、各師團の幕僚は司令部からの電話を聴くために室外に出れば、狙撃されるに云ふ接戦であり、勝敗の數は豫斷を許さぬものがあつた。そして一角が若し潰裂すれば、萬事休するの危機に瀕してをつたのである。

第三軍の大石橋の司令部は、民家の狭い一室にあつたが、そこに司令官も、幕僚も一緒に仕事をしてゐた。處が悠然と報告を受け、戦況を判じてゐた乃木將軍は、俄かに思出したもの、やうに立ち、如何にも無造作に、

「儂は一寸出かけるから馬を……」

副官に命じ、外出しようとする。時は午前の八時頃であつた。豫て將軍の行動に深く注意してゐた幕僚達の神經は尖つたが、殊に一段々責任重き河合中佐は、

「不可ませぬ。只今は第三軍の危急存亡の時、御坐いまするので、軍司令官が此處を御動きになつてはなりません」

之を諫止したが、將軍は軽く點頭しながらも、猶ほ「イヤ、そこ迄一寸行つて直ぐかへるから……」馬の用意を命ずるのであつた。河合中佐は文字通り緊張して「不可ませぬ」頑強に之を阻止した。その時に部屋の間横臥し、うき／＼してゐた重態の參謀長——松永少將（正敏、後の中將）は、電氣にでも打たれたやうに不意に立ち、

「河合が只今申しあげたことは、最も至極で△います。閣下が此の際茲を御離れになることは、斷じて不可ませぬ。若し如何にしても御出掛けにならねばならぬもので御坐いまするならば、私は病中でありますが、閣下の御代理をいたしませう」

悲壯に述べるのであつた。第三軍參謀長松永少將は、軍が奉天に向つて攻撃を開始す

る以前から胃腸を害し、日一日に病勢は悪化するのみであつたが、當時は更に黄疸を併發して熱も亦高く、終に重態に陥つた。そこで後方に歸つて入院するように勸告せられたにかかはらず、頑として承引せず、「この戦ひは帝國の運命を決するものであり、第三軍は特に重大の任務を荷つてゐるので、是非軍行動を共にしたい。若し途中で仆れるやうなことがあれば、武人として寧ろ本快である」を強ひて行動を共にしようとする。乃木將軍は其の衷情を憐んだものであらう。強ひて歸らしめようと思はず、氣儘にさせてあつたが、重態に陥つて職務が執れぬようになるに同時に、松永少將は參謀副長の河合中佐に「僕は病氣ぢやから君に萬事を頼む」を依囑したので、河合中佐からも既に記述したやうに、寺内陸相が塚田氏の赴任に際し、第三軍の幕僚に「……乃木を殺さぬようにしてくれヨ」の傳言のあつたことや自分が滿洲軍參謀から第三軍の參謀副長として赴任する際、大山、兒玉の諸將達から申合められてゐたことを語つて「……乃木將軍の御身邊に萬一のことがありまする場合には、到底私共の微力では致方がないませぬので、閣下の御配慮を御願ひします」を懇請

し、參謀長も「承知した、必ず微力を盡すから……」を應諾してゐたので、こゝに然諾を重じて決然かう云ふ申出でしたのであらう。挺身して司令官の代理をしようとする病中の參謀長の心事に對し、幕僚は強く感激し、涙ぐましい劇的シーンを描いた。沈黙は室を占領してしまつたのである。

松永少將が「……私は病中でありますが、閣下の御代理をいたしませう」を起上つた時、乃木將軍は「ウーム」を參謀長を凝視した。外には銃聲、砲聲が烈しく、戦ひは次第に白熱化する。廳で將軍が「い、のですか、行けますか」を不安さうに問へば、力強く參謀長は「大丈夫で御坐います」を答へた。こゝに於て將軍は漸く決心したらしく、

「……御氣の毒ぢやが、君に御願ひすることにしよう」

を快く依囑するに至つたが、何の要件を以て將軍が參謀長に代理を托したか、又更に參謀長も如何なる目的の下に外出するのか、双方共に説明せず、問ひもしなかつた。そして參謀長は病軀を危く同僚に助けられて馬上の人となり、司令官附の衛兵長を傳騎を從へ、痛

ましくも戦線に向つたが、見送る將軍の眼に熱涙があり、幕僚も皆な俯向いてしまつた。顔を
得上げるものはなかつたのである。

旅順の攻圍中にも、乃木將軍は屢々親しく戦線に到つたが、それを幕僚が諫めて「危険な
處に御出でになるのは宜しく御坐いませぬ」云へば、將軍は事も無氣に「ウム。僕は危険
な場所を除けるこゝが上手ぢやから少しも心配はないヨ」云つてゐた。……云ふやうな
こゝを承知してゐる人々も、今、將軍が自ら戦線を巡視しようとするのを黙視し得なかつ
た。殊に七日に「第三軍の攻撃は遅緩たるを免かれず……」と總司令部の訓令があり、これ
を全軍に布告し、「一人残らず戦死し、司令官に御詫びしよう」云つてゐた時であるが
ために、將軍が「一寸馬を……」と戦線に出ようとするのを河合中佐が阻んだのも當然であ
り、これは幕僚の一致した聲であつたのである。旅順に奉天戦は同一に見るこゝが出来な
かつたから……。

乃木將軍は戦況を判じ、今の場合は「各師團長に親しく面晤して督勵するこゝが何よりも
必要である」を考察したがために、馬の用意をも命じたのであらう。又此の際に戦線に於て
將軍自ら督戦するこゝは、必ず効果も多かつたに相違ない。併し「萬一のこゝがあつたな
らば……？」第三軍に影響する處甚だしいのみでなく、戦局の總てに不利なるは、改め
て説明を須ひぬ。こゝに於て河合中佐の切諫になつたが、病中の參謀長は乃木將軍の意圖
を諒するに同時に、河合氏の苦衷を察し、敢然に司令官に代理して第一線を巡視するこゝに
なつたが、第一線では松永少將の病中であるこゝを夙に承知してゐるので、
「君は病氣ぢやらう。それに責任の重い地位にゐるぢやないか。歸れ、吾々は皆な最善を
盡してゐるのだから……」

こ却つて慰藉せられ、總ての戦線を巡視するに至らずして歸還したが、松永少將は此の大
任を果すに同時に、病氣が愈々重くなつて司令部同一行動が出来なくなつた。軍司令部は
九日に大石橋から造化屯に移駐したが、この日は暴風で、文字通り黄塵萬丈の暴風中にク

ロバトキンは歩兵七十二大隊、砲百十二門を以て乃木軍の突破を執行したが、この敵襲にも堪へた。そして第三軍は次第に敵を壓迫したが、造化屯では我が病院が砲火に焼かれ、軍の幕僚が手傳つて彼等の傷者を救出す云ふ急迫した場面もあり、又更に某後備旅團は敗退し、その餘波を受けて遺憾ながら第一師團の第一線も後退の餘儀なきに至り、その後方には我が砲兵旅團が放列を布きながら一弾をも放つことが出来ず、午後二時頃、第九師團から「豫定のやうに第一師團の左翼道義屯に到着したが、戦闘人員は二千五百人」云ふ報告があり、堂々たる一個師團の兵力が平時の一聯隊にも亦足らぬ實情であつたが、軍の參謀——山岡中佐(熊治)が負傷したのも、第九師團司令部に於て、あつたのである。

翌十日は快晴であつた。我軍の爲に壓迫せられた敵は、終に戦線を維持するを得なくなつたので、汽車に投じ、線路に沿ひ、道路に依つて鐵嶺に向ひ、退却を始めた。勿論、第三軍は之を遮断せねばならなかつたが、敵は鐵道に沿ふた部落の圍壁に依つて我軍を防ぎ、味方の後退を容易ならしめてをるのみでなく、屢々逆襲するので、乏しい兵力を以てしては、全く不可能であり、唯だ腕を扼して長蛇を逸したのであるが、併し奉天は此の日我が軍の占領する處になつたのである。

奉天を我が掌裡に納めた。こゝに於て、驀然、滿洲軍は全力を擧げて追撃に移つたが、十一日の朝、乃木將軍は松永少將を病床に訪ひ、

「最早戦ひは結了した。直ちに後方へ歸つて加療することにしたが宜しい」

「顔に微笑があつても、嚴かに命令した。處が氣丈の參謀長は「御陰で餘程好くなりました、御一緒に御伴いたします」云元氣を示さうとしたが、乃木將軍は八日に於ける態度は全く別人のやうに、

「不可、歸つて十分に身體を癒すのぢや」

「重ねて命令し、追撃戦のため幕僚が將に出發の準備にかゝつてをる時であるにか、はらず、忙裡に將軍自ら擔架を命じたが、司令部には擔架がなかつたので、民家の門扉で之を

急造せしめ、

「フム、出来たか。併し松永は肥つてをるから頑丈に造らぬまいかぬ」

「將軍は運ばれた擔架に乗つて仔細に檢し「これならい、ちやらう」ミ満足らしく見えたが、かう云ふやうにして病中の參謀長は後送されてしまつたのである。

敵を追撃して司令部が桃樹子に宿營した十一日の夜、乃木將軍は河合中佐を招き「八日に儂が松永を戦線にやつたのを何ミ御考へか」ミ沁々問ふたので、中佐は極めて率直に「私は残酷だと思ひました。重態の參謀長を戦線に御出しになるのは、眞に御氣の毒だミ同情に堪へませぬでした」ミ力強く答へた。然るに將軍は「ウム、左様ちやつたらう」ミ點頭き、

「……重態の松永を儂の代理ミして第一線にやつた時には、誠に斷腸の思ひぢやつたが、前夜既に軍醫部長の落合（泰藏、後の軍醫總監）から到底快くなりさうにもないミ聞いてゐるので、松永を疊の上で殺したくない、好い死處を與へてやらう……ミ心強く儂の代理

ミして戦線にやつたのぢやヨ」

「其の心事を明かにした。絶えず「死處」を求めてゐた將軍なるがゆゑに、病みて恢復の望みなかるべしミせられる部下のために、この配慮をもなしたのであらう。彈雨の間に光輝あるロマンスは、かう云ふやうにして永遠に残されたのである。

◇法庫門ロマンス

奉天戦に皇軍は勝つた。光榮ある勝利者の地位を占めたが、戦争は未だ結了したのではない。三月二十一日、敗北者ミしての敵將クロバトキンは、滿洲軍總司令官を罷免、第一軍司令官に補せられたが、代つて第一軍司令官のリネウキツチが總帥ミなり、日一日ミ激増する其の精銳を提げて攻撃に轉ずる機會を狙はうミするので、我軍も之に準備し、攻撃策を力強く樹てるこゝになつた。新しき戦場は果して何處へ？ そこに大決戦は復行はれなければならぬこゝになつたのである。

乃木將軍の第三軍は、四月に入つて遼河を渉り、五月には蒙古境に進入し、その五日に軍司令部も法庫門に移駐したが、「勇猛の乃木軍」の前進を阻み、味方の準備に支障なからしむる作戦上から敵將ミシチェンコは、その指揮する騎兵團を駕御して第三軍の背後を衝かうとした。ミシチェンコ！ 驍名は夙に我軍の間に噴甚し、その統率する胡朔隊の襲撃は、大に脅威をもなつてゐた。ミシチェンコの胡朔隊は騎兵四十五中隊、砲六門、機關銃二挺——總兵力五千五百餘を遼陽窩棚に集中し、頻りに機會を狙ひつゝ、あつたが、五月十六日、太平街附近に進出し、十七日には愈々行動を開始した。そして十八日には倪家窩堡に於て我が第七師團の第二野戰病院を焼き、三臺子では彈藥大隊本部、砲兵彈藥縱列を襲撃し、到處我が電信線を切斷して大房身に南下した。

この大房身乃木將軍の駐營中である法庫門は、三里餘の距離しかないので、胡朔隊が侵入して支那人の部落を焼く凄慘の狀は、我軍の何れからも望見し得る。各部隊は應戦したが、敵は勇躍して更に南下し、第三軍の背面を衝く作戦であることが明かになつた。當時

の法庫門には兵力も乏しく、襲撃を受ければ危険であつたので、軍司令部を何れにか轉移するここにせねばならぬと考へられた。こゝに於て當時の參謀長であつた一戸少將（兵衛、後の大將）は、終に將軍に向つて、

「暫時他に御移りを願ひます」

と進言するに至つた。時に砲兵部長の牟田少將（敬九郎、後の中將）も圍碁に興じてを つた乃木將軍は、參謀長の進言が耳に明確に入らなかつたのか、又或は他に轉移するに云ふやうなここの必要がないと認められたものか、平然として、

「かうなつては退く譯にまゐらぬ！」

ミ石を悠々握り、盤面を睨んで、そこに敵襲もなければ、ミシチェンコも、又更に胡朔隊の存在もないもの、やうであつたが、同時に、有力な敵の來襲にも、我軍の應戰漸く奏效し、二十一日には金家窩棚方面を指して敵將ミシチェンコは退却したので、法庫門は危機を脱したのである。

ミシチニコの胡朔隊は、快速に第三軍の背面を衝く作戦であつたにか、はらず、不成功の儘退いたが、依然として遼陽窩棚に集中し、示威に怠りなかつた。こゝに於て第七師團は之を殲滅すべく、六月十五日、黒澤大佐（源三郎、後の少將）ミ奥田大佐（正忠、後の少將）を支隊長とし、騎兵第二旅團の協力の下に攻撃に當らしめたが、奥田支隊の進撃少しく遅延したがために、包圍して敵を殲殺するに至らなかつた。併し特筆するに足る激戦で、觀戰中の土耳其のベルテ・ペー大佐が負傷するに云ふ狀況であつたのみでなく、敵が遺棄したものの、中に蒙古地圖及び將來作戦すべき土地の重要な書類を獲たので、裨益する處甚大であつたのである。

斯くて五月二十七、八日に於ける日本海々戦は、露西亞をして前途に光明を感じしむるものでなく、六月十日にはアメリカ大統領ルーズベルトの斡旋があつて和議を講ずるこゝになり、九月五日、兩全權の調印を了したので、大本營は六日を以て休戦を令し、十月十四日

講和條約の御批准があつたので、各部隊は凱旋、復員するこゝになつた。

法庫門に滞陣し、凱旋の日を將卒が待ちつゝある或日、乃木將軍は幕僚達を招待し、支那料理で文字通り歡待したが、餘りに鄭重なものであつたがために、何のための招宴であつたか、勢ひ問題ならざるを得なかつた。そこで河合中佐が塚田中佐に、

「可怪しいぞ。君、戦時名簿を一寸見せい」

ミ要求した。司令部の高級副官である塚田氏も、河合氏と同様に「可怪しい」ミ考へてゐたのであらう。如何にも心外相に舌打ちでもするかのやうであつたが、河合中佐を滋々見ながら苦笑し、

「……昨日將軍から一寸貸してくれミ御持ちになつたまゝになつてをる」

ミ答へた。果然、河合中佐は「ほらやられた。屹度將軍の誕生日ちやヨ」ミ膝を力強く叩いたが、後に名簿を覗けば、推定は違はず、十一月十一日であつたので、同僚に向つて、
「暫く沈黙しててくれ、少し我輩に考へもあるから……」

河合氏は微笑し、頻りに點頭いてるが、間もなく幕僚のゐる隣の部屋にはカンク、ゴシ／＼云ふ建築でもするらしい音が威勢よく聞えるやうになつた。軍司令官、参謀長、各部長の宿舎は離れてゐるので、勿論、聞えないのみでなく、乃木將軍が幕僚達の部屋に訪れる一切に音がしなくなる。そして歸るも亦音が聞える。十數日……或はより以上の日が経過したであらう。突如として司令官、参謀長、各部長に幕僚からの招待状が到着した。

「今日は何ぢや？」

招待に應じて來訪した將軍は、ニコ／＼しながら問ふのであつたが、河合中佐は何も返事をせず、幕僚達の部屋から離れた牒報部の部屋に案内し、用意が整つてから會場に導き、入口で、

「何卒靴を御脱ぎ下さい」

云ふので、聊か將軍も驚いたらしく「ウム……？」と反問しようとしたが、見れば刀掛けもあり、廊下にはアンペラに縁取りがして疊を敷詰めたやうになつてをるのみでなく、室

内に入れば立派に日本式の座敷である。乃木將軍も何もなく異様に感じたらしいが、更に案内せられて行けば、そこは二十餘疊敷の室であり、一方は床になつて旭日に波の軸物が掛けられ、弓矢がたてられてをる。それと反對の方は立派な舞臺掛りの設備で、その上に鎧櫃が置かれ、造花が美しく飾られてある。仰げば楣間に「祝誕辰」の額もかり、純然たる日本式の宴會の設け——膳椀に云ふやうなもの——が出來てをるので、入つた將軍は、

「ホホオ、これは……！」

意外な室の様子に驚いてるが、如何にも眞面目くさつた河合中佐に案内されて著席すれば、参謀長、各部長も列座した。そして誰か合圖でもするやうに軽く拍手すれば、河合中佐は起ち、

「司令官閣下の御臨席の光榮を得ましたことを發起人を代表して厚く御禮を申しあげます。先般私共は御招待に接しましたが、閣下の御誕辰も存知ませず、誠に失禮を致しました。この事を御詫びしますと共に、今日は恰も舊曆の十一月十一日に當りまするの

で、先日の御返禮旁々閣下の御誕辰を御祝ひ申上げたいご御招き致した次第でムいまする
ので、何卒御ゆつくり御寛ぎを願ひます」

ミ招待、開會の辭を丁寧に述べれば、乃木將軍は文字通り微笑し、限りなき満悦の様子であつたが、河合中佐は更に言葉を續けて「閣下の御誕辰を御祝ひの印に私共が合唱いたします」ご告げれば、主催者の參謀——井上少佐（幾太郎、後の大將）、河西大尉（惟一、後の中將）、津野田大尉（是重、後の少將）、安原大尉（啓太郎、後の少將）、貴志大尉（彌次郎、後の中將）、樋渡大尉（盛廣、後の大佐）等——は起立し、

西施揚貴妃生せた親の
自慢娘の旅順じやけれど

昔口説いたらつい落ちたのを
いつか忘れて養女にいつて

今じや露南亞の箱入娘
落ちぬ噂が世界に高い

鐵條網の八重の關する
掩蓋深く姿も見せず

水門口から忍んで行けば
探海燈の目でおごしつけ

今じや露西亞の箱入娘
落ちぬ噂が世界に高い

勸降書と云ふ附文見ても
けんもほろゝのすげない返事

頼み頼むだ白だすきさへ
途中まで往て追還された

今じや露西亞の箱入娘
落ちぬ噂が世界に高い

昔落した馴染じやものを
今度落さにや男が立たぬ

落ちぬなびかぬ名代の娘
日本男子が落して見せう

戀の邪魔する黒鳩公が
沙河の向うで躊躇する中

此方やお先へもうお正月

屠蘇の樽嫌で口説いて見たら

落ちぬ靡かぬ名代の娘

又もころりといつゝ落された

鷗外漁史——第二軍々醫部長森林太郎——の作にかゝる「箱入娘」を子供のやうに無邪氣に合唱するのであつたが、最後の「又もころりといつゝ落された」も合唱が終つた刹那、舞臺に置かれた鎧櫃が破れ、その中から盛装した「美人」が颯々起上つて風のやうに將軍の側面に突進して「御酌！」と徳利を捧げれば、それを合圖に室外に控へてゐた女装の兵卒達が如何にも淑かに進入し、頻りに酒間を斡旋するので、更に將軍は興じ、上衣さへも脱ぎ、陶然として酔ひ「婦人」達のために狂歌を揮毫して與へなきてゐた。

こゝに少しく説明を加へねばならぬこゝがある。云ふのは、陣中に於て内地に違はぬやうな膳碗を使用してゐるからである。戦地に在つては、勿論、不自由なものであるが、第三軍の司令部は主將が乃木氏であるがために、殊に質素を旨とし、一切のこゝが文字通り儉素であつたにかゝらず、かう云ふやうに膳碗を使用したのは大に苦心が存する。

休戦に入り、凱旋するこゝになつたからは、十月十日、法庫門の郊外——西山——に於て第三軍の戦死病死者の招魂祭を舉行したが、乃木將軍自ら揮毫した「第三軍戦死病死者將卒靈位」てふ柱は見事なものであつた。それを「焼棄てよ」云ふ將軍の命であつたが、文字のみを削つて木材は河合中佐が貫つてあつたので、これで膳其の他を製作し、椀類は新に友軍として來た第十四師團に借りたが、その第十四師團長は、奉天戦に病軀を押して從軍した參謀長の小泉(正敏)中將であつたのである。

◆ 記念の凱旋軍歌

休戦令せられ、平和克復するに同時に、乃木將軍は凱旋後のこゝに想到し、部下に向つて訓示し、誨へる處少くなかつたが、十一月には自ら作詞し、軍樂長山本銃三郎をして作曲せしめた次の軍歌が第三軍の將卒の間に聲高く唱はれるやうになつた。

其の 一

我が日の本の軍人
弱き敵とて侮りはせぬ
強を挫く力と知れや
弱を助ける情もござる
千歳 萬歳 萬々歳

其の 二

我が日の本の軍人
家も命も何思ふべき
五條の勅諭を唯守るなり
日本魂で勅諭を守る
千歳 萬歳 萬々歳

其の 三

我が日の本の軍人
功名手柄を無にしちやならぬ
命捨てたる其戦友の
鮮血に染めなす色とも見よ
千歳 萬歳 萬々歳

其の 四

我が日の本の軍人
農工商業皆夫々に
戦するの心は同じ
和合一致の尙武の心
千歳 萬歳 萬々歳

其の 一

強き敵とて何恐るべき
勝ちて驕らぬ此心こそ
強を挫く力を持ってば
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

其の 二

君と國とに捧げし身には
心は石か鐵なるか
日本魂を勅諭で磨き
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

其の 三

討死なせし其戦友の
國の譽も我身の幸も
骨を碎きし響と聞けよ
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

其の 四

軍役終れば故郷にかへり
正しき道に務ることは
家を富ませば國また榮ゆ
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

改めて説明を加へるまでもなく、この軍歌は戦勝にのみ酔ふことなく、平時に於ける國民の心得を高調したもので、その精神を汲めば、流石に我が乃木將軍の心事を想ふべく、今日に於ても、尙且つ強き或物が感ぜられる。この心掛けを忘れてはならぬ沁々かんがへられるであらう。

記述が少し横道に逸れるが、明治四十年九月五日、往年第三軍の參謀副長であつた河合大佐（操、後の大將）に寄せた乃木將軍の次の書面は、こゝに掲げた記念の凱旋軍歌と同じやうに、祖國愛を象徴するもので、マカラ一氏著「胡朔隊從軍記」の記事と共に、我が國民の深く玩味すべきものであらう。

拜啓 愈御健勝欣賀々々。マカラ一氏胡朔隊從軍記閣讀候。實ニ快感ニ不堪候。終ニ結尾之一節ニ至リテハ、所謂胸ニ打ルル釘よりも痛く感動致し候。此一節ハ日本軍人ニ取リテハ、眞ニ金玉ノ教訓、座右銘トモ可レ致程ニ覺申候。右書ハ今一應見度處も有レ之

候間、今暫ク借用仕置度、尙御用之節ハ何時も返上可レ仕候間、此段御承知相願度御意得候。余ハ拜青ニ讓如レ。此候。草々不宣

九月五日

希典

河合賢臺 尊下

マカラ一氏著「胡朔隊從軍記」に云ふのは、日露戰中に露國側に從軍し、奉天會戰に黒木軍の捕虜となつた紐育ヘラルド特派員フランシス・マカラ一の著作した「With the Cossack 1903」を當時の陸軍大學校教授岡田哲藏氏が譯し、明治四十一年三月、我が陸軍大學校で刊行したのであるが、當時河合大佐は陸軍大學校幹事であり、この「胡朔隊從軍記」に感ずる處淺くなかつたので、乃木將軍に其の草稿の一覽を乞ふた。然るに將軍は之を一讀し、果して感銘が深く、此處に掲げたやうな書面を河合大佐に率直に寄せたのみでなく、當時の大學校長井口中將（省吾、後の大將）に其の出版を特に慫慂したが、河合中佐への書柬中の「結尾之一節ニ至リテハ、所謂胸ニ打ル、釘よりも痛く感動致し候」云々の一節は、次

のやうなものである。

日本陸軍ノ少壯士官ハ、兎ニ角極メテ交際シ易ク、又人ヲ疑ハザルコト、恰モ英國海軍士官候補生ノ如シ。而シテ此ノ戦役中彼等ハ、幕府時代ニ成長シテ、武士的教育ヲ受ケタル、嚴格ナル長官ノ下ニ戦ヒシト雖、予ハ此ノ武士的情操ガ永久ニ日本ニ存在セントハ信ゼザルナリ。予ガ見タル所ニテモ、既ニ業ニ所謂古代ノ武士道ナルモノ、廢タレントシツ、アル兆候多カリキ。

然レドモ、世ハ滔々トシテ商人根性ニ傾キ、人ハ益々世界的トナリテ愛國心ヲ失ヒツ、アルノ今日、日本將校ガ世界ニ與フル教訓ハ偉大ナルモノアリ。日本將校ノ俸給ハ、一ヶ月僅カニ三四十圓(三四磅)ニ過ギズ。其ノ昇進シテ聯隊長トナリ、師團長トナルコトアリトスルモ、尙其ノ收入ハ、横濱商人ノ一笑ニ附スル所ナリ。金錢ハ日本將校ノ顧ミル處ニ非ザルナリ。

大日本帝國ノ光榮——之レ日本軍人ノ理想トスル處ニシテ、日本將校ハ此ノ理想ノ爲メニ、其ノ一生ヲ犠牲ニ供シタルナリ。若シ之ヲ哲學上ヨリ論ズレバ、或ハ左程ニ大ニ高尚ナル理想ニアラズト云フ者アランモ、何ノ理想ヲモ有セズシテ、今日ノ生活ニ碌々タルニ比スレバ萬々ナリ。今ノ世、苟モ理

想ノ爲ニ其ノ生命ヲ犠牲ニ供セントスルモノ、夫レ幾人カアル。

これは陸軍大學校刊行のマカラー氏著『胡朔隊従軍記』最後の第十八章「日本運送船阿波丸——日本將校」中の三〇三——四頁に記された一節であるが、見よ、更に三一——二頁即ち『胡朔隊従軍記』の末尾には、次のやうに喝破せられてをる。今、この文字を讀むものは如何に感ずる。乃木將軍は「……此一節ハ日本軍人ニ取りテハ、眞ニ金玉ノ教訓、座右銘トモ可レ致程ニ覺申候」ニ述べてをるのである。

日本兵ガ一般戦地ニ行クヲ非常ニ樂ミトナシ居レルコトハ、之即チ日本軍ノ成功ノ存スル所ニシテ、露兵ガ一向ニ不熱心ナルニ反シテ、日本兵ハ一兵卒ニ至ルマデ、戦ニ勝タントテ、殆ンド狂セル如クナリキ。然レドモ、此ノ日本人ノ顯セル氣性が、古今ノ歴史ニ見ザル所ナリト爲スハ、大ナル誤リナリ。モントミラルノ應招兵、パンカーヒルニ戦ヒタル米兵、ネルソンノ英國水兵、一八七〇年ノ獨逸兵——此レ等ハ、皆ナ日本兵ニ勝ルトモ、決シテ劣ラザル程ニ狂セルモノナリキ。然レドモ、只ダ現今東洋ニ於ケル其ノ國ノ領地ヲ維持センガ爲メニ、其ノ本國ノ危急、存亡ニ關スル時ノ如クニ、熱心ニナリテ戦

フメシト曰フハ、些サカ無理ナル注文タルヲ免カレズ。此ノ故ニ東洋ニ於テハ、歐米ハ日本ト戦フノ不利ナルモノニシテ、日本ガ其ノ勝手ノ行動ヲ爲スモ、今暫クハ之レニ反對シ能ハザルベシ。

然レドモ、日本ハ戦ニ勝チテ國榮フルノ後、永久ニ今日ノ如キ精神ヲ維持シ得ベキヤ、之レ問題ナリ。知識ハ人ヲシテ冷靜ニ考ヘシム、時ノ經ルニ從ヒ、富ノ増加スルニ從ヒ、物質的快樂ノ發展ニ伴ヒテ、日本人ノ勇氣ト其ノ大和魂ハ漸々其ノ銳キ處ヲ缺クベキナキカ。明治皇帝陛下ハ、日本歴史ニ於テ、人民ヨリ神視セラル、最後ノ天皇タルコトナクムバ幸ナリ。

◇熱涙裡に復命す

王師百萬征強虜
野戰攻城屍作山
愧我何顏看父老
凱旋今日幾人還

この詩の「王師」を「皇師」に改め、「凱旋」を「凱歌」に作つたのは後日のことで、明治三十八年十二月二十九日、乃木將軍が法庫門を出發し、凱旋の途に一步を進めた當時、賦し

て感慨を表はしたものは、こゝに掲げたまゝの一絶であつたのである。

凱旋！ 凱旋は何たる華々しい辭であらう。戰場に於て赫々の名を記録し、勝つて祖國に還ることは、想像したのみでも、猶ほ血湧き、肉躍る。露西亞を亦起つ能はざるまでに屈服せしむることが出來ず、講和條件の不足であつたにしても、「日本軍」の驍名は今や世界に噴甚するに至り、國民は心から凱旋する勇士を迎へ、その勞苦を感謝しようとしてをる。その時——旅順の攻圍戰に「英雄」であり、又更に奉天戰にクロバトキンの心膽を寒からしめた「偉人」であつた——乃木將軍は謙抑して「愧我何顏看父老」を詠じ、快々として祖國に向つたのである。

法庫門から鐵嶺に到り、汽車に投じた將軍は、明治三十九年一月一日、思出での多い旅順に著し、一箇年前に肉弾を投げ、精根を盡して奪取した各砲臺を巡視したが、こゝに滞在するこゝ實に五日。六日に漸く旅順を辭して大連に入り、七日、大連から鎌倉丸に搭乘した。乗船後の乃木將軍は、幕僚、各部長を犒ひ、且つケビンに絶えず物思ふもの、如くであつた

が、九日の正午に「萬歳」裡の下ノ關海峡を通過し、宇品に著いたのは十日の朝であり、廣島を發したのが十二日で、新橋驛に凱旋したのは、明治三十九年一月十四日の午前十時三十九分であつた。

凱旋した諸勇士を熱烈に迎へる國民の美しい赤誠は、斷乎として甲に偏重し、乙に冷淡なるが如きことはなかつたであらう。併し當日の新橋驛は、空前の夥しい群衆であつた。乃木將軍以下の各部長並に幕僚がブラットホームに降りても、足は地上につかず、群衆の波に力強く押されて出口に進み、迎へられるものも、迎ふるものも、互に眼み眼み語るのみで、近づくを得なかつた。「萬歳!」「萬歳!」の聲を滿身に浴び、乃木將軍は幕僚等も用意の馬車を驅つて宮城に向つたが、沿道には何萬にも知れぬ人々が迎へてゐた。熱烈に迎へる市民。舉手の禮を黙々返す白鬚の老將軍! 實に一幅の繪であり、回想しても涙ぐましくなるのである。

明治三十七年五月 第三軍司令官タノ

大命ヲ拜シ、旅順要塞ノ攻略ニ任ジ、六月、劍山ヲ拔キ、七月、敵ノ逆襲ヲ撃退シ、次テ其前進陣地ヲ攻陷シ、鳳凰山及于大山ノ線ニ進ミ、以テ敵ヲ本防禦線内ニ壓迫シ、我海軍ノ有力ナル協同動作ト相須ナテ旅順要塞ノ攻圍ヲ確實ニセリ。八月、大孤山及高崎山等ヲ陷ル。次テ強襲ヲ行ヒ、東西盤龍山ノ二壘ヲ奪ヒ、爾後正攻ヲ以テ攻撃ヲ續行シ、逐次要塞ニ肉迫シ、十一月下旬ヨリ十二月上旬ニ亘リ三〇三高地ヲ力攻シテ遂ニ之ヲ奪取シ、港内ニ壘伏セル敵艦ヲ撃沈セリ。既ニシテ攻勢作業ノ進捗ニ伴ヒ、其正面ノ三永久堡壘ヲ占領シ、直チニ望臺附近一帶ノ高地ニ進出シ、將ニ要塞内部ニ突入セントスルニ當リ、三十八年一月一日、敵將降ヲ請ヒ、茲ニ攻城作戰ノ終局ヲ告ゲタリ。時ニ北方ニ於ケル彼我兩軍ノ主力ハ、沙河附近ニ相對シ、戰機正ニ熟シ、軍ノ北進ヲ待ツコト急ナリ。因テ一月中旬、遼陽平野ニ集中シ、直チニ運動ヲ開始シテ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、全軍ノ最左翼ニ在リテ繞回運動ヲ行ヒ、逐次敵ノ右翼ヲ撃破シ、奉天西北方ニ進進シテ其退路ニ迫リ連戰十餘日、尙敵ヲ追蹙シテ心裏子、石佛寺ノ線ニ達シ一部ヲ進メテ昌圖及金家屯附近ヲ占領セシメタリ。

五月、各軍ト相連リ金家屯、康平ノ線ヲ占メ、尋テ敵騎大集團、我ガ左側背ニ來襲セシモ、之ヲ驅逐シ、茲ニ軍隊ノ整備ヲ畢リ、戰機ノ熟スルヲ待チシガ、九月中旬、休戦ノ命ヲ拜スルニ至レリ。

之ヲ要スルニ、本軍ノ作戰目的ヲ達スルヲ得タルハ、陛下ノ御稜威ト上級統帥部ノ指導、竝ニ友軍ノ協力トニ賴ル。而シテ作戰十六箇月間、我將卒ノ常ニ勁敵ト健闘シ、忠勇義烈、死ヲ視ルコト歸スルガ如ク、彈ニ斃レ、劍ニ殲ル、モノ皆陛下ノ萬歳ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタルハ、臣之ヲ伏奏セザラント欲スルモ能ハズ。然ルニ斯ノ如キ忠勇ノ將卒ヲ以テシテ、旅順ノ攻城ニハ半歳ノ長月日ヲ要シ、多大ノ犠牲ヲ供シ、奉天附近ノ會戰ニハ、攻撃力ノ缺乏ニ因リ、退路遮斷ノ任務ヲ全クスルニ至ラズ、又敵騎大集團ノ我ガ左側背ニ行動スルニ至リ、此ヲ擊摧スルノ好機ヲ獲ザリシハ、臣ガ終生ノ遺憾ニシテ、恐懼措ク能ハザル所ナリ。

今ヤ

閣下ニ凱旋シ、戰況ヲ伏奏スルノ寵遇ヲ擔ヒ、恭シク部下將卒ト共ニ天恩ノ優渥ナルヲ拜シ、顧ミテ戰死、病歿者ニ此光榮ヲ分ツ能ハザルヲ傷ム。茲ニ作戰經過概要、

死傷一覽表、並ニ給與及衛生一般等ヲ具シ、謹ンテ復命ス。

明治三十九年一月十四日

第三軍司令官 男爵 乃 木 希 典

これぞ乃木將軍が 大元帥陛下に拜謁を賜はり、謹んで伏奏した復命書であるが、何たる力強き大文字であらう。と同時に、何たる率直な復命書であらう。力強く復命書を捧讀しつゝあつた將軍の聲は、何時か涙にくもつてしまつた。そして「……我將卒ノ常ニ勁敵ト健闘シ、忠勇義烈、死ヲ視ルコト歸スルガ如ク、彈ニ斃レ、劍ニ殲ル、モノ皆陛下ノ萬歳ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタルハ、臣之ヲ伏奏セザラント欲スルモ能ハズ」云ふ一節に至つた將軍は、終に歎歎し、御學問所の廊下に起つてゐた幕僚の眼にも熱涙が湧いた。唯だ一人も顔を得上げず、重い沈黙に塞がれてしまつた。……再び將軍の復命書を捧讀する聲が、つき、森嚴の裡に終了し、陛下は御嘉納あらせられたのである。

乃木將軍の復命書！ 秋毫も功を矜持する處なく、過失を自ら牢記して閣下に謝してをる

が、餘りに率直な復命書であつたがために、幕僚の間にも「……露骨に過ぎる」の意見を述べらるものもあつたが、乃木將軍は此の率直な復命書を變更しようとしなかつた。而して軍部に於ても異議（ミ云ふよりも、困惑）があつたのみでなく、これを公表することは面白くないであらうと云ふ反對があつた。併し斷乎として乃木氏は率直な復命書に改訂を加へようとしなかつた。旅順の攻圍に半歳を費し、奉天戰に敵の退路を扼するこゝが出来ず、又更に法庫門に敵騎の大集團を撃擯するを得なかつたこゝの三つの失敗（？）を記さずして完全の復命書を起草し得なかつたからであらう。こゝに於て——參謀本部は〇〇の伏字を多く挿入して之を發表せしめるこゝになつた。乃木將軍の復命書が事務的でなく、如何に眞摯なものであつたかをも想ふべきである。

熱涙裡に復命を了つた乃木將軍は、優渥なる勅語を拜し、御紋章附金時計一個並に御目録一封（この恩賜金で後に將軍は「頒恩賜」を彫刻した金時計を調製し、各部長、幕僚に頒

つたこゝは説明を用ひないであらう）の恩賜を忝ふしたが、各部長、幕僚も別室に於て拜謁を仰付けられ、且つ將軍と共に酒饌を賜はつた。宮城を斯くして退下し、參謀本部に向つた凱旋の老將軍は、自由に顔を寒風に弄らせ、空洞のやうに馬車に揺られて肅々進む。馬車の轆る軋軋の音、群衆の叫ぶ萬歳の聲——はつミ目醒めたやうに舉手の禮を黙々返すのであつた。

軍神餘影

◇ 第一印象は眼に

旅順が落ちて直後のことである。満洲軍の参謀から第三軍の参謀副長に補せられた河合操中佐は、任地——柳樹房——に向つて出發した。その途次の長嶺子であつたか、金州であつたか。汽車が止まるミロ汚く「シヤール・コップ」(羊の頭奴が……)ミ從卒か何かを罵詈雑言をる外國人がるので、不圖其の方向を見た。處が嗚鳴つてをるのは、豫て見知り越しの獨逸皇族附武官の陸軍少佐であつた。

この人が此處にゐるからには、必ず我軍にあつて觀戰中のカール・アントン・フォン・ホーヘンツォルレルン殿下も此の汽車に乗つてをられるに相違ないミ考へたので、河合中佐は殿

下の御機嫌を奉伺するために、その列車を訪ふた。聞けば殿下は、乃木軍が旅順を落したので、特に敬意を表するために、旅順を訪ふ途中であるこのことであつたので、中佐は「乃木將軍に御謁見をたまはつたことが御坐いまするか」ミ質した。然るに微笑を帯びた殿下は「否！」ミ御答へになつたにか、はらず、愉快さうな聲で、

「併し烙印でもされたやうに、私の記憶には乃木將軍がある。——ミ申すのは、將軍が曾て獨逸に留學してゐた時代に私は、將軍を見た。そして私は如何にも優しく、又懐かしい將軍の眼を今日も忘れることが出来ぬからである」

ミ語つたこのことであるが、如何にも好く乃木將軍の特長を具象化し、形容し得て餘蘊のない言葉であるやうに考へられる。

晩年に於て將軍が電車に乗る場合には、嚴めしい軍服で車掌臺にたつてをつた。さう云ふ場合に同行者が副官か、若し車内に入るやうにすゝめても「儂は車掌に斷つて此處にたつて

をるが、君は車内に入りたまへ。それに儂が車内に入るに迷惑を他にかけることも亦少くないちやうから……」と決して車内に入らなかつた。風雨の時でも左様であつたが、車掌臺にゐる將軍に向つて、降車するものが敬禮すれば、それが未知の人であつても、將軍は必ず答禮し、相手方に名狀し難い敬愛の念を刹那に與へた。これは將軍の眼、處女の様な眼から自然に溢れる温情あつたが爲であらう。少し前屈みになつて、羞かむ様に相手に注ぐ將軍の眼は、何人にも忘れる事の出来ぬ深い印象を與へたのである。

軍隊に於て檢閲ミ云ふことは、非常に嚴しいものであるが、陸軍始まつて以來、檢閲使として乃木將軍のやうに恐れられたものはないであらう。如何なる時でも、唯だ形式的に檢閲を了はるやうなことはなく、隅から隅まで、他の氣付かない點まで注意し、少しでも面白くない處があれば、容赦なくやり直させるのみでなく、刀の中身までも猶ほ檢閲して「錆あるものは精神が腐つてをる」に酷評を加へたミ云ふ風評さへある。陸軍に於て特命檢閲使の制

が創設せられたのは、明治四十一年のこゝであるが、その際最初に重任を拜したのが乃木將軍であつた。「乃木が檢閲使になつた」ミ云ふので、檢閲を受けるこゝになつた方面の各部隊では、今更のやうに驚き、緊張し、俄かに正装の縫直しで、土地の洋服店は多忙を極め、轉手古舞ひをやつたものである。

ミ云ふのは——士氣が別に弛緩した、めでもないが、將校の正装の帶下の寸法は、確かに何寸ミ云ふ規定が存してをるにか、はらず、規定通りでは體裁が好くないので、何時かはなしに各人の身長に應じて規定に反した寸法で縫はせる傾向になり、襟飾りの金モールでも、正式にしては餘り單純であるので、美しくべた〜につけたものが出来、帽子の型も何時か紊れてしまつた、めに、偕行社に正装で集まつた將校の服装には、夥しく異色が認められるやうになつてゐた。そこに「規定通りの軍服を着けてをる乃木將軍」が第一次の特命檢閲使に任ぜられたので、所謂ハイカラの將校連は狼狽せざるを得なかつた。各自が檢閲使に正装で伺候する時には、將軍から必ず「規定に反した服装を咎められるであらう」ミの杞憂が

あつたからである。

こゝに於て左様な將校達は、大慌てにべた／＼の金モールを剝取り、部下の長さを規定のやうに斷たせることにした。然るに「嚴格である」云ふ評判の高かつた將軍は、その檢閲に際してハイカラの將校が窃かに心配してゐたやうな末節に囚はれることなく、大局の上から無言の裡に軍規を正し、軍律を振はしむる意味の檢閲振りであつた。仄聞してをる。兎に角、將軍は檢閲使にしても、師團長にしても、又更に旅團長にしても、嚴格であり、嚴格である。云ふ定評があつた。而して將軍の嚴格なる檢閲のために、毫も假借せざる講評のために、少からず閉口したものもあつたであらう。併し將軍の猶ほ敬愛せられたのは、その優しい慈眼が相手方を魅了するものあつた、めでなければならぬ。

乃木將軍云へば、猛將の好き典型に稽へられてをる。蓋し日清の役にも、日露の大戦役にも、旅順でふ東洋一の堅壘を俱に攻略した武將であるがゆゑに、斯く將軍を見るのも無理

からぬことであるが、眞に將軍を知るもの、又は部下にあつて好く正視し得た人々は、將軍を以て軍服を著た氣持のいゝ仁であり、非常にくだけた人である。告白してをる。禮節に嫻はぬミカ、順序を紊るものこそ一歩も借さなかつたが、さう云ふ場合に於ても諄々して説き、説いて釋然すれば、眼尻に必ず何本かの筋を小刻みに快く微笑し、何とも形容し難い温情に懐かしさを對者に感ぜしむるのであつた。これも畢竟するに眼のためであつた。考へられる。

昔から「眼は心の窓である」云ふ。確かに左様であり、動すべからざる眞理であるが、これを吾々は乃木將軍に於て見出した。將軍は此の眞理を極めて妥當に裏書する一人であつた。――ミ申しても、決して誣妄でないやうに思はれる。瞑目して靜かに將軍に及べば、その眼が生々々浮ぶのである。

◇ 好々爺のタイプ

明治三十九年八月二十五日、乃木將軍は宮内省御用掛を仰付けられ、學習院に出仕することになった。武勳に輝く將軍が「教育家」にして華族の子弟を薰陶することにしたので、世間は文字通り耳目を聳てたが、更に翌年の一月末には、軍事參議官を以て學習院長に兼任した。仄聞する處では、陸軍の首脳部から將軍を「參謀總長に……」と内奏した時、陛下——明治天皇——から「乃木には朕の所存もある、參謀總長には誰か乃木より外のものを補任することにせよ」この長い御説があつたさか。そして將軍は學習院の院長を拜し、

いさがある人を教への親として

おほしたてなん大和なでしこ

「云ふ御製を賜はつた。陛下の大御心に感激した將軍は、その總てを傾盡して職責を全ふる決心をしたのであるが、窃かに將軍を白眼視するものは、所謂新しい思想にかぶれた子弟よりも、父兄の中に尠少でなかつた傳へられる。勿論、公然語るものもなかつたであらうが、「吾々の子を兵隊と同じやうに取扱はれては困る」さか、或は「華族には華族流の教育

がなければならぬ」さか、不満の聲は隨所に聞かれた。併し將軍は其の信念を動かさず、就任して間もなく、四谷の初等科を巡視した時にも、受持ちの教授に向つて「×年生の教室には頭髪を伸ばした生徒がある。直ちに散髪させるように……」と命じた。華族の坊ッちゃんも頭髪を伸ばし、外國人の子供のやうに奇麗に分けてをる。その頭髪を些の惜氣なく「刈らせるように！」と命令した云ふことからも、新院長の武斷主義(?)が父兄間に問題となつたであらうと考へられる。

初等科の生徒に對する頭髪のみでなく、中等科以上のものは一律に寄宿舎に入舎せしむる云ふ制度を取り、起居、動作を最も規律あり、節制あるものたらしむることになつたので、如何にも軍隊式に反映したであらう。随つて不満を訴へ、面白くないやうに感じたものも簇出したに違ひない。學習院としては傳統を破つた變革であつたから……。

乃木將軍の近親者である野瀬(秀彦)工兵大佐は、當時未だ大尉で、陸軍士官學校の教官であつたが、代々木から四谷に至る省線の電車内で、毎朝同車する學習院の生徒——初等科——

に「さうだ、今度の院長は……？」と問ふたところがある。處が率直に幼い彼等は「半分は恐くて半分はい、や」に答へた。半分は恐く、半分はい、院長は、乃木將軍の眞面目を唱破し得て餘蘊なきものであらう。「乃木大將の面影」(四二―三頁)に、

又或時幼年部の一人の生徒が院長の留守に紙薦をあげた。其紙薦が丁度將軍の居られます總寮部の前の電線に引掛つて取れなかつた。それを一生懸命になつて取らうとして居るところへ將軍が、軍事參議官の會議が何かに出られて歸つて來られた。すると、頻に一人の少年が紙薦を取らうとして居る。少年は將軍が來られたから、定めし叱られると思つて居ると、將軍は莞爾とせられて、吃驚するには及ばぬ。私が取つてやらうと云ふて、餘所から棹を持つて來て一生懸命に取つて居る。さうしても取れない、其内に高等科の學生が一人通り掛つた。それを呼止めてお前も手傳つて紙薦を取つてやれと、今度は二人でそれを取らうとしたが、さうしても取れない。それから又長い棹を持つて來て、三十分も掛つてやう／＼取つてやり、其生徒が紙薦を持つてニコ／＼して行くのを見て、さも嬉しげに見送られたと云ふ話があります。

ミ子爵小笠原長生氏は語つてをるが、將軍は子供好きであつた。子供に對して理解があつた。それだけに將軍を院長として迎へた生徒は、必ず半分は恐かつたであらうが、半分は好爺に反映したものと思はれる。

曩に記述した野瀨氏の夫人フミ子は、乃木將軍の令妹小笠原キネ子刀自の三女であるが、野瀨氏の長女フヂ子嬢が四歳になつた頃——明治四十五年五月、靜子夫人が姪の晃子(柴貞子の二女)の結婚のこゝで北海道に旅行した。そこで野瀨夫人は留守中の世話を頼まれ、乃木家に起臥することになつたが、フヂ子嬢は夕方から母の膝下を辭して自宅に歸り、翌朝になるに嬉しさに下婢に伴はれて亦母のゐる乃木邸を訪問し、一日を嬉戲するのであつた。外から歸邸した將軍は、フヂ子嬢と食卓を共にするのを愉快なるこゝの一にしてをた。或日「フヂ子、今日は御馳走してあげよう」ミニコ／＼しながら將軍は、フヂ子嬢の希望を問ふた。處が恬淡に「鹽煎餅を頂戴！」と望んだので、將軍は笑ひながら「西洋料理に

しよう」云ふことになつた。

聽て注文したものは來た。將軍は幼いフヂ子嬢は食卓に就き、フオークを動かしてゐたが、俄かに思出したやうにフヂ子は、將軍に向つて「おちいさま！ おちいさまは齒が御惡いから私のポテトあげませう」自分の馬鈴薯を將軍に勧め、又更に「おちいさまは齒が御惡いから肉は駄目でせう」將軍の皿からビーフを頂戴し、それを切つて貰つて噛み、噛んだものを將軍の皿に巧妙に移して「おちいさま、これ召上かれ」親切に云ふのであつた。傍から母親のフミ子夫人が將軍に「汚ふ御坐いますから……」氣の毒相に云へば、將軍はニコ／＼して「フヂ子の心盡しちやから頂かなければならぬ」頬張るのであつた。蓋しフヂ子嬢は、他から嘯してもらつてゐるので、齒の丈夫でないものには、斯くするものも端的に考へ、將軍に之を應用したものと考へられるが、將軍はフヂ子の親切を受けることが無上に嬉しかつたのであらう。

その前年即ち明治四十四年八月の或日、將軍が歸つて客間——最後の日に夫人と共に撮影

した室——に通つた。然るに卓上に箱が大事さうに置いてある。不審さうに之を將軍が開く。蝸牛が何十匹かゝる。書生を呼んで「さうしたのちや？」と問へば、「それはフヂ子さんの玩具で御坐います」云ふ。「フヂ子さんの玩具」聞いて將軍は、その蝸牛の入つた小箱を大事相に片方に寄せ、讀書に耽るのであつた。處が窓下の柘榴の中から無數の蟬が一齊に啼く。見れば紙袋が吊してあり、その中に無數の蟬が入れてある。その騒音に惱まされたらしいが、これもフヂ子の玩具に違ひない鑑定したので、困つたに相違ないにもか、はらず、決して「取除けよ」命じなかつた。併しそれ氣付いたフミ子夫人が「取除けませう」云へば、將軍は「フヂ子には大切なものぢやから取除けなくても宜しい」半日を蟬時雨に迷惑しながら讀書してをつた。

◇ ユモラスの一面

乃木將軍は音樂嫌ひであつたが、靜子夫人は音樂好きであり、勝典も亦左様であつた。併し

し主人の好まぬ樂器を強ひて家庭に入れるこゝは差控へねばならぬ云ふのであらう。目立つものは置いてなかつたが、勝典は中學生であつた時代にハンド・オルガンを内密で買ひ、將軍の留守中には取出して弄つてゐた。處が勝典に取つての問題は、それを將軍に見つからぬやうに仕舞つて置くこゝであり、この爲に苦勞してをつたらしい。絶えず注意してをつたにか、はらず、屢々發見せられて大目玉を頂戴したものである。

矢張り明治四十四年の何月頃かのこゝであつたと思ふが、靜子夫人が小型の三味線を鍾愛するフデ子のために買入れた。そして間もなく傭入れた下婢が之をよくするので屢々かなでしめ、將軍の留守には耳の保養をもしてをつた。併し將軍の好まぬ樂器であるがために、これを秘藏するこゝは並大抵の苦心でなかつた。そして將軍から幸に見付けられるこゝもなかつたが、偶然のこゝから終に發見せられてしまつた。云ふのは——將軍は電話室に滅多に入ることがないので、小型の三味線は此處に置くこゝにしてあつた。然るに或日、俄かに歸邸し、電話室に匆惶に入つたが、通話を終つた將軍は、不機嫌さうに小型の三味線を片手

にして出で、夫人に向つて、

「これは何か」

こ詰問するやうに質すのであつた。その時、夫人の部屋には無邪氣な野瀬フデ子を中心に柴夫人もれば、野瀬フデ子夫人もゐた。「見つかつた」こ窃かに苦笑してゐた人々は、夫人が何ぞ返事するかこ注意してゐた。然るに夫人は事も無氣に、

「フデ子の玩具でムいますヨ」

こ微笑さへ浮べて應答するのであつた。些の凝滞だにない此の夫人の返事に接した將軍は、その表情を柔らげて、小型の三味線を今更のやうに眺めてゐたが、ニコ／＼しながらそれをフデ子嬢の身近く置き、

「フム、左様か、フデ子の玩具ちやつたのか」

こ少しも疑念を挿まなぬもの、やうであつた。そして珍らしくも人々こ語り、無邪氣な態度で、誰からも鍾愛せられるフデ子こ談笑した。かう云ふ追憶も、既に成人したフデ子嬢

には殆んど回想し得られぬこのことであるが、唯一つ鮮かに記憶してをるのは、五歳の頃に將軍二人居て將軍が與へようとする菓子を拒んだことである云ふ。明治四十五年六月、侯爵佐々木高行氏の未亡人が逝去したので、乃木將軍は其の通夜の茶菓を野瀬フミ子夫人をして求めしめたが、「軽いもの」をこの注文であつたので、恰好のものを購ひ、更に將軍のために鹽煎餅をも亦買つて來た。フミ子が一袋の鹽煎餅を將軍に、

「これは伯父さまへ……」

と捧げれば、子供のやうに無邪氣に「ウム、ありがこう」を受取り、微笑しながら窃かに袋をひらいた將軍は、思はず大聲を出して、

「ホホオ、これは鹽煎餅ぢやないか。僕の好物ぢやが、伯母さんは自分が嫌ひなものぢやから僕に喰してくれぬ……」

と最初はフミ子夫人を相手に語るやうに、次には獨語するやうに語り、且つばくつくのであつた。改めて説明する迄もなく將軍の語つた「伯母さん……」は靜子夫人のことで、フ

ミ子夫人との對話なるがゆゑに、かく呼んだのである。陸軍大將の制服で、ストーブの前に突立ち、鹽煎餅を紙袋から無造作に取出して頬張つてをる乃木氏を想像せよ。實に立派な繪ではないか。乃木將軍には、かう云ふ半面があつたのである。

……何時か話が横道に外れてしまつたが、フヂ子嬢が母のフミ子夫人に佐々木家に持參する菓子を買ふために出掛けた勞を慰藉すべく、將軍が、

「フヂ子、これあげよう」

ミテールに置かれてあつた菓子を與へようとしたので、それをフヂ子が頂戴しようとする頃、將軍が高くなる。延び／＼して取らうとするも亦高くなる。三度目には流石にフヂ子も憤慨したのであらう。勃として「それなら頂戴いたしませぬ！」と可愛らしい手をひつこめてしまつた。と知つた將軍は、俄かに態度を改めてフヂ子を慰撫しながら「これは僕が悪かつた、さア皆なあげるから機嫌をなほしてくれ」菓子器のま、提供し、優しく陳謝するのであつたが、フヂ子は何事も答へず、將軍を凝み見詰めてゐるのみである。然るに將軍

はフヂ子を今度は試しでもするやうに「これを遣る、これを皆遣る！」ミ菓子器のま、無理にフヂ子の胸部に押しつけたが、依然としてフヂ子は受取らうとせず、静かに立盡してゐるので、將軍は全く閉口したらしい。實は最初にはフヂ子嬢を試みる心算であつたのに、少しもフヂ子が閉口せぬので、却つて將軍が凹み、

「これは困つた。卿から遣つてくれ」

こ起つてゐる母親のフミ子夫人に依頼し、笑まし氣に次の間に去つてしまつた。その日の將軍の姿がまさしくフヂ子嬢にも考へられるといふ。……この話から聯想せられるエピソードがある。フヂ子嬢に將軍が凹んだ時から何年か前のことであつたが、乃木家の近親の少年が來訪し、書生達を相手に極めて快活に遊んでゐた。勿論、この少年をも將軍は愛してゐたので、子供らしく遊ぶ彼等を笑ひながら見成つてゐたが、俄かに思出したものらしく、少年を玄關側の書生部屋に入れるやうに書生に命じた。命ぜられた書生が少年を部屋に入れようとするれば、少年は火のつくやうに號泣し、書生にしがみついて離れぬので、書生も頗る

閉口してゐた。その様子を見てゐた將軍は、

「よし！ 離してやれ」

こ呟付けて不機嫌さうに二階にあがつてしまつたが、それから其の少年が乃木家を訪問しても、將軍は今までのやうに寵遇しなかつたといふ。蓋し將軍は少年を試みる心算であつたらしく、そして乃木式の試練に此の少年は不合格であつたのであらう。それだけにフヂ子嬢の時のこゝが興味を唆るのである。

更に將軍の子供に關するユーモラスの挿話がある。勝典が未だ十四、五の頃のこゝであつたが、自轉車——當時は二輪車と名付けられてゐた——が舶來し、ボツ／＼乗るものもあつて流行するやうになつた。夙に將軍は二輪車のこゝを兩典に語り、その効果を説き「將來は必ず發達し、廣く使用せられるやうになるのみでなく、軍事上にも必要なものぢやから練習して置くこゝにするがよい。」このこゝであつた。兩典は二輪車の練習にも好奇心を感じたら

しいが、この機会を逸せず、その頃の流行ものであつた紙風琴がほしいと希望した。率直に云へば、舶來の二輪車よりも、興味は紙風琴にあつたのである。

然るに將軍は無邪氣な兩典の望みを打消すやうに、笑ひながら「紙風琴なんかは西洋の乞食共の使用するものぢやから買はぬがい、ぢやらう。さう云ふもの、稽古は不必要ぢや」一蹴してしまつた。併し兩典は何しても斷念し得なかつた。そして兩典は窃かに談合し、如何にしても將軍が拒むここの出來ぬ最もい、方法に訴へることにした。將軍が拒むここの出來ぬ、最もい、方法とは何であらう？ 曰く「祖母から父に強要して貰ふことであつた。即ち壽子が望むものであれば、十中の十將軍は聽從したからである。こゝに於て兩典は紙風琴を將軍に買つてもらひたいと壽子に願つた。壽子は笑ひながら兩典の切なる要求を容れ、その日の晚餐の席で、

「希典！」

と早速きり出した。それと兩典は察し、沈黙の裡にも微笑しながら箸をうごかしてをる。

例のやうに將軍は「ハイ、ハイ」を謹嚴に答へる。壽子は續いて、何喰はぬ顔で、愈々其の本題に入つても、

「近頃は紙風琴さかいふものが流行してをるさうぢやねエ？」

と世間話しのやうにする。勿論、それが兩典の切なる依頼に出づるものとは、將軍に知れよう道理もないので、耳を將軍は傾けてをる。眞顔に語る壽子は、如何にも老いたるものが希望するやうに、

「私も老先きの短いこちやから、流行の紙風琴を是非き、たいと思ひます。差支なかつたら買つてもらひたいものですヨ」

と訴へるのであつた。紙風琴を兩典が望んだ場合には、軽く一蹴してしまつた將軍も、この母なる壽子の切なる要求を拒むことは容易でなかつたらしい。そして如何にも困つたやうに見受けられたが、聽て活路を辛じて見出したのであらう。

「紙風琴は如何なるものでいますか、未だ承知いたしてをりませぬので、早速私

が取調べることに致しませう」

こ云ふので、その夜は無異に過ぎた。如何にも眞面目に問答する將軍を老いたる壽子この對照には、心から兩典も興味を感じずにはゐられなかつたであらう。屢々此のこゝを兩典は語つて哄笑してゐたものである。

◇「半神半鬼」の道中

かう云ふやうなユーモラスの一面もあつたが、更に將軍には茶目氣が多分にあつた。姪の白須夫人マス子——小笠原キネ刀自の二女——が乃木邸に何日か泊つてゐた或日、毎朝用ひる牛乳を冷ましたまゝで用事に立つた。そこに入つた將軍は、茶目振りを發揮して無斷でマス子の牛乳を飲み、且つ吾關せず焉こすましてをる。用事を終つて引返したマス子が「あらッ！ 牛乳がなくなつちやつた」ミ四圍を見、胡散らしく將軍に眼をやれば、
「フム、卿の牛乳ちやつたのか。儂は不用のものが放つたらかしてあるので、勿體ないこ

思つたから頂戴してしまつたのぢや。卿のものには秋毫も知らなかつたヨ」

ミ眞面目らしく辯解し、白を巧妙に切るのであつた。乃木將軍の人間味を無視（ミ云ふのは穩當でないならば、閑却）するものには、以上に述べたやうな挿話が不思議に受取られるかも知れぬ。併し將軍には茶目氣が多分にあつた、ユーモラスの一面がゆたかにあつた。次の手束は誰にも微笑を禁ずるこゝが出来ぬであらう。

拜啓 先般參府ノ節ハ、諸事御懇情多謝々々、爾後白根少佐ノ介抱相受ケ、三田尻著ノ處、巡查來リ
曰ク署長不在云々ト、答フ署長サンヨリハ赤帽入用故へ呼ビ吳レヨト申 候 處、彼レ頗ル慚然タリ。
又曰ク上等旅館申付置キタリト。答フ夫レハ甚迷惑ニ存ズ、ト。直ニ停車場直前ノ小店ニ入り、障子ノ破レニハハンケチヲ押込ミ、湯豆腐トドプロクヲ命ズ、ドブ無シ。飲食シ了テ兩人共軍服ノ儘蒲團ヲ被リ、二時間計リ眠リ、又々廣島驛ニテ最近ノ一小店ニ飛込ミ、飲食シ、呉ニ至ルヤ、朝早キ故鎮守府ヨリ中佐副官ノミ出迎へ、直ニ江田島ニ渡ル。兵學校ニ而ハ、始業式ニ小生ヲ迎ヘラレ、飛雪粉々中學生隊ノ出迎、其後諸式ニ參列、午後三時各授業ヲ見ル。立テ詰メニテ四時ニ至リ、吹煙一

ブク。夫ヨリ書類ノ點檢、校内ニ泊、校長ト談シ、十一時ニ至ル。明朝ハ早ク脱出シテ、生徒ノ未ダ起キザル前ヨリ大小便ノヤリ方より視察シ、朝、食堂ノ模様ヲ見、其後自分朝食ヲ終へ、八時よりノ授業巡視、昨日午後ノ如シ。午食後告別シテ吳ニ渡リ、各工場巡覽、司令官ノ案内ニテ五時半ニ至リ、直ニ停車場ニ參リ、海田驛ニテ、又湯豆腐ヲ命ズ。白根少佐、御堀少尉此迄來ル。且蠶飯ヲ命ジテ大ニ食セントス。壯士等我ニ及バズ。十一時ノ汽車ニテ出發セリ。是より先キ田中大臣ノ事ヲ新聞ニテ知リ、是非京都ニ而面會ノ要アリ、大阪ニテ電話ヲ利用シ、京都驛ニテ目的ヲ達ス。故ニ大阪ニテノ所望達セズ。名古屋ニ至リ、土曜日ナレ共、午後一時、直ニ幼年校ニ飛入り、四時半迄視察ヲ遂ゲ、又停車場前ノ小店ニ湯豆腐最中、中將少將其他來ル。唯湯豆腐ノミニテ十一時過ル迄飲ミ、且談シ、昨夕旅費盡キタル故、修善寺迄送ルベキヲ命ズ。十三日夕修善寺ニ至レバ、愚妻之ヲ持チ來リ居ル。此ニ而も又俗了極リ、清閑ノ望ミヲ達スル能ハズ、之ヨリ以後ハ如何ナル明案ヲ得ベキヤ。先ツ當惑ト申迄ニ御座候。右ハ毛利公竝ニ梶山兄ニモ御序ノ節御禮旁々御傳聲被レ下度、如レ候。頓首

この手束は、明治四十一年一月十五日、山口縣の長府に住む將軍の親友桂彌一氏に修善寺

の客舎から寄せたものであるが、乃木式の生活も知るこゝが出来れば、その茶目振りも躍如にしてをる。殊に「……旅費盡キタル故、修善寺迄送ルベキヲ命ズ。十三日夕修善寺ニ至レバ、愚妻之ヲ持チ來リ居ル」云々の一節に至れば、盡きぬ興味がある。所謂乃木式に云へば「……愚妻持チ來リ居ル、依テ一喝シテ歸京ヲ命ズ」ミあるべきであらうが、將軍は「……此ニ而も又俗了極リ、清閑ノ望ミヲ達スル能ハズ」ミ歎息してをるにも拘はらず、こゝで老いたる夫妻は靜かに數日を過し、相携へて睦じく歸京したのである。

乃木將軍夫妻が修善寺に相携へて睦じく入湯したのは、この時のみでなく、第十一師團長の頃にも、痼疾の時に苦惱して此處に入浴し、夫妻は俱にゐるが、更に將軍が俱に夫人と旅行した時の消息を傳へた興味の多い手束がある。次に記述する。

休暇ヲ賜リ、老妻召連レ而出雲國迄墓參 仕候。途中ハ如レ例神出鬼没法ヲ執リ候得共、何分ニモ

老婆ト雖モ、女子引率 仕 候 而ハ、半神半鬼位ニテ、殆ンド落第格ニ御座候。曾而御覺有レ之候
半カ。石林ノ城代家老ニテ、内垣信濃ノ權ノ介ノ政吉、羽織袴ニテ召連レ、數十年ノ賞典ニ、大社參
詣ノ望ヲ遂ゲサセ 候。此老僕、眞面目ニテ、新聞屋應接、來客接待等 頗ル旅中ノ興味ヲ添ヘ申候。
右ハ御報告トシテ、不在中ニ例ノ萃瓜口羽ヨリ御届、昨日井戸ニ沈メ置キ、今朝鎌倉ヘ幼年生徒ノ遠
泳一見、三時半歸家、直ニ兩斷、其一片ヲヒニテ平ゲ申 候。外面ノ彫刻ヲ讀ミ、考フレバ、或ハ目
下御上京中カトモ疑 申 候 得 共、口羽氏宅番地スラ不二相分一當 惑 罷 在 候。好味滿腹(夜食ヲ廢
止 仕 候)ノ御禮迄ニ御報旁々如レ 此 候。勿々頓首

これも、明治四十二年八月二十七日、桂彌一氏に將軍から寄せたものであるが、老夫妻が
相携へて出雲國に旅行した時の氣持ちが見えるやうに感受せられる。一人旅であれば神出鬼
没の方法に依ることも出来るが、老妻と共にする道中であるがゆゑに、それも不可能であつ
て「半神半鬼位ニテ……」と歎息してをるが、殊に那須に於ける別邸を買つた當時から乃木
家に引續いて仕へてをる老僕の内垣政吉が信濃の生れであるがために「石林ノ城代家老ニテ

内垣信濃ノ權ノ介ノ政吉」ミ呼び、この田臭濃かな老僕に羽織袴を著用せしめ、旅中の應
接係ミなし、滑稽百出する珍光景を傍觀してをる處は、如何にも茶目振りの上乘なるも
のであり、これが内垣老人の數十年の忠勤を犒ふ意味の大社詣であるので、更に微笑まれ
もするのである。

◇ 盛宴のレコード

乃木將軍から第三軍の幕僚に對し、明治三十九年三月十二日、兩典のため紅葉館で祭典を
營み、終了後に粗餐を呈したいから枉駕を乞ふ——この鄭重な案内があつたが、この招待は
少からず問題ミなつた。殊に兩典の骨が埋葬してないことを知つてをる人々は、

「何だか可怪しいぞ、又例の法庫門で將軍の誕生日に招待されて知らなかつたやうなこ
ご警戒せざるを得なかつた。そこで窃かに副官に就て内偵すれば、前日を以て兩典の遺骨

を埋葬し、翌日即ち三月十二日、紅葉館に祭典を行ふ豫定である云ふことが明了したので、「フム、そんな事だらうと思つてゐた」案内を受けた幕僚は、

「十一日午前中、將軍が埋骨される頃を見計らひ、青山の乃木家の墓地の前に集合して將軍を御迎へし、兩典の埋骨式に参列することにしよう」

云ふことに相談が決した。勿論、この事は將軍には誓つて内密にし、その日を只管に待たつた。總て當日になつたので、約のやうに一同は定刻前から墓前に集まり、將軍を待つてゐた。知らぬ將軍は正装し、兩典の戦死する日まで従卒であり、生還して歸郷中の兵卒二人を呼び、これに遺骨を携へしめ、少數の親戚と共に静々に見えた。處が意外にも、そこに第三軍の幕僚がゐるので、將軍も一寸驚いたらしかつたが、又其の好意を謝するもの、やうでもあつた。

兩典の埋骨式は意外にも晴やかに舉行せられ、意味深いものになつたが、翌日の紅葉館の招宴には、乃木家の親戚、兩典の知友並に第三軍の幕僚……云ふやうな人々を主賓とし、

先づ二階に於て——兩典の寫眞を掲げ、嚴かに神式に依つて祭典を行ひ、終つてから階下に於て酒宴になつたが、この日は將軍が唯だ一人で紅葉館を借切つてしまつたのである。

紅葉館の借切り！乃木將軍が東京に於ける一流の料理屋を借切つた云ふことは、何にしても似合はしからぬこと、考へられるであらう。否な、「左様なことがあるものか」冷かに笑殺されるに違ひない。乃木將軍が紅葉館のやうな一流の料理屋を借切る云ふ事實は考へられぬであらうから……。

拜啓 愈々御勇武大賀々々。然バ貴兄其他三四君之御發意、陸海軍上長官懇親會御催之由、欣抃此事ニ存候。老生輩も押テ陪席願度迄ニ存候得共、紅葉館ト承り候而は、歎息之外無レ之候。素々老生輩御邪魔可レ仕ニハ無レ之候得共、水交社、偕行社之有レ之候得ば、兩所ノ内ニ於テ御催相成候得バ、愚老等之欣喜無二此上一候。右ハ平素之御交情より氣付候儘申述候。可レ然取捨可レ被レ下候。匆々多罪

十二月十六日夜

希典

義一兄尊下

この手紙は、明治四十年十二月十六日、田中歩兵大佐（義一、後の大將）に寄せたものであるが、目立つのは「……紅葉館ト承り候而は、歎息之外無レ之候」云ふ文字で、水交社か、借行社ならば出席しよう云ふ乃木將軍が紅葉館を借切つた云ふことは、到底誰にも首肯し得られぬであらう。併し將軍は紅葉館を借切つて文字通り盛宴を張つた。そこに悲しい思出であり、涙の物語がある。

勝典先づ南山に於て戦死し、保典續いて二〇三高地に陣歿した。俱に君國のために其の一身をさげたものであるがゆゑに、國家は此の名譽ある戦死者を弔慰すべく、規定に依つて勳章、年金、一時金をたまふことになつた。併し將軍は給與金の受領を拒み、

「儂は二人のための給與金は頂戴せぬ。その必要がないから……」

ご語り、如何にしても之を受領しようませぬ。これには當局も少からず閉口したが、主張者が乃木將軍であるので、何事も致方がない。ミ耳にしたのが第三軍の幕僚の中の一人である。或日、この事で將軍を訪ひ、

「……承れば、閣下には御令息へ御下げになる給與金を御受けにならぬのださうでありますが、これは規定でありますので、必要ミか、不必要ミかでなく、規定に従つて御受けになるのが順序であります」

ご極めて率直に意見を述べた。病氣の時でも、將軍は頑として服薬せぬ。それを軍醫部長が職責を以て勧告すれば用ひ、又更に稍や華美なものが公室にあつて除けようとしても、それが規定に依るものであるご説明されるれば、その儘に黙止する云ふ將軍であるので、かご云ふやうに理解され、ば、

「左様ちやつたのか。フム、規定に依るものであれば、頂戴することにしよう」

ご快く兩典に賜はつた一千何百圓がづ、の賜金を受けた。受けるには立派に受けたので

あるが、この兩典の遺族に受けた賜金を私するこゝは、斷じて將軍の心でなかつた。こゝに於て如何に此の賜金を有効、有意義に使用すべきかは、次いで將軍の窃かに配慮する處であつた。而して熟考した末、その一部を特に兩典の學んだ麻布小學校に成城中學校に静子夫人が「二人が國の御爲に盡すこゝの出來たのも、學校で善く教育して下さつたのだから……」と自ら出頭して寄附し、他の一部を以て將軍は紅葉館を借切り、親戚、知己、友人、幕僚を招き、兩典の爲に祭典を営み、快く盛宴を張り、先づ兩典の靈を慰藉し、次いで生死を共にした人々を犒ふこゝになつたのである。

かう云ふ趣旨の下に、將軍は紅葉館を借切つて、盛宴を張るこゝになつたので、愈々兩典の祭典が終り、酒宴になつてから云ふものは、極めて打寛ぎ、將軍自ら酒盃を持つて、殆んど一人づゝ、獻酬し、快談し、痛飲し、心地よさうに見えた。殊に將軍の若かつた時代に於ける「豪遊」を知つてをる老妓が「その頃の乃木さんは……」と素ッ破抜くので、少からず將軍も閉口したらしいが、同時に酔ふて陶然になつた將軍は、

「莫迦！ 何を……。まア飲め！」

こゝはてれ隠しに、又一つは興あるもの、やうに、周圍のものに盃を頻々こ興へ、又受けるのであつた。窃かに將軍の心を忖度し、涙ある盛宴であるこゝを考へ、無量の感慨に耽り、酒盃を嘗めるやうにしてゐた人々も、晴やかに將軍も、夫人も、客を歡待する其の奥床しさに感激したと云ふが、元氣のいゝ白井中佐(二郎)、後の中將(なご)は、

「何ッ、この庭に馬を乗り入れる位は、何でもないのぢやヨ。ウム、俺が乗り入れて見せる」

こゝ大醉してをるにも拘はらず、無理に馬を乗入れて大に得意になつたのは、が、立派な庭の庭木を馬が無心に喰つて、館主から痛い抗議が出たりした。この夜のやうに招待せられた人々も、快く酒盃を傾け、隔意なく語つた記憶も少ないと回想してをるが、又此の夜のやうに乃木將軍が大醉したこゝも、獨逸から歸つて以來、その近親者も、知人も見たこゝがな

いミ語つてをる。

晝の招宴であつたにか、はらず、夜迄も此の盛宴は續けられ、興は何時まで盡きぬ、若い、元氣のい、人々は盛んにメートルをあげ、將軍は其の相手になつて劣らじみ大盃を傾ける。親戚の、殊に婦人は先づ辭去し、老人連も引取つたので、少數のものは益々飲み、且つ快談し、興は徹宵しても盡きさうになかつた。……文字通り泥酔した將軍は、漸く腕車に乗せられて歸邸したが、殆んど前後も忘れられしく、家の人々に助けられて自分の室に死人のやうに眠つてしまつたのである。

◇「丁字鋏頭」に題す

明治四十四年六月二十二日、英國皇帝——デヨーヂ五世陛下——の戴冠式は舉行せられ、我が皇室から東伏見宮依仁親王殿下が參列遊ばさる、ここになり、東郷大將乃木將軍も隨員の列にあつた。式も無異に終つたので、乃木將軍は其の大任を果し、素願のやうに歐羅巴の各地を巡視するこゝになつたが、七月一日には、英吉利の少年斥候隊を檢閲するこゝにな

つてゐた。

午前八時少し前に、旅館「クラリツヂ・ホテル」に於て、將軍はキツチナー元帥の訪問を受けた。そして東郷大將と共に導かれてハイド公園に到り、キツチナー元帥の監督下にある北倫敦少年斥候隊を檢閲するこゝになつた。そこには少年斥候隊の創立者パウデン・パウエル中將や可憐な百五十の英國少年がゐた。キツチナー元帥に導かれて東郷、乃木の二將軍が到着するに共に、敬禮のラツバは奏せられた。敬禮のラツバが終るに同時に、キツチナー元帥は、一步を進め、日露戦争に於て偉勳を建て、世界に聞えた兩雄の檢閲を受けるこゝは、實に無上の名譽であるこゝを述べ、且つ閱兵があつた。

閱兵の後には、如何にも勇ましい四列側面縱隊の分列があり、次いで彼等は半圓陣を形成したが、その中心をなすものは乃木將軍であつた。將軍を其の中心として半圓形をなした百五十餘の少年から成る少年斥候隊は、極めて緊張した態度で、靜かに何物をか待つもの、やうであつた。微笑を帯びた將軍は、極めて莊重に次のやうな演説を日本語で力強く試みたの

である。

私ハ、今日、諸子ノ壯快ナル動作ヲ見テ感ジタル所ヲ一言スルノ榮ヲ元帥閣下ヨリ與ヘラレマシタ。

諸子ハ、總テニ於テ熱心ニシテ、且ツ誠實ナルハ、年齢ノ加ハルト共ニ、後來大英國民タル榮譽ヲ有スルコトヲ疑ハズ。

余ガ幼時、教ヘラレタル所ヲ信ズルニ、男子ハ、他人ノ難シトシテ、恐レ、避クル所ニハ、好ンデ自ラ進ンデ、之ニ當ルベキデアル。此目的ヲ達スルニハ、常ニ體力ヲ鍛ヘ、智ト勇トヲ練リ、仁愛アリテ、人ニ信ゼラレネバナラス。諸子ハ、世人ニ尊信セラル、ノ徳ヲ養フテ、寸時モ怠ルコトナシ。故ニ成長ニ隨テ、大英國ノ光輝ヲ益々大ニ發揚スルハ余ノ確信スル所デアル。

終リニ諸子ノ益々勇健ナルヲ禱リマス。

この原稿は將軍自ら起草したものであるが、英國政府から特に將軍に專屬隨行を命ぜら

れてゐたウードロフ大尉は、これを次のやうに英譯して口演し、聴くものをして感動せしむるに深かつたのである。

I am filled with admiration at the parade of Boy Scouts which I have seen before us to day and I much appreciate the honour which Field Marshal Lord Kitchener has done me, in asking me to say a few words to you. I see at once that you are all in earnest and ready to do your best for your country.

And I know, that if you continue to do as you are doing at present, you will, all of you, become useful citizens of Great Britain.

Personally, ever since I was a boy, I have always been taught and thoroughly believe that the most important thing in life is to try and do what others are afraid of doing, because they fear the obstacles which they may have to face. In order to carry out this object in life, you must train not only your bodies

physically, but also your minds—both in wisdom and courage. Be charitable to all men. Be believed by everybody.

Above all, never forget for a moment that you must obtain the respect of everybody and never do anything which will make people doubt you.

Thus, I am sure that, when you grow up, you will all help to increase the glory of Great Britain and will keep up the glorious deeds of your ancestors.

Finally I wish you all the best of luck and happiness.

將軍自ら起稿した日本語の演説ミウドロフ大尉の口演した處を對照すれば、頗る興味が感ぜられる。ミ云ふのは——英語で述べたものは、譯を看做すよりも、寧ろ將軍の語りしものを詳細に涉つて解釋したものであるからでもあるが、乃木將軍が英吉利の少年に向つて「……男子ハ、他人ノ難シトシテ、恐レ、避クル所ニハ、好ンデ自ラ進ンデ、之ニ當ルベキデアル」ト高調した處は、唯だ言葉の上からでも、不朽の大なる教訓させねばならぬのみでな

く、將軍自らの信條を赤裸々に告白したものと稽へるこゝが出来らるであらう。この信條あつて乃木希典てふ大人物は玉成し、難攻不落の旅順口も攻陥し得た。空論にあらず、修辭上の巧智でもないのである。

……ミ沁々感するのであるが、長府の乃木邸を訪問し、舊邸の記念館に保存せられてをる丁字形の鋏頭に題した將軍の左の手記を見るならば、更に英國のボーイスカウトに演説した將軍の言葉が強く吾々を打つ。

此丁字鋏頭ハ、明治三十九年一月、旅順二百三高地東麓ニ獲ル處、以テ露國軍人忍耐、克艱、勇猛ノ意氣ヲ表彰スルニ足ル。凱旋歸途ニ於テ、桂彌一兄ニ贈リ、多キテ語ラザル所以ナリ。

乃 木 希 典 手 記

この丁字形の鋏頭ミ云ふのは、唯だ鐵製の鋏のみで、柄はないが、その鋏の兩端は丸くな

つてをる。製作した時には尖鋭なるものであつたらう。而して二〇三高地の防備を堅くするために、露國のものが此の鋸を使用したが、二〇三高地は岩石から成つて作業が唯だ困難なるのみでなく、新に補充を受けることも出来ぬので、連続して之を使用したために、斯く尖端が丸くなつてしまつた。又更に思へば、この丁字鋸を使用したものも、或は戦死し、傷く。戦死し、傷けば、又更に代つて使用するものがあり、何十人かの勇士が之を使用したであらう。その記念の丁字形の鋸頭を特に桂氏に贈つた將軍の心は、記した文章と共に、深く吾々に考へしむるものがある。

英吉利のボーイスカウトに演説したこみや親しかつた桂氏に丁字鋸を贈呈したこみから思出でられるのは、乃木氏の揮毫に就てある。乃木將軍に「御揮毫を……」と懇請すれば、それが親しい間柄であつても、決して承引しなかつた。直ちに拒絶したが、何かの機會——例へば、洋行するこみか、赴任するこみか云ふやうな場合——には、快く揮毫し、將軍自ら

持參されるやうなこみが少くなかつた。

松木中將(直亮)は大尉時代——明治四十年十二月より翌々年九月——に乃木將軍の副官として深く信頼せられたのであるが、後に少佐になつてから——明治四十三年七月、獨逸大使館付武官輔佐官を命ぜられたので、滯歐中の箴諷を乞ふた。將軍は「ウム。左様か、何かしよう」と快諾し、數日の後に將軍は自ら扇面に次のやうに揮毫したものを齎して贈られたのである。

夫日出之郷、陽氣所發、地靈人傑、食饒兵足、上之人、以好生愛民爲德。下之人、以一意奉上爲心。至於其勇武、則皆根諸天性、此國體之所由尊嚴也。抑所謂勇武者、非惟勁悍猛烈以逞其威、蓋亦必發於忠愛之誠。請論其略。素盞鳴尊斬蛇獲劍、以爲是神劍也、不可敢私。大日貴神獻其平國之矛、曰、天孫若以此治國、必當平安。方此此時、素盞鳴尊獲罪於天祖、大日貴神將避國於天孫、而不下管、不怨朝廷、乃獻其寶器、以輸奉。上

松木中將此の箴誠を眞に祕藏してをるご云ふが、こゝに記して一讀せる
 私も、力強い或るものを痛感する。

……ご記述してをる中に、雲のやうに感懐は湧き、思出でが涯しもなく徂徠するが、殊に
 將軍が山本伯（權兵衛）のために揮毫した左の富嶽を詠じた一絶は、乃木氏の面目を語つて
 餘蘊なきものであらう。

私は微吟して常に生氣を感じるのである。

峻嶒富嶽聳三千秋
 赫灼朝暉照三洲
 休レ説區々風物美
 地靈人傑是神州

(きまつ) 行外海佐少木松藤

◇支那馬車に乗る

旅順を訪ふて第一に誰をも刮目せしむるものは、白玉山に屹立する表忠塔であらう。この
 堂々たる表忠塔は、明治四十年六月二十日を以て起工し、翌年十一月十二日竣成を告げたが

記念の竣工式は明治四十二年十一月二十八日を以て舉行し、伏見宮貞愛親王殿下台臨あらせられ、東郷大將と乃木將軍も出席したが、殊に乃木將軍は静子夫人を伴ふた。

滿洲の十一月は非常に寒い。凜烈と云ふ形容は少し誇張に失するであらうが、寒く、風も亦強い。併し寒氣も、風も、緊張した來會者には問題でなかつた。明治三十七年二月九日、旅順攻撃の第一彈を發射して以來、翌年一月一日に至る約一ヶ年間に我が海軍、陸軍に在つて戦死、病歿した二萬二千七百十九の英靈を慰め、偉勳を不朽に傳へるために、この表忠塔を建設したものであることを思へば、寒さも、強い風のことも考へる暇さへない。そして來會者の緊張し切つた無數の眼は、何時か乃木、東郷の二將軍に吸ひつけられるやうに、力強く注がれるのであつた。注ぐまいとしても、自然に注がずにはゐられなかつたのである。見よ、「海の東郷」は未知の人々の前に座席を占めた處女のやうに、謹まやかに俯向いてしまつてゐるではないか。恐らく瞑目して深く當時を思ひ、仆れた部下のこころを考へてゐるのであらう。この偉人好き反襯をなす「陸の乃木」は式が進行するに共に、劍に兩手を支

へ、次第に顔は仰向き、天の一方を睨んでゐるかのやうな姿勢になる。この巨人も恐らく瞑目して深く當時を考へ、又歿した其の部下のこころを思つてゐるのであらう。實に興味を唆るコントラストであつたが、この歴史的の光景を見て、追憶せざるを得なかつたのは、明治三十七年十二月二十日、第三軍の駐營してゐた柳樹房に乃木、東郷の兩雄親しく會見して握手した涙ぐましい状況である。

その日のこころは、本書の五九七—八頁に記したが、海軍中將子爵小笠原長生氏著『乃木將軍と東郷元帥』中の「前書」(九頁)にも、秋山海軍中佐(眞之、後の中將)の談話として次のやうに記されてゐる。

旅順港内にあつた露國艦隊も、明治三十七年十二月下旬に至つて、殆んど全滅に歸したので、東郷司令長官は、自分等を隨へて、同月十九日大連灣を上陸され、翌日乃木第三軍司令官を訪問せられたのである。

私は是れまで種々なことに都合つて來たが、未だ此の時のやうに思出深い場面を見たことはなかつた。

つたれ。東郷、乃木大將が真心籠めて握手せられた、その刹那の光景と云ふものは、到底忘れることの出
來ない印象を私に與へ、追憶するたびに、何とはなしに涙ぐましくなつて來るのだよ。考へると其の
筈され、半歳に亘つて大敵と戦ひ、寒暑と戦ひ、風雪と戦ひ、東郷大將とすれば、十餘艘の艦艇を失
つたのと、許多の部下が忠烈の死を遂げたことを偲ぶあまりか、髭鬚が白さを増したし、更に乃木大將
としては、一段切なかつたであらう。二愛子の死をも、微笑を以て聽き、それを切ても面目とせれば
ならぬとは、人生こんな悲惨なことが又とあらうか、それさへあるに、毎日々々百千の勇士が、忠義に
斃れる報告に接するとは、よく氣が狂はなかつたと思ふ程だよ。かうして悪戦、苦闘をつゞけた、兩
將軍が、今や辛うじて其の目的を達しようとし、こゝに握手の機會を得たのだもの、兩者の眼に涙が
光つたのも無理ではあるまい。その餘りに痛烈な光景に打たれて、我々幕僚は一人として頭を擡げてお
たものになかつたよ。

今、又我が乃木、東郷の二將軍は、平和輝く旅順の地、思出での白玉石の表忠塔下に歴史
的の光景を描いてをる。來會者の緊張した眼が自然に二將軍にそ、がれたこゝも、正に左様
でなければならぬ。……乃木將軍は起つた。肅然として祭壇に進み、恭しく祭文は讀まれ
るのであつた。

前第三軍司令官陸軍大將乃木希典、謹みて我戰友二萬有餘人ノ靈ニ告グ。嗚呼、諸士功
ヲ立テ、國ニ報イ、生テハ軍人ノ本分ヲ全クシ、死シテハ朝廷ノ褒崇ヲ蒙ル。諸士夫レ遺
憾ナカルベシ。余、當時ヲ追想スル毎ニ、諸士ノ奮闘、壯烈ノ狀、歴然トシテ目ニ在リ、
而シテ幽明途ヲ異ニス。余輩餘生ヲ保ツモノ、豈無量ノ感ナカラシヤ。是ニ於テ同志相謀
リ、一大塔ヲ築キ、以テ諸士ノ忠烈ヲ表彰セントス。天下ノ人士相競テ贊助スルモノ數十
萬人、遂ニ地ヲ白玉石ニ相シ、經營スルコト三歳、今ヤ其工既ニ竣レリ。事
宸闈ニ達シ、金幣ヲ賜ハル。嗚呼
聖恩鴻大限リナク、中外ノ欽仰愈々深シ。諸士ノ精神、偉勳ハ千載ニ傳ハリテ朽チザラ
ン。在天ノ英靈、尙クハ其レ來リ格レ。
八分目にさ、げられてゐた祭文は、次第に低くなり、朗々たりし聲も、何時か曇つた。同

時に來會者も自然にうなだれ、涙が止度もなく流れる。祭文を卷いた將軍は一禮し、その席に引返さうともせず、又頭を垂れ、再び一禮し、更に亦塔を仰ぎ、又更に……三度目に一禮して自分の席に黙々復するのであつた。

この祭文の中の最後の「……在天ノ英靈、尙クハ其レ來リ格レ」ミある「格レ」の一句は、深く將軍の心したもので、普通ならば「……來リ饗ケヨ」ミする。この時も原文は「來リ饗ケヨ」ミしてあつたといふが、これでは何ミしても満足し得られなかつたので、將軍はいろ／＼考へて「……來リ格レ」ミし、これを碩學鹽谷時敏翁に問ふた。處が「……來リ格レ」がい、ミのこゝであつたので、斯く訂正して讀んだのである。

露西亞の頑守してゐた時代の白玉山は、半永久的の堡壘が設けられてあつたが、こゝに表忠塔を建設するこゝになつてからは、山嶺を平かにしたので、從來の高さより非常に低くなり、海拔四百四十二呎を算するこゝになつたが、頂上に二百十八呎の表忠塔が屹立してゐるので、訪ふものをして感動せしめる。殊に塔内の螺旋形の楷梯二百四十三段を登つて展望

すれば、當年の我が將卒の營ならざりし苦闘が追想せられる。

表忠塔の竣工除幕式が終つても、乃木將軍は猶ほ滞在し、知友、關係者を歴訪したのみでなく、小學校から依頼されて講演もした。無邪氣な一年、二年生には、物言ふ毎に、バクバクする將軍の義齒が可笑しく印象せられたがために、聲高く笑ふにか、はらず、眞剣に語つて將軍は辭し、出づれば漂然として旅順の町を右往し、左往した。さう云ふ場合に於ける將軍は、何時でも支那馬車に乗つてゐるので、俄かに路上の將軍を發見した當局は、驚いて騎馬の警察官を警衛に附けるやうなこゝもあり、式後に於ける將軍は、如何にも晴やかに、心安さを感じるもの、やうに見受けられた。

或日、靜子夫人と共に、姪婿の白須氏の官舎に於て晚餐を攝り、快く酒盃を傾けた將軍は需められるまゝに、

かたらしと思ふこゝ、路はさやかなる

月にはゑこそかくさゞりけれ

「こ記した。」「語らじこ思ふ心は牙やかなる月にはるこそ隠さざりけれ」こは、蓋し將軍が其の感慨を伴りなしに、端的に語つたものであらう。何事も語るまい、總てを胸底に秘してをかうこ決心はしてゐるが、皎々たる月、その月にのみは内密にしようにも、心の奥底まで照破してしまふので、隠さない、否な、如何にしても隠すことが出来ぬ云ふ、當時に於ける心境を極めて率直に述べたものでなければならぬ。……かう云ふ場合こ時を對照して此の一首を誦すれば、佳調たるこが沁々感ぜられるが、それが表忠塔の除幕式の直後である丈けに、更に興味を伴ふのである。

◇ 赤十字病院にて

明治四十三年八月二日、片瀬の夜は次第に更けて十一時も過ぎ、晝間の勞れで學生は死んだやうに熟睡してゐた。然るに突如こして醫務室のドアを輕打するものがある。直ちに宿直の醫員がドアを開けば、そこに軍服姿の乃木將軍が立つてをる。室内に請じて注目す

ば、左手を以て左耳を蔽ひ、苦痛に堪へぬらしく「今日の夕刻から頻りに騒鳴して痛む。實は明朝まで我慢する考へちやつたが、餘り疼痛を訴へて眠れぬので、夜分晩く御氣の毒ちやが診察を願ひたい」このこであつた。

同年七月二十一日から學習院の學生と共に、乃木將軍は相州片瀬の游泳場のテントに起居してをつたが、耳疾に罹つて醫員に診てもらつた。處が症状は急性中耳炎の初期であつたので、醫員は「直ちに歸京して専門醫の治療を受けられますやうに……」こ勸告した。その勸告に對して將軍も「さう云ふこにしよう。併し明日は是非爲さねばならぬ要件があるので、それを終り次第に歸つて治療する。今の手當で餘程好くなつた。ありがこ」こテントに引返したが、翌日備さに再診すれば、決して放任せらるべきものでないので、更に醫員は「急ぎ歸京して御治療あられるように……」こ切言した。然るに將軍は「ウム、今日の要件が終つたら左様するこにしよう」こ苦痛を忍び、葉山に向つて出發したが、同地の御用邸に 皇太子殿下(大正天皇)の御機嫌を奉伺したのである。

葉山を辭して歸京した乃木將軍は、赤十字病院を訪ふて診療を乞ふたが、症狀決して樂觀を許さぬものであつたので、直ちに入院、加療するように勧めたにか、はらず、自邸に在つて手當てを加へ、入院しようしなかつた。親戚のものや友人も頻りに懇請したが、これに耳を將軍は傾けなかつた。然るに頑張り通してゐた將軍が俄かに入院するこゝになつたので、聊か意外に感じたものもあつたが、聞けば「我意を通さず、大任を荷へる身體なることを考慮し、入院、加療せよ」てふ電報が山縣公からこゝにいた、めであつたといふ。こゝに乃木將軍の百日近い病院生活は始められたのである。

赤十字病院に入つた乃木將軍は、同月十日、病院長平井軍醫總監(政道)、副院長鶴田軍醫監(禎次郎)、ドクトル山上主幹(兼輔)、賀古軍醫監(鶴所)、岡田帝大教授(和一郎)等對診の上で、鼓膜の穿開術を受けて掛腫し、疼痛も大に減退したが、穿孔聊か狭小であつたがために、十四日を以て擴開し、比較的排膿も多量であつたにか、はらず、乳嚢突起化膿の症狀益々加はり、十六日には脈五十至に減じ、左頂部に握痛があつて頭痛増し、腦壓迫の徴

候があるので、全身麻酔の下に左乳嚢突起鑿孔術を行ひ、骨片を除き、蜂窩内の蓄膿を排泄して消毒綿帯をなし、この大手術も二十五分間で終つたが、爲に疼痛も減じ、憂慮せられてゐた腦膜炎其の他生命に危険を及ぼすやうな範圍を脱したので、近親者も知己も漸く安堵するに至つたのである。

當時の新聞紙は「乃木將軍の症狀頓に悪化し、危篤に陥る」こゝへ報道したが、事實に於て左様でなかつたにしても、生命に對する危険の伴ふ状態に瀕し、乃木氏を熟知するこゝ否にか、はらず、憂慮せしめたが、手術後は症狀も日一日佳良になつた。そして輕快するに共に、將軍は其の鬱懷を詩や和歌に托したが、

臥病安閑三閱月 不關人生幾波瀾
玻璃窓外風多少 落葉無聲秋雨寒

(註) 著者曰く——「臥病」を「臥蓐」、或は「臥床」としたものがあり、又「三閱月」を「五十日」としたものである。

ミ云ふ如何にも詩人らしい作がある。少しく批評がましくなるが、三閏月も病臥して淋しい秋雨を玻璃窓から悵然と眺めてゐる病人の状が彷彿し、病院生活を文字通り描寫したもののたるこゝが感ぜられる。かと思へば、

盛名功業世皆欽 千古誰全道義心

榮辱死生機一髮 可憐勇士就生擒

ミ云ふ剛快なものもあり、乃木氏の面目を窺ふべきものであるが「還暦の翌年障子つき破り」てふ意味淺からざる狂歌があり、これに賀古鶴所氏は「春はむかしに立ち回へりけり」ミ附けてをる。

然るに「輕快して遠からず退院し得るであらう」ミ四圍のものが漸く愁眉を開いたにもかかはらず、突如として發熱し、平井院長を驚かしたこゝがある。何のための發熱か全く不明であつたが、實は徒然の餘り將軍は附添人の留守に廊下を通る何處かの新聞賣から夕刊を買ひ、それを窃かに耽讀した。そして連載物の講談に源頼朝と義經の兄弟仲の面白くなかつ

た一節があつたので、それを憤慨したが爲めの發熱であつたミ云ふ。併し院長にも其の原因が分らぬので、少からず心痛せしめたが、間もなく平靜に復したのである。

乃木將軍の健康著しく恢復し、退院の日も亦近くなつた十一月十七日、皇后(後の昭憲皇太后)陛下は赤十字病院に行啓遊ばされ、乃木將軍夫妻に特に病室に於て拜調を賜はつたのみでなく、御見舞料として金幣竝に御菓子を下賜せられたのであるが、當日の大なる感激を次のやうに將軍は表はしてをる。

いたつきは我おこたりのミがなれば

大みめぐみになにミこたへん

そして御下賜の金幣と御菓子とを平井院長その他に「恩賜を頒つ」意味に於て將軍は頒つたのであるが、各宮殿下から御見舞として下賜せられた草花に對しても、

たまはりの花のかずく夏をあした

秋のゆふべも色さやかにて

云ふ感激を以て表現してをら、矢張り入院中のものに、

枕上刀三尺 壯心今尙在

病餘衰弱甚 何以報三天恩

云ふ一律がある。「何以報三天恩」は、蓋し將軍の心意氣を想見すべきものではなからうか。明治天皇の御信任、そして昭憲皇太后陛下の御仁慈……ご想起するのみでも、猶ほ感懐に堪へぬのである。

赤十字病院では、増築中の病室その他の建物が落成を告げ、且つ諸般の設備殆んど整頓したので、皇后陛下の行啓を仰ぎ、台覽の榮をたまはるこゝになり、陛下は明治四十三年十一月十七日午後一時五分御出門、同四十分御著遊ばされ、平井院長御先導、階上御便殿へ御案内申上げたが、御著の際に皇后宮大夫の香川伯(敬三)から特に平井院長に「乃木には御謁見

を賜はるから……」この御内意があつたので、その事が將軍に即刻傳へられた。

さう云ふこゝを豫期せぬ將軍は「病體であるから……」と警戒し、羽織、袴をつけ、病床に於て遙拜するこゝにしてゐたが、御内意を院長から傳へられて恐懼し、東病棟五の側第二號室の副室板の間の廊下に面した入口の右に將軍、その背後三步左に靜子夫人が起立し、陛下の通御を恭しく御待ち申しあげてゐた。

平井院長の御先導で、陛下は東病棟から順次玉歩を運ばせ給ふたが、乃木將軍の病室の前に御近づきになるに共に、數歩前に前行してゐた香川伯を追越させ給ふやうな速歩を以て御進み遊ばされ、乃木將軍夫妻に最も御懇に「いかがですか」この御會釋があつたのみでなく、將軍に對しては「大切な身體であるから特に自愛せよ」云ふ有難い御言葉があり、靜子夫人には「長々の看病で疲勞したこゝであらうが、尙此の上大切にせよ」この御言葉さへあつたに仄聞する。餘り御長い御謁見であらせられるので、御先導の平井院長が恐悚して陛下の方を振返つたが、猶ほ御去りにならうとも遊ばされなかつた。

……ご記述するのみでも、私わたしは感激かんげきを禁きんずるこゝが出来できぬ。況いはんや當日たうじつの將軍しやうぐん及び夫人ふじんに於おてをやである。この小著せうちよの起稿きかうに眞しんに全靈ぜんれいを以もつて従事じゆうじした私わたしは、かう云いふ佳話かわと感激かんげきの裡うちに擱筆かくひつする。

—昭和四年七月十八日午後三時三十分—

予の許諾なくして本書中より脚色、上映、
翻譯、轉載を禁ず。 — 著者 —

昭和四年八月二日印 刷
昭和四年八月五日發 行

〔乃木希典〔奥附（特）〕〕
定價金參圓五拾錢

著 者 宿 利 重 一
有 所 權 作 著

東京市外世田ヶ谷町代田大原一〇九二
東京市外世田ヶ谷町代田大原一〇九二
發行人 宿 利 重 一

發 兌 東京市外世田ヶ谷町代田大原一〇九二 對 胸 舍

◇特約販賣所 東京九段偕行社—日本橋文原堂書店

乃木靜子 宿利重一著

◆製特版六四◆
圓三金價定

◇文部省認定・茗溪會推獎◇ 人間乃木の眞面目を忠實に描寫するこゝが私の責務である——こゝ大正二年六月、小著を公にして以來、更に資料の蒐集に努め、改訂をも怠らず、大正十五年十月、男爵阪谷芳郎、永田秀次郎兩氏の援助で増補版を刊行し、全國の女子師範學校、官公立高等女學校に各一部を寄贈したが、頒布を望む人々が少くないので、増刷して其の要望に副ふた。私が「乃木希典」にペンを執るこゝになつたのも、この「乃木靜子」を讀んだ乃木將軍と親交ありし各位の徳意に依るものであるが、人としての乃木將軍夫妻の生活を端的に描いたものが「乃木靜子」である——こゝ高調したい。次の來書は此の小著の眞價値を遺憾なく語るものであらう。丸山鶴吉氏は、往年ジュネーヴの軍縮會議に帝國全權子爵齋藤實氏の顧問役として渡歐し、その途次此の書柬を寄せられたのである。(著者)

紅海から

阿波丸にて 丸山鶴吉

拜啓 其後御機嫌如何で御座いますか、私も愉快なる航海を元氣で續けて居りますから御安心下さいませ。頂戴した「乃木靜子」早く讀みたいと思つて居りましたが、之れでも軍縮とか、世界平和とかいふことの豫備知識を早く得たいと思つて持込んだ本が可成りあつて、それにテツキでの遊びが中々ばづむので、順番が廻つて來なかつたためとう／＼釋迦の國セイロンを出發し、マンガルの波高き海を過ぎ、アラビヤ海に入つて後に漸く貴著にとりかかりました。忌憚なく告白しますと、讀み始めたときには、何だか一種バダシチックな書き方だなと思ひましたが、進むに従つて引きつけられて、とう／＼一氣に讀了致しました。航海中は中々魂をつめて讀めるものではありません。一氣に讀んだ書物は外には一つもありません。そして靜子夫人の家庭生活は榮譽ある、然し非常に淋しい一生であつた事を痛切に感ぜさせられました。然し修養が造り上げた、その尊い人格の輝きが世の婦人に對するどれだけの教訓と感化とを與へるか知れないと思ひました。全國の女學校にも御配附になつたことを知りまして、難有い事だと只管感謝致しました。そして蘇峰氏の序文にもあつた様に、本統に乃木將軍の卒面を明瞭につかむ事が出來たやうに思はれて感謝に堪へませぬ。

御手紙には齋藤全權夫人へも一冊差上げてくれとありましたが、松原君から届けられたのは一冊丈け
でありましたから、私が讀んだ後、私の感興と大兄の好意を傳へて、私への本を差出して御一讀を乞ひ
ました。紅海に入つて二三日でスエズに著くといふ晩です。春子夫人（御承知の通り齋藤全權夫人は海
軍中將子爵仁禮景範氏の令嬢です）は、貴著を持つて私の部屋まで來られて、早や讀み了つたものと見
えて返却されました。そして感慨深いおもさして「私の實家は、湯地家と非常に懇親で、湯地家が東京
引越の時は、私の母は同じ船で大阪まで來たのであります。そして湯地の長男の洋行の時は、五人組の
一人として、私の父も一緒に米國に行つたのです。私の母などもお七つあんと呼んで、お七つあ
ん時代のことをよく知つて居ります。殊に海軍に出た三男の方も、東京でもまだ鹿兒島人の少ないときで、
よく行き來をして居りまして、海外の航海なごすると、幼なかりし自分に何かお土産を持つて來てくれ
られました。そして私の名など呼ぶ事はなく、おいおかめ〜といはれて居りました。そんな關係があ
るので、本當に此の書物には泣かされました、泣けて〜仕様が御座いませんでした」と繰返してお話
になりました。更に改めて難有く御禮を申し上げます。祈御健康。（六月十一日）

◇發兌

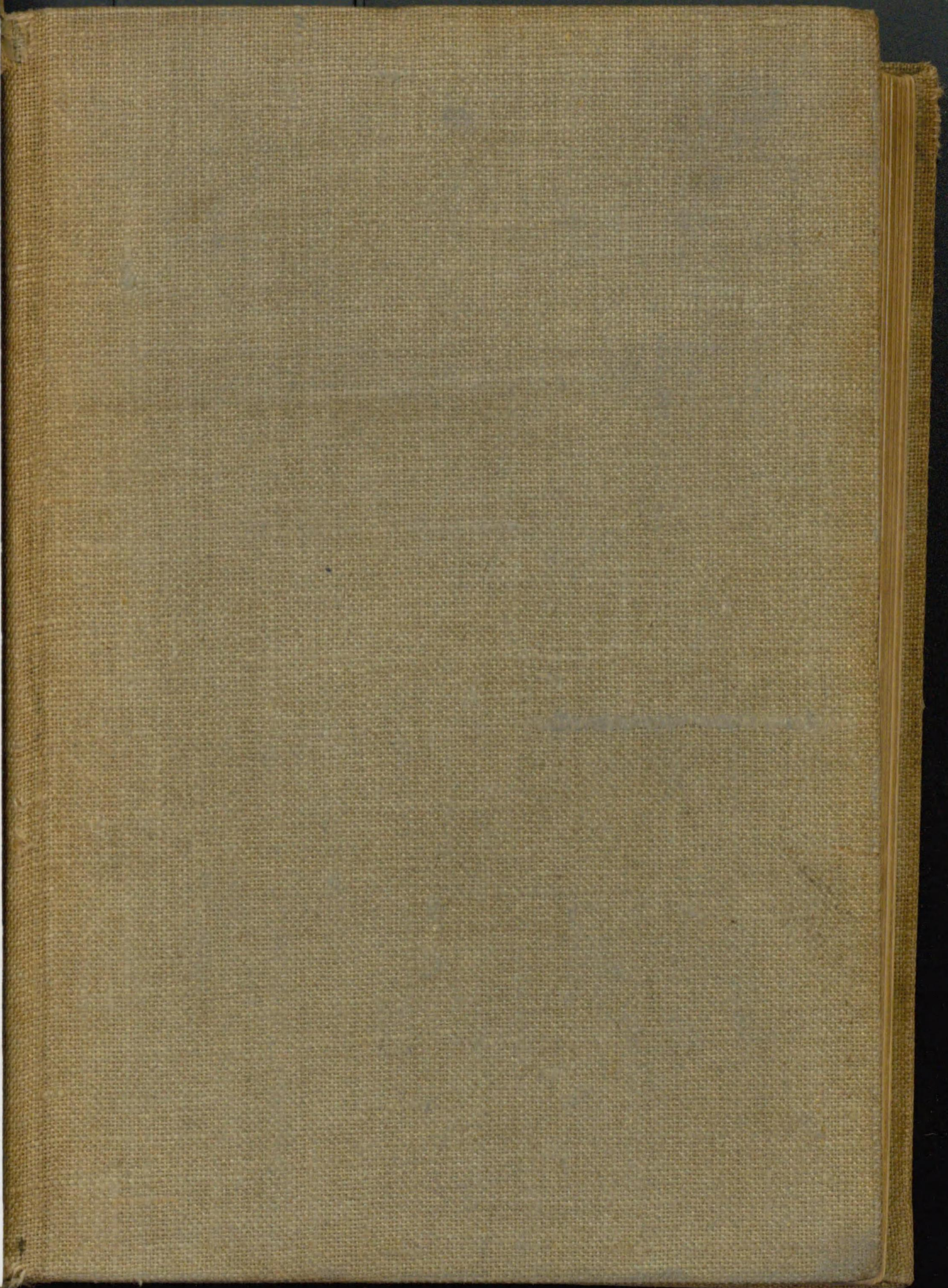
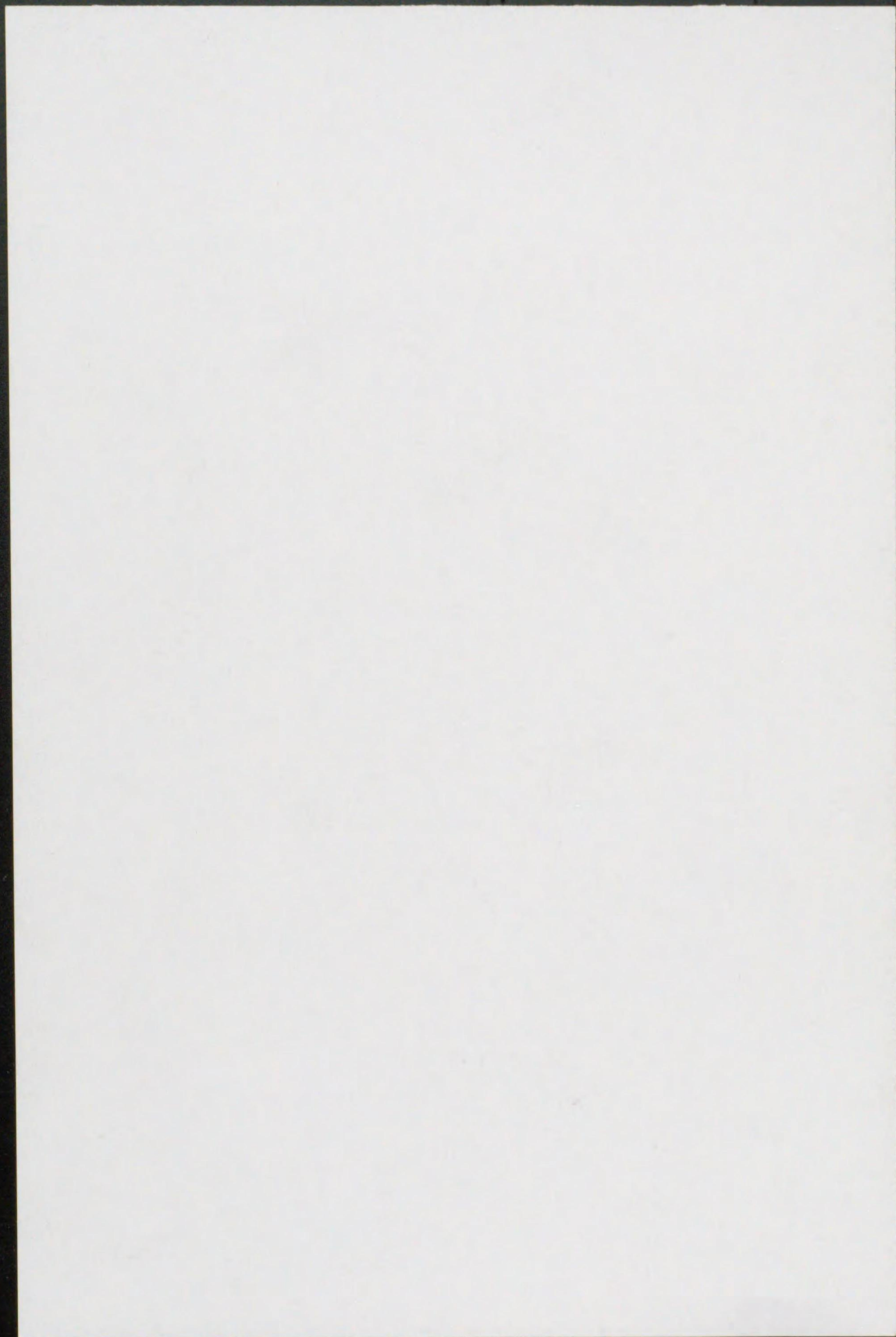
東京市外世田ヶ谷町代田大原一〇九二

對胸舍

發賣

東京堂
北隆館

◇

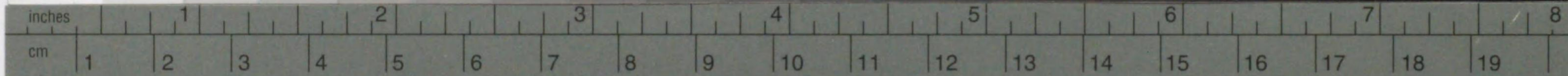


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

